昭和60年 9 月 1 日号（毎月 2 回 1 日、15日発行）第28巻・第17号　通巻638号　昭和54年 6 月 2 日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
17
9.1.



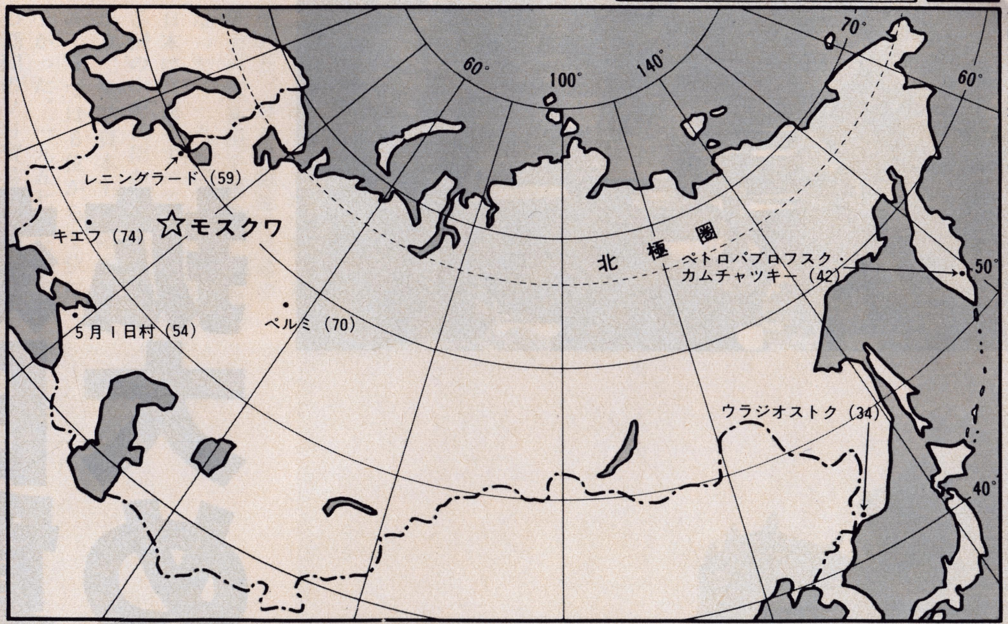
第2次世界大戦終結40周年

特集 前途洋々のソ連極東地域

第17号　1985年9月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　ウラジオストクにある第2次世界大戦で戦死した太平洋艦隊水兵の記念碑の前で（カメラ　ユーリー・ムラビン）

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3－9－13
振替口座　東京9－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1－44
振替口座　東京0－13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

対日貿易・経済協力の拡大めざすソ連

経済学博士候補
セルゲイ・ジーコフ



永野重雄・日本商工会議所会頭・日ソ経済委員会委員長と会見するニコライ・チーホノフ・ソ連共産党中央委政治局員・ソ連閣僚会議議長（一九八三年、モスクワ）
▼ウォストーチヌイ港（沿海地方）の石炭処理コンプレクス



戦後のソ日関係の発展は、両国の貿易・経済関係を抜きにしては考えられない。ソ日貿易・経済関係はこの数十年間両隣国を結ぶ相互関係全体の一種の基礎になってきた。

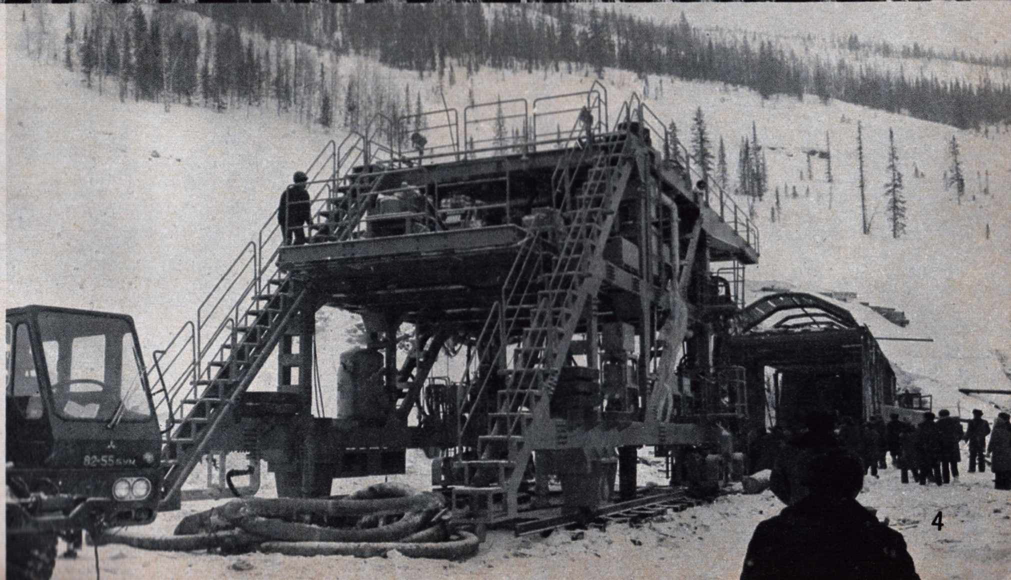
強固な条約・法的基盤がつくられ、また、両国が持つ強大な科学技術力、地理的な近さ、外国貿易構造の相互補完性といった要因に恵まれたおかげで、ソ日間の貿易額は一九五八年以降、ソ連と他の先進資本主義諸国との貿易より2倍以上高いテンポで増大し始めた。日本は急速にソ連の最大の貿易相手国の一つになった。一九七〇年までには日本はソ連のすべての貿易相手国の中で16位から7位に上がり、先進資本主義諸国グループでは6位から1位に上がった。一九五七―七〇年の期間のソ日貿易額は20倍以上に増大した。

ソ連と日本との貿易・経済関係の形態も多種多様になった。全国的な貿易のほかに、地域的な貿易交流（沿岸貿易



▲日本へ向かうソ連産木材

バム鉄道の建設ではバイカル山脈の下を通るトンネル工事に日本の"フルカワ"製の掘進装置が使用され、よい成績を収めた。



を通じて）と協同組合同士の貿易交流が成功裏に発展している。六〇年代の後半からはソ日経済関係の総体の中に、シベリアとソ連極東の天然資源開発でのコンペンセーション（相殺）方式による協力がしっかりと加わった。経済協力の共同プロジェクトの実現は（ソ連と日本は全部で八つのこのようなプロジェクトをすでに遂行したか、または継続中である）、相互の信頼に立脚し、長期の見通しに立った二国間関係の新しい水準の反映であった。

ソ連と日本の貿易・経済交流の活発化とその形態の拡大の結果は、ソ日貿易額の一層の増大であった。七〇年代半ばには両国間の貿易額は年間約二〇億ルーブルに達した。ソ連は日本市場への丸太材の大供給国になった（極東の森林資源開発に関する若干のコンペンセーション協定による用材の供給がそのために大いに役立った）ほか、綿花、くず鉄、石炭、カリ塩、魚製品、海産物の大供給国になった。日本の商社は大口径管、圧延鋼材、多くの種類の機械と設備（特にプラント）、化学製品、織物の対ソ輸出を拡大した。ソ日経済協力には今世紀末までの期間を予定したプロジェクトも登場した（たとえば南ヤクーチアの炭田開発協定。この協定によって石炭の供給は二〇〇〇年まで続くはず、総計一億tを超える）。

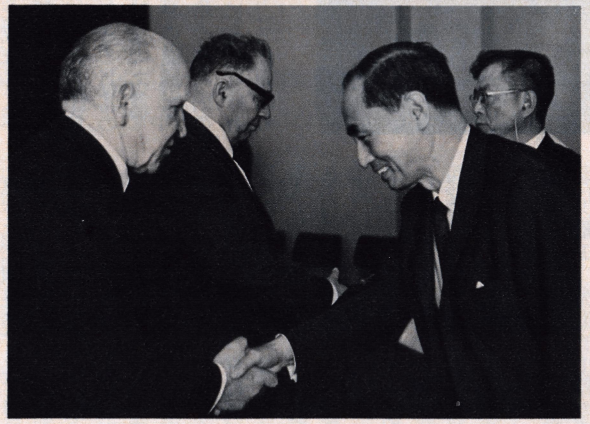
しかし七〇年代の後半から、特に近年、ソ日貿易・経済関係には一連の好ましからぬ傾向が見られた。貿易額の増大テンポは極めて不安定なものになり、一九八三―八四年には戦後になって初めてソ日貿易の絶対的縮小が見られた。一九八二年の最高水準（三七



ソ日通商条約の発効後ナホトカ港に入港した最初の日本商船"大正丸"（一九五八年）



日本からコンプレッサー工場用プラント2基と自動車用電気部品製造プラントを買い付ける契約に調印して握手するB・オレイニク全ソ工業機械輸入公団総裁(左)と納入側の吉田五郎・日本電気精器社長（一九六九年、モスクワ）



日本＝ソ連＝欧州間大陸横断通信ケーブルの開通式でソ連側関係者にお祝いを述べる中川融・駐ソ日本大使（一九六九年、モスクワ）



ナホトカ＝横浜航路の営業問題を審議する（左から）イワン・セミチャストノフ・ソ連貿易第一次官、山縣勝見・山下新日本汽船会長、ニコライ・シリャエフ・ソ連貿易省アジア貿易局長（一九七〇年、モスクワ）





億ルーブル)と比べて、一九八四年の貿易高は20%以上の減少となり、二九億ルーブルにまで落ち込んだ。貿易関係に重大な不均衡が現れ、八〇年代になってから対日貿易におけるソ連の赤字は年平均一五億ルーブル以上になっている。

その結果、日本は以前に占めていたソ連の外国貿易における主要な地位を失い、一九八四年の貿易額では西独、フィンランド、イタリア、フランスから著しく後れただけでなく、米国にも地位を譲って、先進資本主義諸国中ふたたび6位に下がった。

このような状態は一連の政治的、経済的性格の原因によるものである。

かつて戦後のソ日政治関係の正常化が相互貿易の発展や経済協力に強力な刺激を与えたように、両国の相互関係におけるあらゆる種類の政治的紛争は、実務的な接触の状態に否定的な影響を及ぼしている。このような種類の影響の最も明白な例が、一九八〇年に実施されたいわゆる日本の対ソ経済制裁の結果である。

一方、ソ日貿易の発展を抑制する経済的性格の諸原因の中で、まず第一に挙げなければならないのは、ソ日両国の国家経済に生じている構造的変化である。ソ連経済も、日本経済も生産の集約化と知識集約度を高め、資源節約の技術を導入する方針に沿って発展している。ソ連から日本へ主として未加工の燃料・原料物資が供給され、日本からソ連へは鉄鋼製品、化学製品、比較的簡単な種類の機械と設備――土木・建設用機械、巻き上げ・輸送機関などが供給されている伝統的な貿易構造は、両国の経済発展の主要な方向に次第にそぐわなくなっている。工業の原材料使用量とエネルギー使用量を少なくする方針に沿った積極的な工業再編成が行われている日本は、用材、石炭、金属鉱石などの買い付けに対する関心を以前よりも示さなくなった。同時にソ連からの機械製品の輸入増大に依然否定的な影響を与えつづけているのが、ソ連の科学技術力と機械、設備の供給国、先進的工程のライセンスの供給国としての能力の評価における日本商社の時代後れの態度である。日本がソ連で買い付けている機械・設備の量は、西欧諸国はもとより米国がソ連で買い付けている量よりも少ない。

日本の実業界は、科学技術進歩の促進と勤労者の福祉向上をめざすソ連の諸計画に注意深く対する必要があると思われる。これらのソ連の計画は、先進的な種類の製品とその生産工程に対する経済と住民の需要を満たすために対外経済交流の積極的な利用を予定しているからである。

最近ソ日貿易・経済関係で改善へ向けて一定の進展の兆候が現れたことは喜ぶべきことである。これらの進展は、ソ日経済関係の発展における現在の"不調"は一時的なものであるとの期待を抱かせている。5年の中断のあと、昨年12月に東京でソ日・日ソ経済委員会第9回合同会議が開かれ、両国の実務交流全体の発展の見通しに大きな関心が払われた。この会議での率直な意見の交換は協力の新しい方向を決定するのを助けたが、それらの方向には両国の経済と貿易の現在の発展段階の要求にもっと応える分野での協力も含まれている。特にこれは、ソ連の輸出品目に加工品や半加工品をより広範に加えることに関係している。化学工業と石油化学工業でのコンペンセーション・ベースでの協力の可能性が明らかにされ、非鉄金属工業、紙パルプ工業などでの協業化の見通しに関する意見の交換が続けられた。ソ日貿易を支援し、いわゆる"シベリア・ランド・ブリッジ"による日本の貨物の通過輸送に対するサービス能力を強化するために、ソ連極東の港湾基地(ウォストーチヌイ港)を共同で拡張する問題に大きな関心が払われた。以前に日本から買い付けた企業を近代化し改修する面での協力は、ソ日両国に少なからぬ利益をもたらすことができるだろう。周知のように、投資政策のこの方向はソ連でも、日本でも重視されている。

また、たとえば第三国の市場で若干の種類のソ連製品を販売するために日本の"総合商社"の販売網を利用する三国間貿易による協力の分野でも、一定の見通しが開けている。三国間取引とコンペンセーション方式の協力を連結することによって、明らかに、両国経済の構造的変化の条件下でソ日共同プロジェクトの効率と相互利益の向上を促進できる。最近ソ連または日本とその主だった貿易相手国との経済交流の有望な基本的形態の一つになっている生産協業化も拡大できる可能性がある。

当然ながら、ソ日貿易・経済関係の深化とその形態の拡大は、すでに試験ずみの分野での協力の一層の発展と改善に基づいて起こるだろう。ソ連は東部地域の生産力を発展させる大規模な目的別計画の実現を続けることになっている。東部地域は天然資源に富んでおり、その採掘と加工の組織は輸出産業部門の創設をも前提としている。同時に日本は工業の構造的再編成にもかかわらず、将来も燃料・原料製品の最大の輸入国の一つであり続けるだろう。もっともこの燃料・原料製品は部分的に加工されたものがますます大量に輸入されるようになろう。

この見地からソ日森林資源開発プロジェクトを改善し、日本への用材の供給では挽材その他の木材加工製品の割合

上右　藤野忠次郎・三菱商事社長と会談するレオニード・コスタンドフ・ソ連化学工業相(一九七一年、モスクワ)

上　安西浩氏の名はすでに数十年来ソ連の実業界に広く知られている。ニコライ・オシポフ・ソ連貿易次官と懇談する安西浩・日ソ経済委員会天然ガス委員長(一九七二年、モスクワ)



下　科学技術協力に関する議定書に調印するジェルメン・グビシアニ・ソ連閣僚会議国家科学技術委員会副議長(右)と松宮康夫・東京貿易社長(一九七五年、モスクワ)





ソ日間では漁業問題に関する交渉が定期的に行われている。写真はモスクワのソ連漁業省で行われたカメンツェフ漁業相と渡辺農林水産相の会談(一九七九年7月)



上　ソ日・日ソ両経済委員会の指導者たちの会合は定期的に行われるようになった。写真はイワン・セミチャストノフ・ソ連第一貿易次官(左から2人目)と日ソ経済委員会代表委員の植村甲午郎、永野重雄、古藤利久三の三氏(一九七四年、モスクワ)



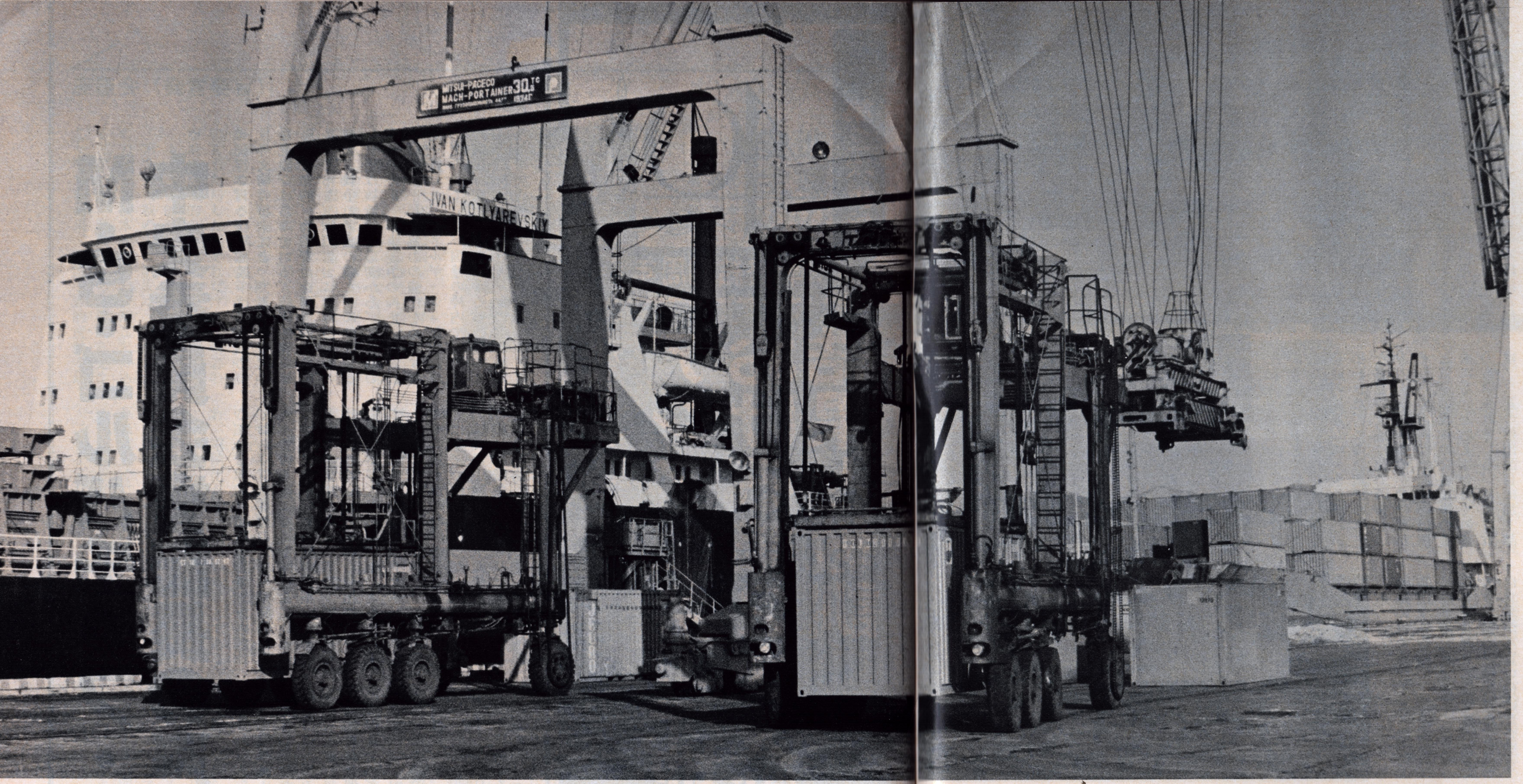
下　ソ日・日ソ経済委員会第8回合同会議の開会式(一九七九年9月、モスクワ)

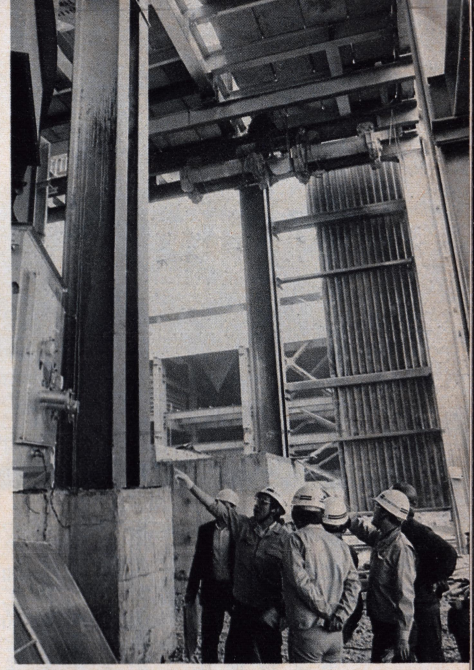


サハリンの養魚場建設での協力に関する契約の調印式(一九八二年、モスクワ)



ハバロフスク=新潟間国際空路開設10周年に当たり新潟空港で催されたセレモニー(一九八三年6月)





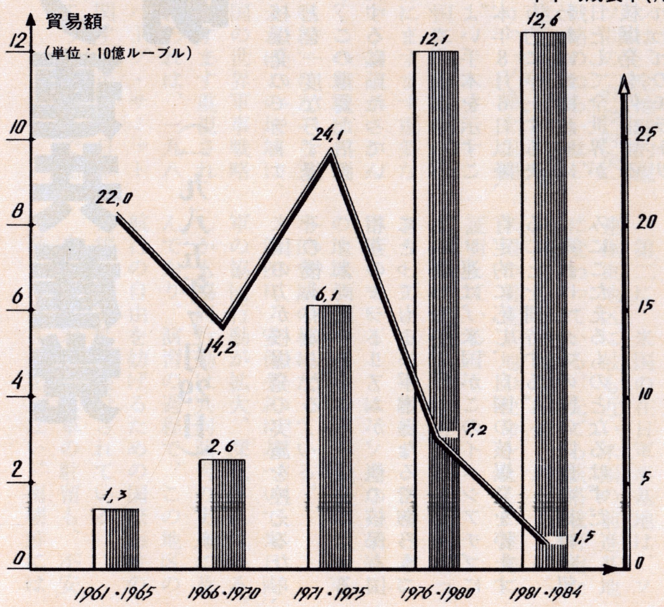
ネリュングリ選炭工場（ヤクート自治共和国）の設備の組み立てに参加した日本の〝スミトモ〟の専門家たち

◀日本からウォストーチヌイ港（沿海地方）に到着したソ連船イワン・コトリャレフスキー号から陸揚げされるコンテナ

ソ連国営航空アエロフロートの旅客機ＩＬ62機は毎日、成田空港に着陸している。



1960—80年代のソ日貿易



を高めなければならない。サハリン・ガス・油田開発プロジェクトも、両国の協力の最大級の分野にすることができる。その第一段階はサハリン島陸棚に有望な石油・ガス鉱床があることを確認した。現在双方は、地質調査の段階から、油田の設備建設と20年間にわたる対日供給を予定した石油・ガス採掘への移行に関する交渉に取りかかった。

このように、客観的、主観的性格を持った若干の困難があるにもかかわらず、ソ日貿易・経済関係発展のかなりよい見通しがあることを確認できる。これらの見通しを実現するための必須条件は、双方が発生する問題と課題の解決に対して相互の関心と実務的態度を示すことである。貿易と協力の拡大は、ソ日両国民間の友好と善隣関係を深め、極東地域全体の平和と情勢の安定を強固にする確実な道である。

M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委員会書記長の声明

（一九八五年7月29日）

続行される核軍拡競争は、すべての世界文明の将来にとってきわめて大きな危険をはらんでいる。核軍拡競争は、膨大な知的、物的資源を創造的な目的からそらし、国際舞台における緊張の増大、戦争の脅威の強まりにつながる。

ソ連は核時代の最初から、核兵器の蓄積の停止、軍事競争の抑止、国家間の信頼と平和的協力の強化をめざす首尾一貫した、エネルギッシュなたたかいを行っている。国連の枠内や、軍備の制限・削減問題に関する多国間および二国間交渉におけるソ連のきわめて大規模な活動全体は、このことに従属している。ソ連は軍事的優位をめざしておらず、軍事力のできるだけ低いレベルでの均衡の維持を支持している。

すべての核兵器実験の停止は、われわれの確信するところでは、地上における戦略的安定と平和の強化に対する重要な寄与となるはずだ。というのも、こうした実験のプロセスにおいて新しい、より危険な種類やタイプの大量殺りく兵器が作られ、改良されていることは秘密ではないからだ。

核兵器実験完全・全面禁止国際条約の締結に好条件をつくりだすため、ソ連は核兵器保有諸国に対し相互に合意する日からあらゆる核爆発のモラトリアムを取り決めることを一度ならず提案した。残念ながら、この重要な措置はいまのところ実現するにいたっていない。

危険な核兵器ストック増強競争の停止の促進をめざし、よい手本を示すことを願って、ソ連は本年8月6日以降、あらゆる核爆発を一方的に停止する決定を採択した。われわれは米国政府に対し、広島の悲劇の日として全世界が記念するこの日から核爆発を停止するよう呼びかける。われわれのモラトリアムは本年いっぱいとする。しかし、米国の方が核爆発の実施を控えるなら、その後も有効となる。

ソ米両国のあらゆる核爆発に対する相互のモラトリアムが、他の核保有国にとってもよい手本となるであろうことは疑いない。

ソ連は、米国がこのイニシアチブに肯定的に応じ、自国の核爆発を停止することを期待する。

それはすべての国の国民の期待と望みにこたえるものとなるはずだ。

第2次世界 40 大戦終結40周年

座談会（発言要旨） アジア・太平洋地域における第2次大戦の結果と教訓

第2次世界大戦終結40周年に当たり、本誌編集部ではソ連の学者たちによる座談会をモスクワで開いた。ここにご紹介するのは出席者の発言要旨。この座談会にはアジア・太平洋問題の著名な専門家であるゲオルギー・キム・ソ連科学アカデミー準会員(61歳)、ノダリー・シモニア歴史学博士(53歳)、ドミトリー・ペトロフ歴史学博士(58歳)、ワシリー・ミヘーエフ経済学博士候補(31歳)が参加した。

アジア・太平洋地域の平和と安全の諸問題

ソ連科学アカデミー準会員、ソ連科学アカデミー東洋学研究所副所長
ゲオルギー・キム



第2次世界大戦終結以来すでに40年になる。40年という歳月を間においたおかげで、いまあの壮大な戦争の意義や人類の運命に対する第2次大戦の影響を、客観的に認識し、評価できる。ドイツ・ファシズムと日本軍国主義が引き起こした戦争は、五〇〇〇万人以上の人命を奪い去り、欧州とアジアの諸民族に数え切れない災苦と物質的損害をもたらした。それだけに侵略者の壊滅に決定的な役割を果たしたソビエト軍の歴史的功績はきわめて大きい。

第2次大戦の主な結果は、国際舞台の力関係が根本的に変わったことである。第一に、帝国主義の危機から発生した戦争の結果、帝国主義的反動の最先鋭勢力は壊滅し、同時に社会主義諸国が誕生した。

戦争の第二の最も重要な成果は、植民地をかかえる帝国が崩壊し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの国が植民地的従属から解放され、これらの国が自主的発展の道を歩み始めたことである。

さて大戦後40年になるが、世界はあい変わらず騒々しく、不安げである。政治、経済的に見て最も複雑な地域の一つであるアジア・太平洋地域の国々にとって、この40年間はかなりの曲折があった年月だった。この地域ほど、それぞれの経済の発展水準がまちまちで、それぞれの社会・経済体制、文化、宗教、伝統がひどく違う国々が、隣り合わせているようなところは、世界にない。この地域の国々の歴史的発展の特殊性が、多分にこれらの国の複雑な相互関係を生み出したといえる。そしてこの関係は時々激しい紛争を引き起こしている。植民地時代の遺産や新植民地主義の新しい形態の出現も、アジア・太平洋地域の社会・政治情勢を不安定にしている要因である。もう一つの不安定要因は、この地域の多くの国が全地球的な軍拡競争にまき込まれ、軍国化が強まっていることである。

アジア・太平洋地域にソ米中日の4大国が〝隣り合っている〟ことも見逃してはならない。4大国の軍事力がこれほど近くに顔を向け合っているところは、世界でここだけだろう。

このような一連の客観的、主観的な要因の結果、太平洋地域には戦後ずっと危機的情勢が潜在的にも、現実的にもつくり出されている。そこでわれわれソ連の学者から見て極東・太平洋地域全体の平和と安定を実際に直接脅かしていると考えられる若干の要因について、もっと詳しく話したい。

主な不安定要因は、米国の太平洋政策構想および太平洋地域における米国政府の実際行動である。

まず第一に強調しておかねばならないのは、米国の太平洋政策がソ連を敵視する米国の世界戦略の一部であることだ。五〇年代の「集中報復」、六〇年代の「柔軟対応」、七〇年代の「現実主義的おどし」の構想に次いで、八〇年代前半期にワシントンは、全地球的規模や地域的規模の米ソ間の「直接対決」戦略をとった。この戦略のねらいは、ソ連を軍拡競争に引き込み、局地的核戦争のチャンスを作り、「ソ連を包囲すること」であった。

現在米国では、米国にとって極東と太平洋水域は戦略的にますます重要な存在になっているという論議がさかんに行われている。よくこの地域は、欧州と並ぶ対ソ「第二戦線」になぞらえられている。言い替えればこの地域は、ソ連包囲をねらう米国の世界軍事戦略体系の一部として、ますます重視されているのである。われわれは、一九八三年のウイリアムズバーグ・サミットの軍事・政治問題に関する声明（日本も署名）を、まさにこういう観点で見ている。

ここで強調しておくが、ソ連は米国と太平洋地域諸国との友好関係に反対したことは一度もない。しかしワシントンが同盟関係を米国の反ソ世界戦略に利用しているとなると、ソ連の人々の胸に不安がこみ上げてくるのはいかんともしがたい。

われわれは西側の学者との会合などで、どうしてソ連の世論は日米安保条約をあんなに激しく批判するのか、とよくたずねられる。そこで私は日米軍事・政治同盟にわれわれが否定的態度をとる、幾つかの最も重要な理由を挙げておこう。

第一に、安保条約は事実上ソ連を唯一の軍事的潜在敵と見ている。

第二に、米国の在日軍事基地は、ソ連極東地区に最も近い米国の前進基地に変わっている。先ごろ核搭載可能なF16が三沢基地に配備されたことは、米国の前進基地の使命をとくに雄弁に証明している。

第三に、誰の目にも核の搭載がはっきりしている米軍艦艇が、常時日本に寄港していることは、ソ連ならびにこの地域の他の国々にとって、いつも軍事的脅威の種になっている。

第四に、安保条約に基づいて米日両軍の協同行動が拡大、深化されている。しかも協同行動は共同演習の実施に及んでおり、演習の過程で、この地区の航行の自由を妨げるための国際海峡の封鎖の可能性が検討されている。

南朝鮮における米軍の駐留も、不安の種とならざるをえない。南朝鮮には

以前から各種の核兵器運搬手段（戦闘爆撃機F16を含む）が配備されている。米第7艦隊の核搭載艦艇は、釜山と鎮海に寄港している。

周知のとおり、朝鮮戦争のとき米国の政府高官は、朝鮮と中国での核兵器の使用を検討した。その後も核兵器の使用うんぬんという無責任なことを言う人々がやはりいる。たとえば元米陸軍参謀総長エドワード・マイヤー大将は、「南朝鮮の米軍は必要なときに戦術核を使用できる」と語った。

日本と南朝鮮の軍事行動の足並みをそろえようという米国の意図は、ソ連だけでなく、恐らく太平洋地域の他のすべての国々をも、不安におとし入れよう。

ソ連「包囲」策や極東における「新しい」戦線づくりに対抗して、ソ連は止むをえず、極東国境の防衛力を強化しなければならなくなった。

ここ数年来米国はANZUS〔オーストラリア、ニュージーランド、米国の太平洋共同防衛体〕軍事ブロックの活動を重視している。オーストラリアがソ連の軍事的脅威を受けているなどと信ずる者は、恐らく誰もいまい。ところが「全地球的脅威」うんぬんというテーゼがさかんに言いふらされ、ソ連海軍が脅威の源になっているかのように言われているのである。米国の対ASEAN（東南アジア諸国連合）政策の若干の面も、われわれの警戒心を高めないわけにはいかない。ASEAN諸国地域には、米海空軍の最大の基地群が置かれており、新聞の報道によると、米国防総省はこの地域に核弾頭、巡航ミサイル、化学兵器を追加配備する問題を検討中といわれる。

また米国は東南アジアの緊張緩和を阻止するために、「カンボジア問題」で「厳しい」方針をとることをわざと奨励し、支持している。

戦後の歴史が証明しているとおり、太平洋地域の緊張緩和は、多分に諸大国の現実主義的な、分別のある政策いかんにかかっている。この数年間に太平洋地域の緊張緩和の動きを妨げる不信行為が、かなり多く見られた。

だからこそソ連は、政治分野ならびに軍事分野にわたるような極東における信頼醸成措置に関する交渉の必要性に大きな関心を寄せているのである。

ソ連は、軍拡競争（とくにミサイル・核の）の抑制と本質的な縮小、核兵器の先制不使用、非核保有諸国に対する核兵器の不使用、世界の海（とくに最重要シーレーン水域）での海軍の活動水準の引き下げなどの中核的な問題を含む一連の提案を発表しており、これらの提案はよく知られている。

ひとことでいえば、ソ連はアジアが二度と流血戦争の舞台となるのを防ぐために、アジアの政治情勢を健全化し、平和と安全の強化に役立つあらゆる対話に応じる用意がある。ソ連は歴史的な経験を踏まえ、40年前の悲劇が繰り返されるのを防ぐために全力を尽くしている。

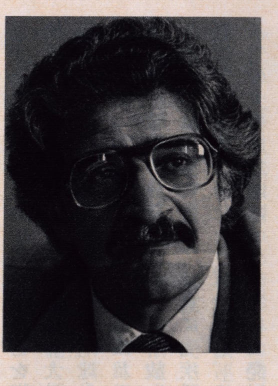
1



1　至るところでソビエト軍将兵と歓談する現地民の輪ができた（一九四五年8月、満州）
2　ソビエト軍水兵を歓迎するハルビン市民（一九四五年8月）

帝国主義植民地体制の崩壊

歴史学博士、ソ連科学アカデミー東洋学研究所部長
ノダリー・シモニア



幾世紀にもわたる歴史の経験は、戦争はそれを勃発させた侵略者たちの目的にかなうような結果を、いまだかつて一度ももたらさなかったことを教えている。第2次世界大戦もこの意味で例外ではない。世界の最も侵略的な勢力によって企てられたこの戦争は、彼らの完全な壊滅をもって終わっただけでなく、その最も重要な、帝国主義列強が予想だもしていなかった結果の一つとして、古い植民地帝国群の崩壊をもたらした。

第2次世界大戦の結果をだれがどのように解釈しようとも、この戦争における民主勢力、社会主義と進歩の勢力の勝利こそが、解放運動の力強い高揚と民族解放革命の最初の一連の勝利のための好都合な国際的条件を作り出す上で決定的な役割を果たした、というのは確かな事実である。ここで言っているのは、世界的な規模で力関係が質的に変わった結果到来した、植民地諸国および半植民地諸国の国民の運命における歴史的転換点についてである。

戦争はいずれにせよ、多くの東方諸民族を巻き込んだ。もちろん、直接巻き込まれて、国土が戦場になった国もあるし（中国、フィリピン、インドネシア、インドシナ諸国、ビルマ、マレー、シンガポール）、国民のかなりの部分が戦時動員され、他の国や地域の戦場に投入された国もある（太平洋地域の戦場では、戦争開始時までの西側列強の兵力の55％が現地兵だった。インドでは戦争の全期間を通じて二五〇万人以上が召集された。約一〇〇万のアフリカ人が連合軍に動員され、二〇〇万人が遠征軍に奉仕した）。しかしいずれの場合も戦争は、かつては戦争と無関係だったアジアとアフリカの数百万の人々を活発な政治活動に引き入れた。東方の多くの国では、戦争は占領と植民地主義に対する武力抵抗のための軍事・政治的前提を作り出した。抵抗の過程で新たな愛国的、革命的組織が生まれ、一連の国では民族武装勢力が形成され、政治的、組織的、軍事技術的経験が蓄積された。

いまでは西側であれこれ言われているが、当時は、帝国主義列強は自分の植民地を失うなどとは思ってもいなかった。帝国主義列強はいずれも、植民地および半植民地の再分割あるいは新たな分配しか考えていなかった。

2

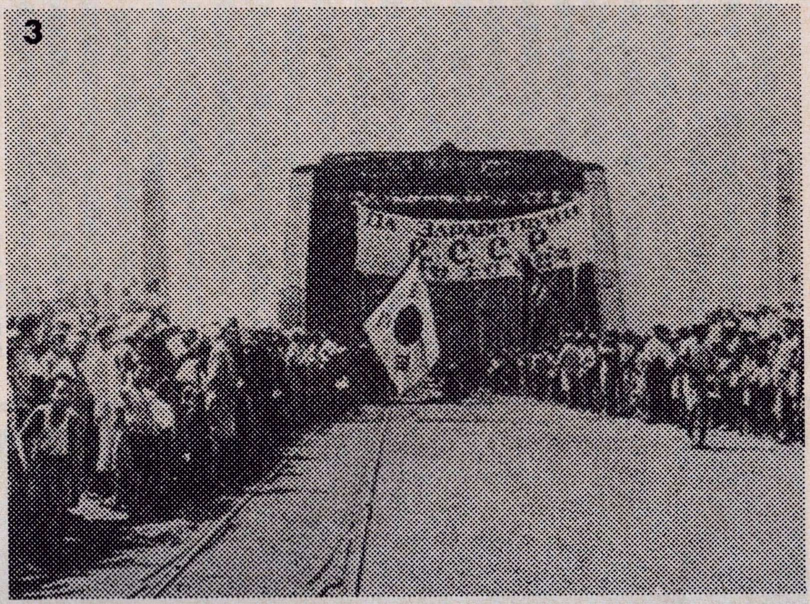


「私が首相になったのは、大英帝国の解消にさいして議長を務めるためではない」というウインストン・チャーチルの言葉はよく知られている。彼に代わって一九四五年6月に首相になった労働党のアトリーも同じ立場だった。英国国会での最初の演説の一つで彼はこう声明した──「われわれはまだ、欧州におけるわれわれの義務の遂行、日本占領と、何よりもまずアジアにおけるわが植民地の回復のために、かなりの兵力を維持する必要がある」

帝国主義諸国のこれらの目論見は、ソ連の弱体化や戦時に経済力と軍事力を強化し、一時的に原子兵器を独占していた米国を先頭とする西側の絶対的世界支配を前提にして成り立っていた。

だが、帝国主義のこの期待は実現しなかった。宗主国は次々とかつての植民地および勢力圏を失い始めた。しかも、その失い方たるや、次のことを指摘すれば十分だろう。第1次世界大戦開始までに植民地と半植民地は地球上の全領土の72％、全住民の69％に及んでいた。戦後の最初の10年──解放をかちとった民族にとっては真に〝疾風怒濤〟の時期だった──だけでも、アジアの大植民地国はすべて独自の発展の途についた（インド、パキスタン、インドネシア、ベトナム、ビルマ、スリランカその他）。一九五〇年代の後半からはアフリカ大陸も目覚め始めた。このプロセスは一九六〇年に頂点に達し、〝アフリカの年〟と呼ばれるこの年には一度に17の独立国が生まれた。







座談会（発言要旨）

最終的には、今日まだ植民地主義と人種差別主義の抑圧のもとにあるのは地球の全人口の約0・3％、領土の1％以下にすぎない。

植民地および半植民地諸民族の解放運動と革命闘争の具体的な成果は均一ではなかった。解放運動の進行に対する世界社会主義体制の影響が特に強く感じられたところでは、民族解放運動の広範な流れを背景に、民族・民主革命の独自のうねりが起こった（中国、ベトナム、朝鮮）。ここでは運動は民族解放運動の段階にとどまらず、質的に新しい型の社会主義革命に転化し始めた。一九五〇年代末からアフリカ、アジア、ラテンアメリカの一連の国で、社会主義指向を宣言する革命的民主主義の政権が確立し始めた（このような国は今日すでに約20に達した）。他の多くの国ではブルジョア勢力および小ブルジョア勢力が政権についた。

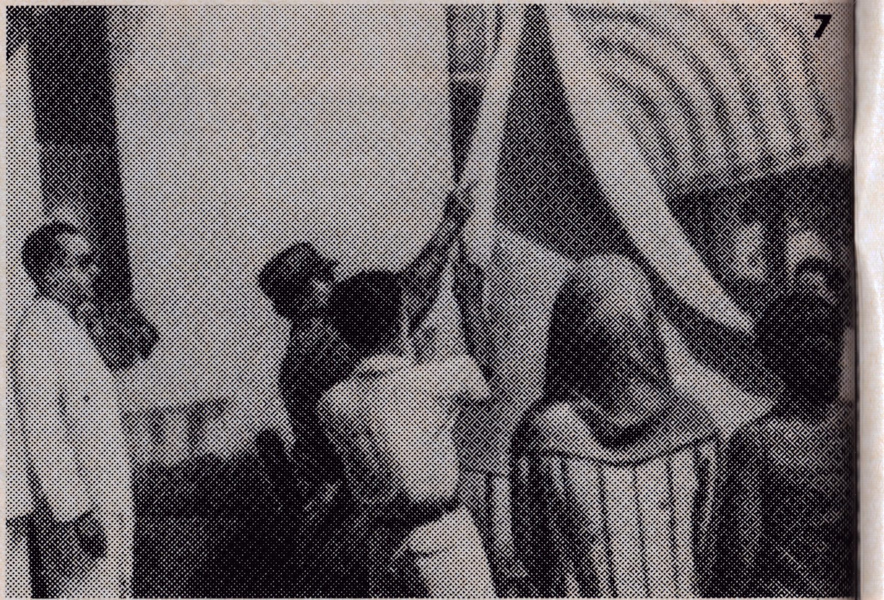
しかし、発展途上国間のあらゆるちがいにもかかわらず、反帝国主義を基盤とする連帯が生まれ、広がった。この意味で、今年その30周年を記念したバンドン会議は重要な道標となった。アジアとアフリカの29カ国がここで初めて一堂に会したのである。一九六一年にはベオグラードで、今日すべての大陸の一〇〇カ国以上を結集する非同盟運動の組織的基礎が置かれた。社会主義諸国と非同盟諸国の立場は、現代の多くの主要な問題で一致する。それは平和共存の問題であり、軍拡競争、とりわけ核軍拡競争に反対する闘争の

「第2次世界大戦におけるソ連の偉大な勝利、ソビエト軍による帝国主義日本の壊滅……は、長い植民地的抑圧からわが国を解放し、朝鮮人民に新しい自由な生活への道を開いた」
金日成。論文『レーニンの教義はわれらを導く星』（1955年）

※　※　※

「ベトナム人民は、欧州とアジアのファシストを粉砕し、ファシストの奴隷体制から人類を救う大業に決定的な貢献をしたソ連に、つねに感謝するだろう。ソ連の勝利はわが国の8月革命の勝利に役立った」
ホー・チ・ミン。ハノイの集会での演説（1956年）





3　ソビエト軍を歓迎する朝鮮の人々（1945年8月、ピョンヤン）

4　ピョンヤンのモランボン丘に建てられた朝鮮解放戦没ソビエト兵士の碑

5　ピョンヤンでのソビエト軍歓迎風景（1945年8月）

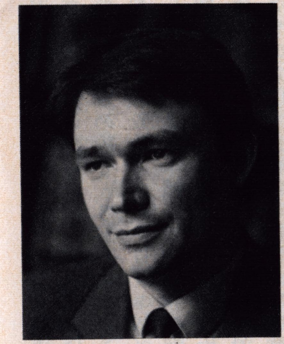
6　ベトナム民主共和国憲法採択に関する法律に署名するホー・チ・ミン（1946年、ハノイ）

7　インドネシア独立宣言記念式典の国旗掲揚（1945年8月17日、ジャカルタ）

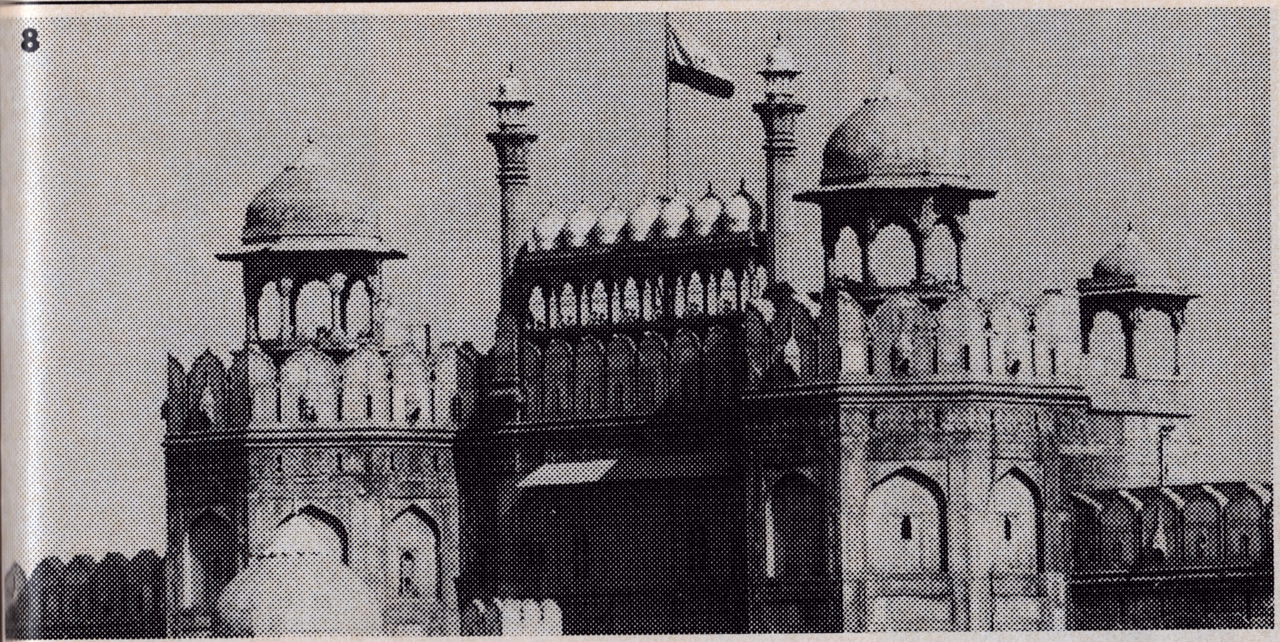
問題（これは日本国民の願望とも共鳴する）であり、現在の不公平な世界経済秩序を民主的で平等な基盤の上に再構築することを求め、新植民地主義のあらゆる現れに反対する闘争の問題その他である。

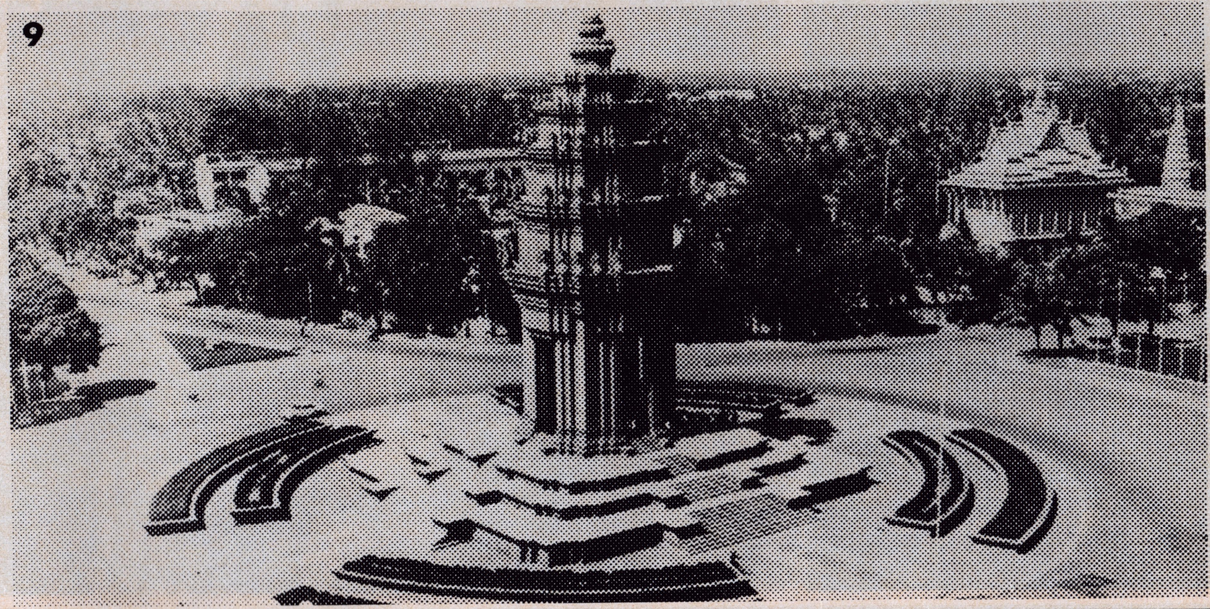
他の諸国と並んで日本は、影響力のある大国として、アジア・太平洋地域における安全保障の面で、重要な肯定的役割を果たすことができるし、果たすべきだと思われる。第2次世界大戦の悲劇的教訓は、そのような努力が真に必要であることをわれわれに示している。アジア大陸はもはや、地域的破局の舞台にも、全地球的破局の舞台にもなるべきではない。

アジアに誕生した社会主義諸国



社会主義世界体制経済
研究所主任研究員
ワシリー・ミヘーエフ





第2次世界大戦におけるソ連の勝利は、民族解放運動が高揚する大きな要因の一つになり、民主主義勢力が強まり、中国、朝鮮、ベトナムに人民民主主義体制が確立する好条件づくりを促した。

このソビエト軍の勝利が中国人民の解放闘争に及ぼした重要性を特徴づけて、当時の第8人民革命軍部隊指揮官チャオ・ウェイツィンは「8月9日のソ連赤軍の満州進攻は、力関係を根本的に変えた。われわれは守勢から攻勢に変わった。赤軍はわれわれを破滅から救った」と語った。一九四五年8月に赤軍が中国東北部深く進攻したおかげで、中国の革命民主勢力はカイライ国家「満州国」政府を倒し、民族独立の闘士――進歩的人々から成る民主主義的権力機関をつくり、中国全土の民主化をすすめる好条件ができた。ソ連の援助があったればこそ、中国の新しい革命政権は国土の荒廃を克服し、東北部の経済、政治状況を安定させることができ、遂には中国における人民革命の勝利を促すことができたのである。こうして一九四九年10月1日、中華人民共和国の建国が宣言された。

一九四五年8月15日、赤軍は朝鮮を解放して（ほかの国の軍隊は朝鮮解放に参加しなかった）、朝鮮人民の民族独立の達成に決定的な貢献をした。こうして、朝鮮人民の民族解放運動が人民民主主義革命に発展転化し、社会変革が実現する条件が生まれた。朝鮮民主主義人民共和国の金日成主席は「偉

「日本帝国主義の侵略に対抗する苦しい年月の期間、そしてとどのつまりは日本帝国主義を壊滅させたたたかいで、中国人民は最初から最後までソビエト国民の支持と援助を受けた。それがとくに現れたのは1945年にソビエト軍が参戦し、中国人民と肩を並べて戦ったときだった」

ソ連政府あての毛沢東と周恩来のメッセージから（1953年9月2日）

※　※　※

「もしソ連が存在しなかったなら、もしファシズムの打倒をめざす第2次大戦で勝利を収めていなかったなら、もし日本軍国主義が壊滅していなかったなら、……われらの頭上にのしかかった国際反動勢力は、もちろん、今の何倍になっていたか見当がつかない。こういう状況下ではたしてわれわれは勝利することができただろうか？　もちろんできなかった」

毛沢東（1949年）

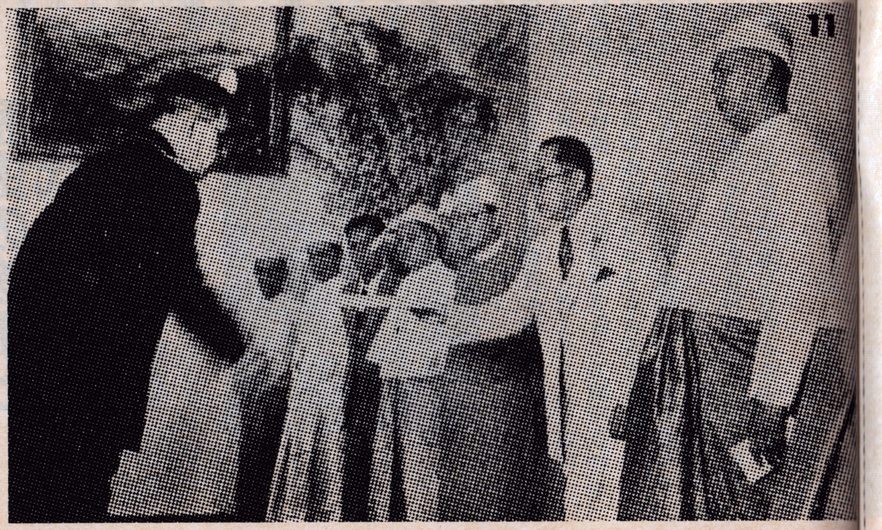
8　オールドデリーの旧王宮ラル・キラ（赤城）にひるがえる独立インドの国旗（1947年）

9　プノンペンの中心にあるカンボジア独立記念碑

10　ビルマ独立記念日にパレードを閲兵するサオ・シュウェ・タイ大統領（1951年1月4日）

11　サオ・シュウェ・タイ大統領に信任状を奉呈するアレクサンドル・サバリエフ駐ビルマ・ソ連大使（1951年5月21日）





大なソビエト軍は一点の私利私欲のない援助の手を朝鮮人民に差しのべてくれた……ソビエト軍将兵はわが共和国の北部のいたるところでわが国の労働者や専門家と肩を並べて熱心に働き、その自己犠牲的な勤労の貴重な成果をわれわれの手に残してくれた」と述べた。しかし米国の分裂政策は全半島にまたがる全一的な朝鮮の民主主義的独立国家の成立を阻んだ。一九四八年9月9日、朝鮮半島の北半部で革命的民主主義勢力が人民に支持されて朝鮮民主主義人民共和国の樹立を宣言し、何百年にわたる朝鮮人民の歴史に新紀元を開いたが、南朝鮮では米国の支持の下に茶番劇のようなインチキ「自由選挙」が行われて、反動的な親米政権が樹立された。

一九四五年8月の勝利に終わった赤軍の行動や、戦時中ファシスト・ブロック諸国の軍隊に占領されていた国々における民族解放運動の展開は、ベトナムの民族革命勢力が全面蜂起の火ぶたを切る有利な条件をつくりだす助けとなった。一九四五年8月13日、インドシナ共産党全国協議会で蜂起開始の決定が採択され、武装蜂起の炎が全土を巻きこんだ。8月19日にはハノイ、同月25日にはサイゴンで蜂起が勝利を収め、9月2日にはベトナム民主共和国の樹立が宣言された。ホー・チ・ミン大統領は第2次大戦でのソ連の勝利の意義を強調して「ソ連の勝利はなによりもまず、一九四五年8月のわれわれの勝利を促した要因であった」と指摘した。8月革命が勝利した結果、北ベトナムで人民民主主義体制が樹立された。南ベトナムでの革命的変革過程は、その後一九四六年12月のフランス帝国主義部隊の侵攻によって中断された。

国土の解放と人民民主主義権力の樹立後、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国とベトナム民主共和国は、それぞれ社会の経済、政治構造の民主主義的改造を急ぎはじめ、社会主義建設の道を進んだ。この歴史的事件は、社会主義世界体制の枠の拡大とこの体制へのアジア大陸の国々の加入を意味した。これらの3国はその社会・経済発展の問題を解決するにあたって、ソ連の経験を活用し、ソ連の援助と支持にたよった。

その実例を挙げよう。ソ連は中国の国民経済の復興と発展に大きな援助を与えた。解放直後の10年間に、ソ連の援助で中国に最新の設備をそなえた大工業施設、工場、企業が二五〇以上建設された。ソ連の経済・技術援助があったからこそ、中華人民共和国は、以前に国内になかったような多くの工業部門、たとえば航空機工業、自動車工業、トラクター製造業、重機械工業、精密機械工業などをつくりだせたのである。またソ連は二万四〇〇〇件以上の科学技術文書を中国に引き渡したが、そのなかには一四〇〇件の大きな近代企業のプロジェクトや、おびただしい件数の工業製品、機械、原料品の製造ライセンスが含まれていた。これは、戦後の日本に対する米国の技術供与の規模を上回る史上最大の最新技術の供与である。ただし、日本は10年あまりの間に特許、ライセンス、ノー・ハウ料として六〇億ドル以上を支払ったが、中国は前述の技術供与をすべて事実上無償で受け取ったのである（設計図や書類の複写は有償）。

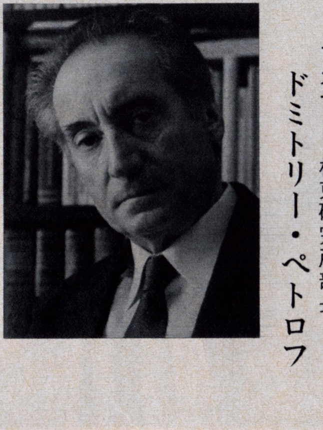
朝鮮民主主義人民共和国の社会主義経済の基礎づくりもやはりソ連など社会主義諸国の政治的支持と経済援助の下で進められた。一九四九年3月17日付のソ朝経済・文化協力条約を発展させるために、二億一二〇〇万ルーブルの借款が供与された。朝鮮民主主義人民共和国が樹立されてから10年の間に、ソ連などの社会主義諸国の援助の下に、朝鮮の国民経済の基盤となる約50の工業施設が復興、建設、もしくは再建された。

ベトナム民主共和国の形成、発展のすべての段階で、ソ連などの社会主義諸国は、ベトナムに大きな経済・科学技術援助を与えた。ソ連とベトナムの経済交流は、帝国主義侵略の後遺症や経済の後進性の克服を助け、その交流範囲は電力産業、石炭産業、化学工業、機械工業などベトナムの国民経済の最重要部門の大半にわたった。六〇年代の中頃までにソ連の対ベトナム経済援助は、金額にして三億ルーブル以上に達し、ソ連の援助を得て復興、建設された工業施設は一〇〇件を超えた。

中国、朝鮮民主主義人民共和国、ベトナムが社会主義的建設の道を歩み始めたことは歴史的な重要性をもつ。社会主義世界体制は広がり、その地位は強化された。かつての後進諸国にとって、真に公正で人道的な社会の建設に移行する可能性が現実に立証されたのである。

平和の40年——歴史の教訓と現代

歴史学博士、ソ連科学アカデミー極東研究所部長
ドミトリー・ペトロフ



太平洋戦争の最後の砲声が止んでから40年たった。一九四五年9月2日に米戦艦ミズーリ号の甲板上で調印された日本降伏文書は、日本の支配層が国民を引き込んだ冒険を法的に締めくくった。

日本の軍国主義層が引き起こした侵略は、世界に高価な代償を強いた。アジア、太平洋地域の多くの国々の諸民族は、日本の占領下で苦難の生活を送り、何千万という人々が戦火の犠牲になったり、虐殺された。日本軍に占領された国々の物質的損害は非常に大きく、そのうちの数カ国は戦後20年にしてやっと復興できたほどだった。

もちろん戦争は日本国民自身にも高くついた。約三五〇万人が死傷したり、戦災や病気で死んだ。数十万世帯が家を失い、国富全体の$\frac{1}{4}$以上が消失した。さらに日本国民は、何の軍事的必要もなかった野蛮な原爆投下の犠牲になった。もしソ連が連合国に対する義務を守らず参戦に踏み切らなかったなら、戦争はさらに1年以上も続き、日本国民に新しい数限りない災苦と苦難をもたらしたことは想像に難くない。

終戦は、何百万という日本人の世界観と心理を根本的に変えた。戦争への憎しみと平和を願う気持ちは、文字通り社会のすべての層にしみ込んだ。これらの気持ちは、戦争の永久放棄をうたった条文として日本の基本法——憲法に法的に反映された。

憲法のこの条文は、連合国の戦時中の最重要協定であるカイロ、ヤルタ、ポツダム宣言と同じく、日本軍国主義の復活の可能性は永久に取り除かれねばならず、日本の平和と安全はすべての国と友好善隣関係を結ぶことによって確保されねばならないという、不易の事実に立脚している。

さて40年の歳月がたったわけであるが、その間に多くのことが変わった。しかし実生活は、日本の発展の大道として宣言された先の原則が、常に正しかったことを証明している。その大道を一歩でも外れたり、国の軍事力強化の方向へ押しやろうとしたりすることはすべて、アジア・太平洋地域全体の平和と安定の強化に役立たない。

アジア・太平洋地域の力関係の変化をじっと見守ってきた人々は、軍事、経済、政治面で日本を米国にさらに強くしばりつけ、米軍の機能の一部を日本に肩代わりさせて、日本をアジア・太平洋地域の軍事・戦略体制にますます深く引きずり込もうとしているワシントンの執拗な動きに警戒を強めざるをえない。

米国が日本の増大する軍事力を自分の目的に利用しようと努めていることは、誰の目にも明らかである。一九八四年度予算に関連した米国防総省の議会あての報告には、「日本の沿岸に接する西太平洋は、米国の対ソ核戦略で欧州と並ぶ最重要地域である」とあからさまに指摘されていた。

あらゆる点からおして、ワシントンは、日本を対ソ対決の最前線に押し出そうと努めている。以前は米国防総省も、日本が基地の提供と後方補給の確保で米国の軍事計画を側面から援助してくれたことで（つまり補助的役割だけで）満足していたが、今は米国の戦略体制の最前線で戦う役目を日本に割り当てている。

歴史の教訓を忘れてはならない。軍拡競争と緊張の激化は、アジアの情勢をきな臭いものにしている。こうした条件のもとでの各国の責務は、アジアに平和と安寧がいつまでも支配するための道を積極的に探求することである。

恒久平和と安全を確保する最も確実な方法の一つは、意見を交換し、建設的な解決策を共同で探求するための全アジア・フォーラムを開くことであろう。ソ連が提案しているのは、まさにこの方法である。この分野の問題は数々あって、いずれも非常な難問であるが、もしすべての関係国が善意を発揮し、平和の確立を真に願うなら、理にかなった互恵の合意にこぎつけることは完全に可能であろう。ソ連はこう考えているのである。

たとえばアジアでの不可侵、武力不行使に関する条約の締結は、少なからぬ意義をもつことができよう。モンゴル人民共和国が出したこの提案は、一連のアジア諸国の支持を得た。

アジア地域で軍拡がどんどん続いているとき重要な役割を果たしうるのは、信頼醸成措置に関する協定を結ぶことである。これは軍事行動の偶発の危険性を減らすだろう。ソ連はまた海洋における信頼醸成措置を、とくに太平洋とインド洋を含む最も交通量の多い水域に適用するよう提案している。これらの提案の実現と海洋における海軍の活動の縮小は、自国のシーレーンの安全にとくに強い配慮を示している日本の利益に完全に合致するだろう。

地域レベルでとりうる一連の措置と並んで、たとえば朝鮮民主主義人民共和国の提案に基づく朝鮮半島の恒久平和の確立やインドシナの社会主義諸国とＡＳＥＡＮ（東南アジア諸国連合）加盟諸国との関係調整を含む一連の亜地域的な問題の解決を考えることも、完全に可能であろう。これがソ連の見解である。

さて、日本はアジアにおける平和の道の探求で少なからぬ役割を果たすことができよう。大戦後40年間に世界の舞台での日本の役割は著しく高まった。経済の発展水準で世界第三の大国になった日本は、巨大な経済力と科学技術力を持っており、それらが平和のために活用されれば、日本はさらに繁栄し、日本の国際的権威はさらに高まるだろう。

しかし時は待ってはくれない。すべての国々の国民は、平和の40年を、戦争と戦争との息継ぎ期間ではなく、社会体制の異なる国々の平和共存原則を誰もが認める時代の始まりとするために、全力を尽くさねばならない。第2次大戦で死んだ何千万という人々の思い出がそれを呼びかけているのであり、われわれの子や孫の身を思う気持ちがそれを要求しているのである。アジアをはじめ世界の諸大陸の空を曇らせてはならない！

対談

第2次世界大戦終結40周年と日ソ友好



ソ連大使館広報部で行われた対談。左から星野教授、エフィーモフ支局長(司会)、パノフ参事官

出席者

立正大学教授、憲法学者 **星野　安三郎**

駐日ソ連大使館参事官、歴史学博士候補 **アレクサンドル・パノフ**

司会　ノーボスチ通信東京支局長 **ミハイル・エフィーモフ**

エフィーモフ（司会）　第2次世界大戦が終わってから40年たちました。40年という期間は人間の一生にとっても、一つの国の生活にとっても、そして世界の歴史にとっても大きな期間です。この終戦40年という節目は、かつて世界にあったこと、そしていま起こっていることを考察し、何らかの結論を引き出す機会を与えてくれています。

私の知っている限りでは、日本には第2次世界大戦について何も知らない世代が育っています。ましてやこの世代は、第2次世界大戦がソ連国民の歴史においてどのような役割を演じたかということを知らないわけです。

そこで、ソ連国民にとって最大の出来事である第2次世界大戦終結40周年にあたり、本誌編集部は日ソ双方から40周年の意義と日ソ関係を話し合っていただくことにしました。対談者として日本側から憲法学者の星野安三郎・立正大学教授、ソ連側から駐日大使館の参事官で歴史学博士候補のアレクサンドル・パノフ氏をお招きしました。それではまず、星野先生からお願いします。

星野　いまエフィーモフ氏は、第2次世界大戦終結40周年はソ連国民にとって最大の出来事であると言われたが、日本の国民にとってもあの戦争と戦後40年というのは最大の問題です。終戦40年ということで、ソ連が第2次大戦で強いられた犠牲の大きさと、この戦争の勝利にソ連が果たした役割の大きさを改めて知らされたわけですが、世界のそれぞれの民族とか国民はそれぞれの体験によって、ぜひとも避けなければいけないもの、二度としてはいけないものを持っています。

日本ではたとえば戦前生まれ、戦後生まれ、あるいは、戦前の事件、戦後の事件という言い方がよくされますが、ここで言う戦争とは第2次世界大戦のことで、あのような戦争だけは二度とすまい、ということが日本の国民の共通の認識になっています。その点、アメリカでは、しばらく前までは第1次大戦後の大恐慌が基準になっていて、大恐慌前の生まれか、あとの生まれか、あるいは大恐慌前のことか、あとのことかがすぐに問題になっていました。

そこで、アメリカの一部の階層にとっては、大恐慌を避けるためなら戦争になってもいいという選択が出てくる可能性があるわけです。ドイツでは、あのひどいナチス支配が基準になっていて、どんなことがあってもあのようなひどい支配だけは避けよう、二度とすまいということがドイツの人々の共通の認識になっています。そしてわれわれ日本人にとっては、第2次大戦が基準になっていて、どんなことがあってもあの戦争だけはもう避けたいという思いがあり、それが戦後の日本国民の生き方や生活、政治を支えてきた基本ではないかと思います。

日ソ関係でも同じことが言えると思います。戦前40年にはざっと見ても一九〇四—五年の日露戦争、第1次世界大戦後のシベリア出兵——出兵などというと、二—三〇〇〇人の兵隊が短期間海外出張をしてきたような印象を与えますが、これは3年間もの理由のない本格的な干渉戦でした——、また一九三九年のノモンハン戦、そして第2次世界大戦末期のソ連の対日参戦ということがあったわけで、戦前40年間の日露・日ソ関係は対立と戦争を特徴としていました。

ところが戦後40年の日ソ間には一度もこうした軍事力の行使——戦争がありませんでした。これは忘れてはならないことだと思います。ここで重要なのは戦争がなかったことではなく、戦争をなくした条件です。それは、戦争の原因になる台湾、朝鮮、中国などの植民地を敗戦によって失ったという客観的条件とともに、日本国民の主体的条件の変化です。戦前を例にとりますと、日露戦争では、ごく少数の人の自覚的な動きでしたが、日本の社会主義者がロシアの社会民主労働党に対して戦争をやめようという呼びかけをしました。シベリア出兵という名の対ソ干渉戦の時は、日本でも社会主義勢力、労働組合勢力、平和勢力を中心にこれに反対するかなり大きな動きがあり、それが派遣軍の撤退を余儀なくさせた一因になっています。これはロシアの社会主義革命によって日本の労働者階級、社会主義勢力が大きな刺激を受け、労働者の先進国をつぶさせまいとしたのです。しかしその後、治安維持法などによってそういう反戦勢力が全部弾圧され、結局はあのような不幸な戦争を招いてしまいました。

戦後はポツダム宣言が日本に要求した軍国主義の除去、民主主義に対する障害の除去、基本的人権の保障などにより実現された民主主義と平和の体制が、日ソ間の戦争回避、平和を可能にした最大の力だと思います。

そして戦後は軍国主義解体によって労働運動、婦人運動、日ソ友好運動などが盛んになり、その人たちを中心にしたソ連国民との交流が活発に行われていて、それも日ソ関係を一定の水準に保つのに大いに役立っています。

パノフ　星野先生のご意見に全面的に賛成です。こんにち平和への願いは、ソ連と日本に限らず世界中の至る所で広範な大衆の切実な願いになっています。現在、第2次世界大戦終結40周年が広く記念されていますが、その一連の行事には、戦争のもたらす悲劇を人々にもう一度思い起こさせて、平和を守るためには何をすべきか、いかに闘うべきかという結論を出させるという一つの大きな機能があります。

なぜ、それがいま重要なのかと言いますと、先ほども出ましたが、戦争を知らない、いわゆる戦無世代が育ってきているわけで、この人たちは第2次世界大戦が起こった大きな原因、状況をあまりよく知らないわけです。特に西側のマスコミではそういう歴史的な事実や真実が歪められて描かれており、そのため、戦争がどういう原因で起こったのか、その発生のプロセスはどうだったか、結果はどのようなものだったか、こういったことについてかなり歪曲した概念を与えているわけです。これは偶然の現象ではなく、大衆の社会的記憶の機能を奪おうとする試みである、とわれわれはとらえています。大衆があるものについて社会的に持っている記憶を取り除き、あるいはそれを歪めてしまえば、一定の階層には、自分たちが行おうとしている政治的行動、政策の目的追求が容易になるわけですから。

外見的には一九三〇年代、四〇年代の行動形態とか、当時の目的とは違うかもしれませんが、究極のところ、西側の一定の階層がめざしているものは、あの当時と変わっていません。

たとえば、あの当時の宣伝を今日おこなわれているものと比較しますと、一定の同じ傾向が見いだされます。ヒトラーも三〇年代には「平和のために闘っている」と言っており、戦争をするとは決して言っていませんでした。「私にもう少し譲歩すれば、戦争は起こらないだろう」とヒトラーは言っていました。ヒトラーのもう一つのテーゼは「世界の不安定性の主な要因はソ連にある、すべての災いの元はソ連にある」というものでした。

今日も同じような傾向が見てとれるのです。戦争のためだという主張はなくて、すべては平和のためだという宣伝が行われています。たとえば、核兵器やミサイル、とりわけ多弾頭ミサイルがあれば平和は維持できるとか、宇宙兵器こそが平和を維持してくれるなどという主張です。こうした発言は、かつての目的と大体同じ方向でなされていると言えます。つまり、つねに軍事的な優位によって、世界を自らの戦略的、政治的目的に都合のよい方向で維持しようという試みです。

というわけで、″ソ連の軍事的脅威″については全世界で何百万ページも書かれていますが、ソ連が世界の平和と安全を保障するためのさまざまな提案をしますと、これは単なる宣伝にすぎないとか、誠意のこもった提案ではないとか言って退けられます。これも一九三〇年代に見られたことです。一九三〇年代にもソ連は集団的な努力によってアジアの安定を保障し、戦争の脅威を未然に防ぐための提案をしています。しかし、ソ連の提案は当時支持されませんでした。今日もソ連は、アジアの安全を集団の努力で保障する問題を検討するように提案しています。その意味でわれわれは日本との関係に大きな意義を与えています。

日本はアジアのみならず全世界に影響力を持つ大国です。アジアと世界の情勢が今後どうなるかは、日本の立場にかなり左右されると言ってよいでしょう。日本との関係改善、日本との対話の維持にソ連側は絶えず関心を示し続けてきました。その中には、アジアの情勢の改善のために共に何ができるかを考えるための対話をしようという提案も含まれています。そのほかにもソ連側は一連の具体的な提案をしており、二国間あるいはより広い範囲で信頼醸成措置を協議しようという提案、さまざまな協定を締結しようという提案、日ソ双方の安全を強化するための対話の提案などがあります。われわれがこういった提案をするのは、何よりもまず、第2次世界大戦の最大の教訓は、ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長も強調しているように、戦争が始まる前に戦争に反対して闘わねばならないということだからです。

エフィーモフ　ここで少し話題を転じて、戦争の教訓、あるいは戦後の平和な40年間が、日ソ両国民に何をもたらしたかということについてお話しいただければ、と思います。

星野　一九八二年8月に自由民主党の憲法調査会が憲法改正案の中間報告を出しました。その中に第九条改正反対の意見が明記されています。意見は二つあり、一つは第九条を含めた日本の憲法は平和と繁栄をもたらしただけでなく、日本国民の中に定着しているという意見、もう一つは憲法第九条を改正するということで近隣諸国に対し日本の軍国主義が復活するという懸念を与える、だから改正には反対だという意見です。

このような意見は自由民主党内の反対意見だけでなく、日本国民の間に深

く根付いていて、そのことはさまざまな調査で裏付けられています。私たち20名の国公私立大学の憲法、国際法、政治学者は「総合的平和保障の憲法学的研究」を文部省の科学研究費で3年間にわたって行ったのですが、それは軍事力によらない平和をどのようにして保障していくか、そのような条件が、政治的、経済的、社会的、文化的に、あるいは対外的に日本にはあるかという研究でした。その研究の一環として国民の意識調査（一九八三年6月）をやったのですが、その中の「戦後の日本が平和を維持できたのは、どんな理由だと思いますか?」という質問に対し、一番多かった回答は「平和憲法の下で国民の努力があったから」（44%）で、一番少なかったのは「安保条約を結び、自衛隊を持ったから」（5%）でした。二番目は「日本の国際関係が良好だったから」（25%）、三番目は「日本が島国だったから」（15%）という答えでした。

日本人の意識の変化は、国際的な調査を見ても分かります。一九八二年アメリカのギャラップが行った（資本主義15カ国）世論調査なのですが、さまざまな質問の中に「国家のために喜んで戦場に赴くか?」という質問がありました。「はい」と答えた中で多かったのがアメリカ人で、全回答者の71%。2位がイギリス人で62%。西ドイツでは35%、イタリアでは28%、日本が最下位で22%でした。

ここで、日本国民にとって大事なのは、第2次世界大戦中は恐らく日本国民の一〇〇%近くが男も女も、子供も老人も国家のために喜んで戦場へ赴くと言っていたと思うのですが、それが22%に減ったということです。

これに対して危険な感じがするのが、アメリカの71%という数字です。ご承知のようにアメリカは南北戦争以後、国内での戦場を経験していません。戦場はすべて外国でした。第1次大戦、第2次大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東、グレナダなど、戦場というのはすべて外国でしかないわけです。従って戦争の被害というのは、戦場に行った兵隊たちの死傷だけであって、戦場になった国の一般市民の犠牲がほとんど分からないわけですね。それが何度となく外国軍隊の侵略を受け、戦場になったソ連国民との決定的な違いです。日本国民の場合はちょうど日本国民の戦前の体験と全く同じなのです。日清戦争、日露戦争、第1次大戦、シベリア出兵、支那事変、満州事変、太平洋戦争と、日本は外国から侵略されて自衛戦争をやったためしはないんで、つねに外国で侵略戦争をやって、外国を戦場にしてたたかった。だから一般国民は、戦場になった所の住民の犠牲が分からなかった。私たち日本にいる国民も、兵隊たちが死なずに帰ってきてくれと願うだけでいたわけですね。ところが敗戦近くになって本土爆撃や艦砲射撃を受け、あるいは沖縄で地上戦が行われ、広島・長崎が原爆で壊滅し、こうして初めて日本国民は戦争が一般市民にも大きな被害を与えるということを知ったのです。そういう経験から戦後の日本国民は戦争反対、平和志向になったと思うのです。

パノフ 大変興味深いご指摘です。第2次世界大戦前は戦闘は主として軍隊同士のもので、市民が巻きぞえになることはもちろんありましたが、犠牲になるのはほとんど戦闘員——兵隊だけでした。しかし、第2次大戦では非戦闘員——一般市民の犠牲が大変な数に達しました。まして今日、万が一、核戦争が勃発するということになれば、この戦争は一般市民を完全に巻きこんでしまって、すべての人々を犠牲にしてしまうわけです。パーセンテージから言えば、戦闘員よりも一般市民の犠牲の方が比較にならないほど多くなるでしょう。

ソ連では第2次大戦とこの戦争による犠牲、困窮についての記憶が今も生々しく残っていて、平和のために積極的に行動しようという国民の意思が非常に強いのです。これに関連して言っておきたいのですが、西側のマスコミの一部では、ソ連には反戦運動はあっても弱いもので、国民は戦争と平和の問題についてはあまり影響力がないとか、大衆運動としての反戦運動はないとか言っています。こういう主張には意図的なものもあれば、わが国で行われていることへの無理解もあります。

ソ連共産党とソ連政府の政策は、そういう国民の戦争を憎む気持ちを完全に反映するもので、党と政府が行っていることは国民の全面的な支持を受けています。多くの資本主義国では、政府が緊張緩和、平和強化への小さな一歩を踏み出すまでにも、大衆運動の大きな圧力が必要です。これは別に、だからソ連には平和のための大衆運動がないということを証明するものではありません。ソ連の場合、大衆的な平和運動は、自分たちの願いと完全に一致する党と政府の平和的イニシアチブ、平和愛好的対外政策に対する全面的支持を示威するものになっているのです。

同時に、この運動には、新しい世代や住民のますます広範な層が加わっており、これがまた国民各層の意識に平和擁護と諸国民友好の精神を育成しています。そして、こうした国民の行動、指導部の行動は一つになり、法律や法的文書になって、ソ連の対外政策の平和路線を定着させるのです。たとえば、一九五〇年代の初頭にわが国では戦争宣伝を禁止する法律が制定されました。また、わが国の新憲法では、ソ連は社会体制の異なる国々との平和共存の原則にのっとって平和政策を推進するという内容の条項が盛りこまれていますし、一九七五年のヘルシンキ宣言の内容も反映されています。

星野 ソ連では日常的に反戦、平和の教育や運動が行われているということは、以前にもソ連の人から聞いたことがあります。ソ連は第2次大戦中広い国土が占領されて、防衛戦争で犠牲になった人がたくさんいるわけですが、小学生、中学生、高校生たちがそういう人たちの記録を発掘したり、慰霊祭を自発的に行っているという。日本でも再び戦争の悲劇を繰り返すまいということで、空襲や攻撃を受けた所など各地で戦争体験を記録する会が生まれています。しかし、それはやはり、戦争を体験した自覚的な大人たちの活動であって、ソ連のように子供たちまで加わっているというところまではいきません。ソ連で子供たちが自発的にやっているというのは、まさに自分たちの先輩が自分を犠牲にして自分たちの未来を守ってくれたということがあるわけで、そういう点が重要だと思うのです。

一方、日本では数年前に大きな問題になりましたが、高等学校の教科書の中の侵略という言葉を進出という言葉に書き換えさせたりするような、若い

人たちに過去を忘れさせようとする危険な動きがあります。

また、教科書の問題で思い出しましたが、『大きなかぶ』というソ連（ロシア）の民話が、日本の小学1年生の多くの教科書に採用されていて、子供たちに人気があるのですが、こういうソ連の民話を教科書に載せるのは偏向だと非難する勢力がいます。それどころか、もっと過激な勢力だと、ソ連は北方領土を侵略しただけでなく、日本の国語の教科書まで侵略しているということになるわけです。

これも一つの例ですが、日本では反ソ宣伝が盛んに行われています。しかし、私は日本国民が必ずしもそれに乗っているとは限らないと思います。先に挙げた憲法学者などの調査で「ソ連は日本を軍事的に侵略してくると思いますか?」という質問に対し、その回答のうち、「思う」（38%）と「思わない」（40%）がほぼ同じで、「分からない」が22%ありました。そして、「思う」と答えた人に理由を聞くと、回答なし、つまり「分からない」が6割以上もいました。何となくそう思っているだけなのです。一方、「思う」と答えた人たちが挙げた理由の「日本の敗戦時にソ連が侵攻したから」（2%）、「ソ連がアフガニスタンに侵攻したから」（2%）、「ソ連海軍の演習を見たから」（1%）、「ソ連が極東にSS20を配備したから」（4%）、「北方領土にソ連の軍事基地があるから」（9%）に対して、一番多かったのが「日本に米軍基地があるから」（16%）という理由でした。だから、仮にそういう恐れがあるとしても、原因は日本がつくっているという回答者が多かった。その辺のことは、日本国民もよく事実をつかんで分かっていると思います。

パノフ いま星野先生が出されたデータは大変興味深いものです。ソ連が日本を攻撃する可能性はあるかというアンケートに対して、あると思うと答えた人が結構いるわけですが、ではどういう理由でそれがあり得るのかという問いには大半の人が答えられなかったという事実は、大変象徴的です。

前々からわれわれが言っていることですが、日本とソ連の間には、たとえばソ連側から日本に対して敵対的な行動に出る理由、あるいはソ連と日本の関係を悪化させ、対立を激化させる理由は存在しません。逆に、日本とソ連の間には多くの共通の利害があり、協力できる点がたくさんあります。この協力を通じて両国の関係を大幅に改善することは可能なはずです。

ただ、どの国も自国の安全保障ということを最重要に考えていますし、この問題は日ソ間にも存在します。しかし、ソ連の安全保障は、自国の安全保障が他の国の安全を脅かすものであってはならないということから出発しています。一方、自国の安全ということをスローガンにして、他国に対する軍事的優位を確立しようとか、自国の軍事的計画を実現しようとか、あるいは戦略的なバランスを崩そうとかする試みが行われるのは、非常に危険です。

このためソ連は、安全保障についてさまざまな提案をしてきました。たとえば、信頼醸成措置についての話し合い、あるいは日本が非核三原則を守るならソ連は日本に対して核兵器を行使しないことを約束する協定についての話し合いなどです。

日本との政治的対話の可能性も大きなものがあります。アジア地域、あるいは全世界の情勢についての意見交換でも、日ソ間で建設的な対話は可能だと思います。経済の分野でも両国関係を発展させる大きな可能性と展望があります。まして両国は隣国同士ですから、経済交流では有利な条件にあります。

文化面でも交流の可能性は大きいです。ソ連では日本の文学や文化一般に大きな関心が示されています。一例を挙げますと、2年前モスクワで日本の平家物語が翻訳され、一〇万部発行されたのですが、すぐ売り切れてしまいました。日本の現代作家の翻訳もすぐに売り切れてしまいます。日本でもソ連の文化に対して大きな関心が見られます。それなのに、『大きなかぶ』のような最も罪のない子供向けの作品でさえ、ソ連のものだというので日本の教科書から外されるというのは、残念なことです。

しかし、私たちは楽観主義者で、今後の日ソ関係は緊密で、より実り多いものに発展していくと信じています。

星野 私も全く同感です。先ほどの憲法学者などが行った意識調査では、「今後の日ソ関係をどうするか」について、「経済等の交流促進」53%、「日ソ平和条約を結ぶ」30%、「日ソ軍事同盟を結ぶ」2%、「その他」5%という回答になっています。

戦前にはなかったことと思いますが、戦後は日本の都市とソ連の都市が姉妹都市の縁組みをしたり、国民同士のいろいろな交流が行われています。こういう積み重ねが必要だと思います。もう一つは人民間の連帯を築き上げていかなくてはいけない。そのためには戦前からの伝統を掘り起こしてみる必要があります。

一九三九年のノモンハン戦の半年後に、ソ連の客船インジギルカ号が北海道の猿払村（宗谷郡）の沿岸で遭難した時、猿払の人たちが夜を徹して救助活動にあたり、岸に流れついた多くの遺体を引き上げ、だびに付し、その後毎年慰霊祭をやっていた。そのため憲兵から、なぜ赤い国の仏を祀るのだとにらまれたとのことですが、戦後には記念碑までできた。これは大変重要なことだと思います。ノモンハン事件の当時は、対ソ敵愾心が日本をおおっていた時代です。そんな時ですら、働く者同士、海に生きる者同士の連帯ができたということ、こういう事実をもっと掘り起こしていくことが必要ではないでしょうか。

戦後はさまざまな団体の交流も行われてきましたし、そういうものを基礎にした経済交流、政治的対話を積み上げていくことが可能だと思います。六〇年代、七〇年代からの平和共存、緊張緩和の流れがここ数年危険な方向になってきていますが、昨年あたりからその危険性が自覚されて、米ソ間でも平和と軍縮の話し合いが行われていることですし、日ソ間でも人民同士の交流をもっと拡大していく必要があります。

エフィーモフ きょうの対談者がお二人とも楽観主義の立場に立たれたということは、大変よいことだと思います。アジアに緊張した情勢がある限り、世界の平和はありえませんし、日ソ間に良好な関係がなければアジアの平和も、世界の平和もありえないでしょう。本日は大変興味深いお話をありがとうございました。

（この対談の企画には、日ソ親善協会のご協力をいただきました——編集部）

特集 前途洋々のソ連極東地域

ソ連の総面積の$\frac{1}{4}$余りを占める広大なソ連極東地域は、ソ連の経済でひときわ目立つ役割を果たしている。それもそのはず、ここの水産資源量やダイヤモンドの採取量はソ連第1位、林業・製材業、非鉄金属の出鉱量、毛皮の産出量もソ連のトップクラスに入っているからだ。

ここ数十年間の国民経済発展計画によると、極東経済地区、とくに日本に近い地区の生産力が優先して急ピッチで発展することになっている。本誌の読者の手紙から判断すると、これらの計画は日本の人々の関心をも引いているようだ。

本誌はソ連極東地域の人々の個々の生活面やこの地区の最大級の建設場を何度も紹介してきたし、昨年のバイカル・アムール（バム）鉄道の完成に伴う今後の見通しについてもたびたび取り上げてきた。

本号ではソ連極東全体の経済の発展とソ連極東と日本との結びつきについて紹介しよう。

自然の富とコントラスト

ソ連極東という経済的・地理的概念には、ヤクート自治ソビエト社会主義共和国、プリモーリエ［沿海］、ハバロフスク両地方、マガダン、カムチャツカ、サハリン、アムールの各州が入る。この地域の面積は六二一万五九〇〇平方kmで、15あるソ連の連邦構成共和国中最大のロシア連邦共和国の一部である。

ソ連極東の$\frac{3}{4}$以上は山地であり、低地は北氷洋沿岸と大河沿いの盆地にだけ見られる。最高峰はカムチャツカのクリュチェフスカヤ（四七五〇m）とトルバチク（三六八二m）の両火山であり、最大の河川はレナ川（ヤクート自治共和国内——二九三〇km）とアムール川（アムール州とハバロフスク地方内—二七四〇km）である。

極東は東西（四〇〇〇km）と南北（四〇〇〇km以上）に大きく広がっているので、気候条件は驚くほど多様である。北部は北極圏に近接し、冬は強力な寒気団が7カ月間も居座って寒い。7カ月のうち、たとえば北氷洋沿岸では4カ月間北極夜が続く。北部のツンドラではまだ極寒が続いているのに、南部では春の太陽がさんさんと輝いているありさまである。

極東の森林には珍しいものや貴重なものを含めて約二五〇種のさまざまな樹木がある。ここにはトナカイ、トラ、クマ、イノシシ、オオカミ、アカシカ、クロテン、ホッキョクキツネ、などがおり、鯨、セイウチ、オットセイ、アザラシ、ラッコなどの海獣もいる。

ほかでは見られないユニークな動植物を保護するために、11の自然保護区（総面積二万六〇〇〇平方km以上）が設置された。そのほか、全区域が禁猟・禁伐区になっている自然記念物区域が約80ある。特に大きな保護区としては、シホテアリン（沿海地方）とクロノツキー（カムチャツカ州）を挙げておこう。一九七九年にはピョートル大帝湾（日本海）に禁漁区が設置された。「レッドブック」に登録されている珍しい動物のうち極東にいるのは、ウスリートラ（約二〇〇頭しかいない）、エ







プリモーリエ(沿海)地方

上　ウラジオストク郊外のソ連科学アカデミー極東学術センターのアカデミー都市の全景

下　ウォストーチヌイ港で活躍するタグボート「タイフーン」号のレフ・ポタポフ船長



ハバロフスク—新潟間航空路開設を記念してボーイング727機乗員に花束を贈るゾーヤ・ザブゴロドナヤ・ハバロフスク副市長（1978年）

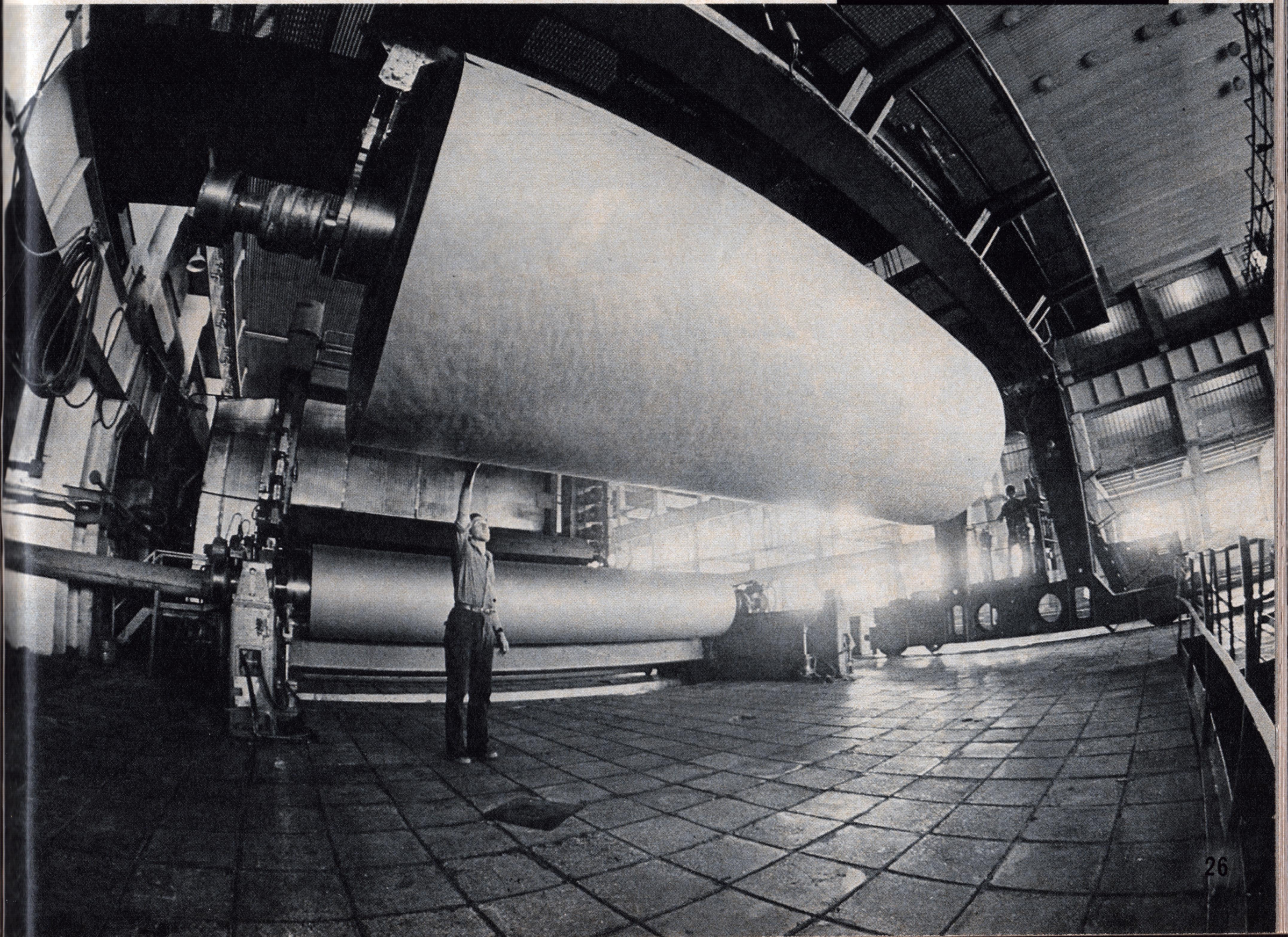


ハバロフスク地方

ナナイ地区の「新しい道」コルホーズのベテラン漁師パーベル・オネンコ



アムールスク（ハバロフスク地方）のパルプ板紙コンビナートの板紙工場

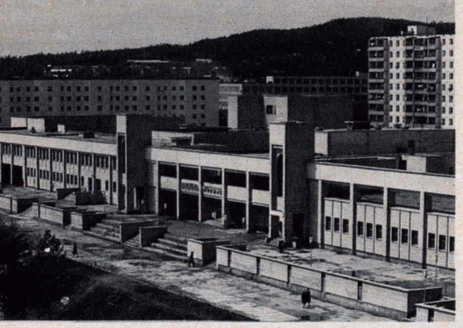






アムール州

◀ワニノ港。サハリンの石油輸送に使われる鋼管の積み込み。



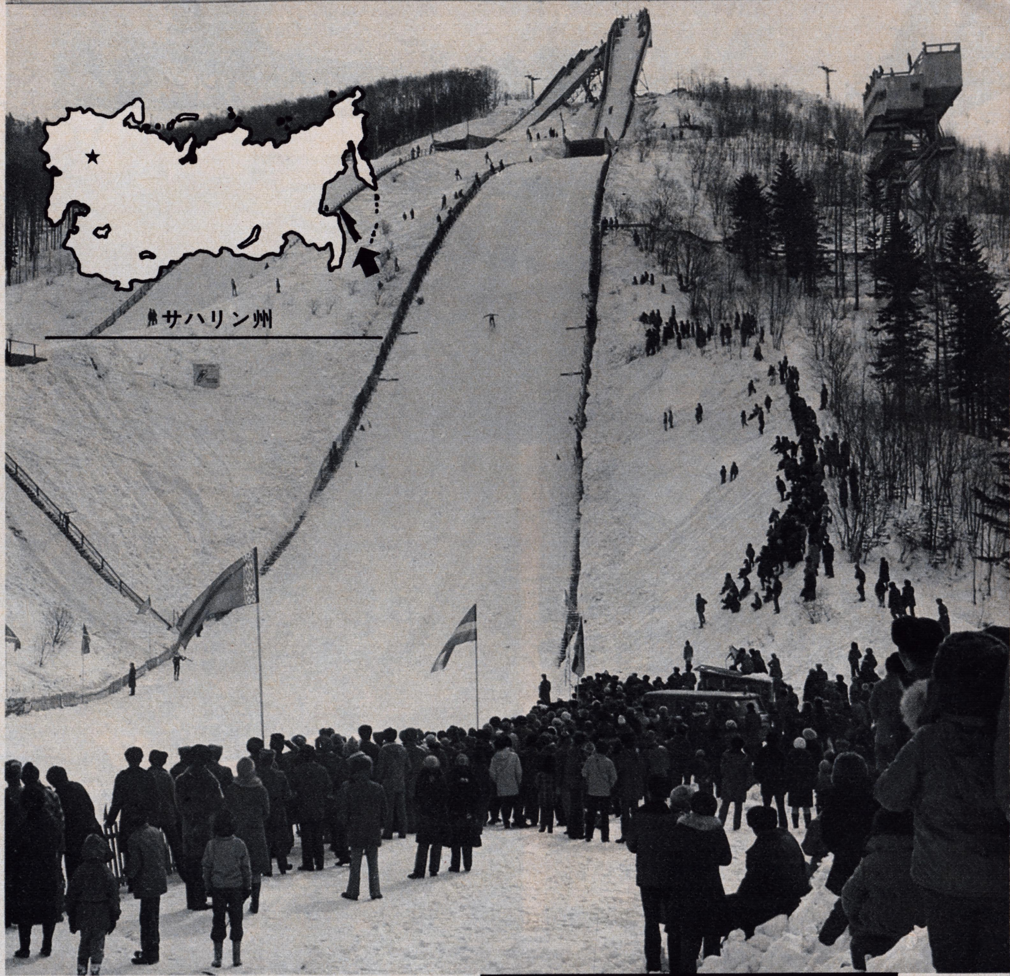
バム鉄道の“首都”ティンダの生活サービスセンター。商店、理髪店、クラブ、郵便局、カフェ、生活サービスの家が入居している。



◀1年中就航しているワニノ＝ホルムスク間フェリー

下校するティンダの子供たち





ユジノサハリンスク郊外のシャンツェ

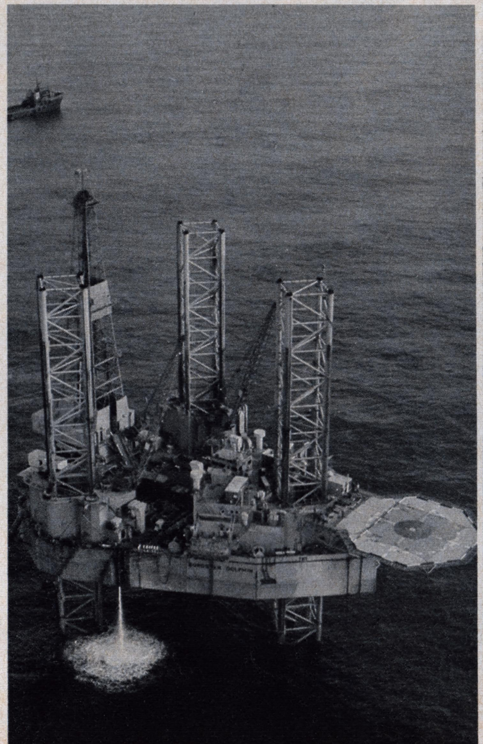
キゾチックなオシドリ、スッポン、カミキリムシ科のCallipogon relicctusである。

ソ連極東地域の天然富源は豊かで、試掘・調査された有用鉱物の鉱床は七〇〇カ所にのぼっている。極東には石炭、石油、天然ガス、鉄鉱石、銅、金、タングステン、モリブデン、水銀、スズ、雲母、石墨、硫黄、アンチモン、食塩、ダイヤモンドがある。それに原生林（森林と毛皮獣）と海（海産物）の豊かさや、河川の包蔵水力もつけ加えておかねばならない。

極東の自然・風土条件は、その土地土地によってひどく違うので、地域内各地区の経済の発展の足並みはそろっていない。わりに狭い極東の南部地帯（沿海地方やハバロフスク地方とアムール州の南部の地区）はかなり人口も多く、比較的によく開発されている。それにひきかえ、極東地域の大部分を占める北部地帯は、人口密度も、経済の発展水準も南部に比べて大きく立ち後れている。

左下　ヤクーチアの石炭産地ネリュングリにはバム鉄道の支線で行ける。バム鉄道に乗務している検札員のエレーナ・クリシナとタチヤナ・マチネワはロシア欧州部のボロネジから来た。

▶漁業はサハリンの主要産業。



サハリン沖の海洋掘削装置「ドルフィン」

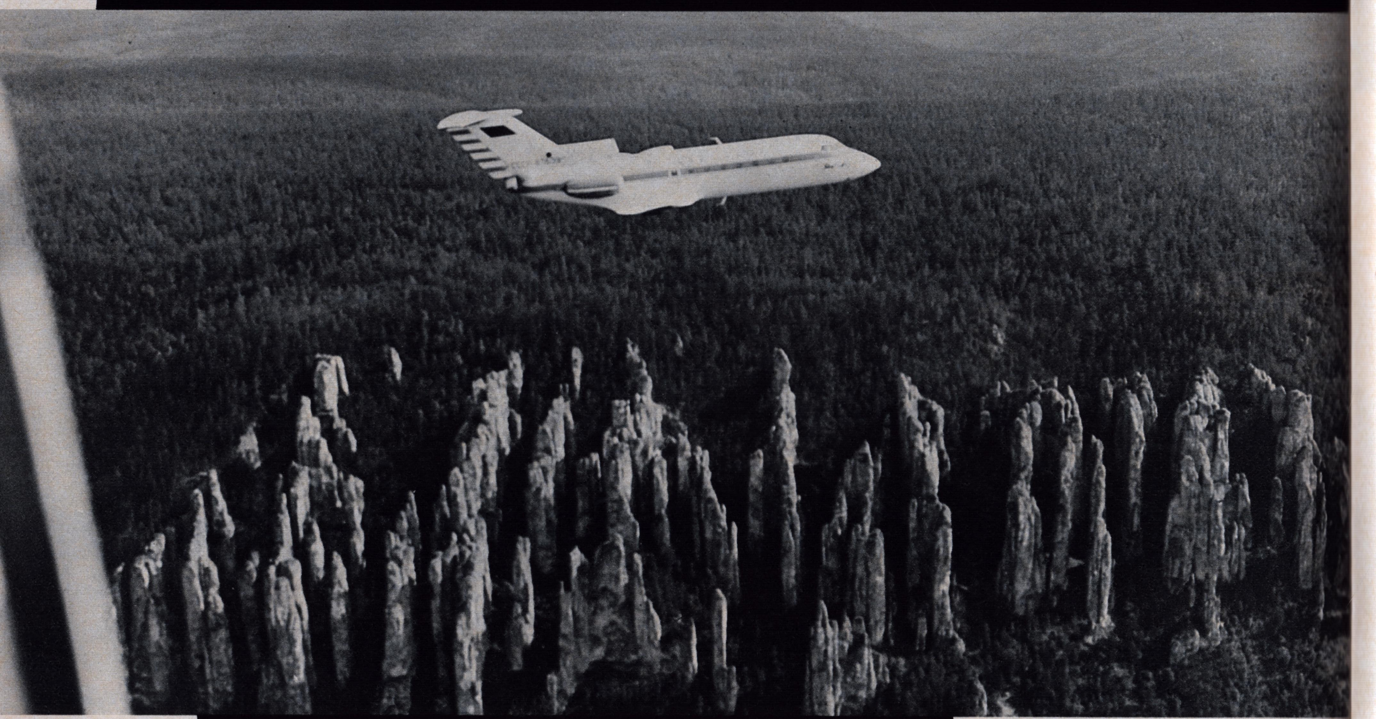




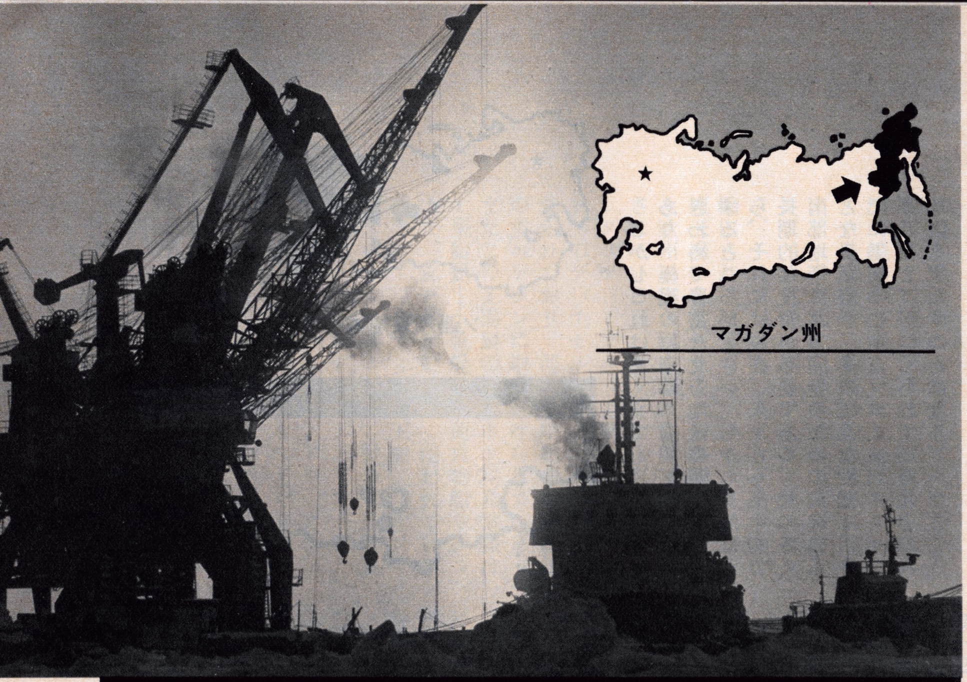


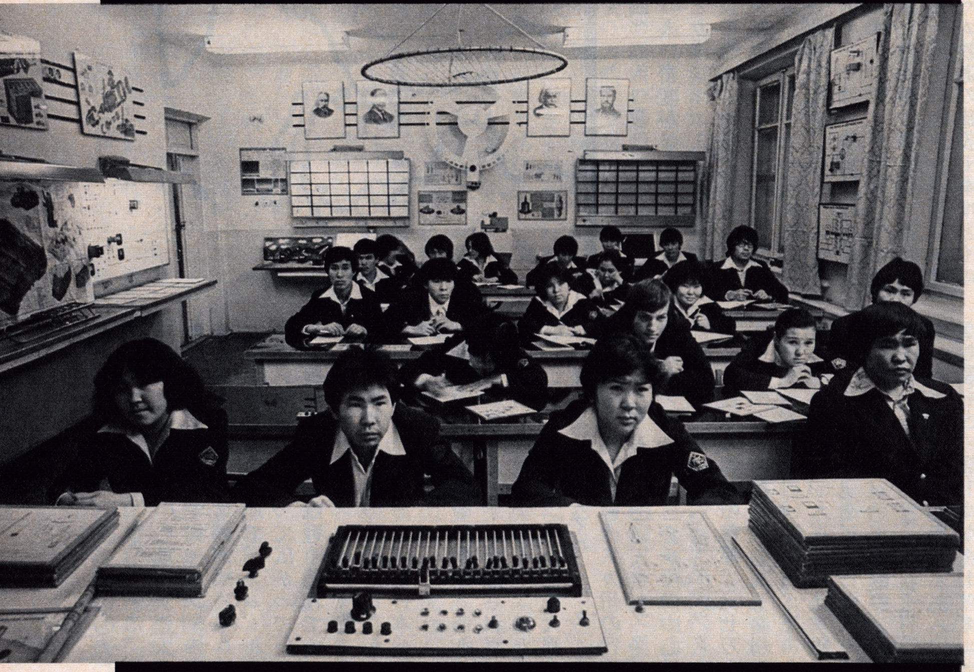
◀ヤクート自治共和国のダイヤモンド鉱床〝ミール〟でのキンバーライトの積み込み

▼レナ川の上空を飛ぶ（ヤクート自治共和国）











右上　ペトロパブロフスク・カムチャツキー市の全景

右中　ソ連最初のパウジェトカ地熱発電所（カムチャツカ）

右下　カムチャツカのトナカイ

下　民族衣装を着たチュクチ人の女性

左上　北極圏の海港ペベク（マガダン州）の極夜（昼でも太陽が昇らない）

左中　マガダン州プロビジェニヤ地区第１工業中等専門学校機械化教室で近代技術を学ぶ現地の人々

左下　マガダン州の輸送幹線―コリマ自動車道











ソ連極東地域



しかしこれはあくまでも現在の話であり、極東の将来は、有用鉱物資源がきわめて豊富な北方地区の開発に依存するところが大きい。しかし当然ながら長期的な投資が必要である。そのさい南部地帯は北方開発のための前進拠点となるだろう。そのような役割は、すでに工業中心地（マガダン、ネリュングリなど）がつくられている北方の各地区も果たすことになる。

人口と都市

ソ連極東は面積が広大な（六二一万六〇〇〇平方㎞）わりには、人口が少なく、七三〇万人である。自然条件のせいで人口の分布は、非常にむらがある。たとえば面積が最も大きいヤクート自治共和国（三一〇万平方㎞）の人口は九四万四〇〇〇人であり、面積が比較的小さい沿海地方（約一六万六〇〇〇平方㎞）の人口数は二〇〇万人余である。人口密度が最も高いのは、モスクワとウラジオストクを結ぶシベリア横断鉄道沿いの地帯である。

人口の大半はロシア人だが、極東には合計一〇〇近い大小諸民族が住んでいる。民族の数がこのように多くなった原因の一つは、極東地域の産業開発のものすごいテンポのせいである。今でもなお極東の大建設にはソ連全国の隅々から何万という人々が押しかけている。バム鉄道の建設工事はとくに青年を引き付け、ソビエト権力が成立してから今までに極東の人口は4倍以上に増え、たとえば一九七〇年代に極東の人口の伸びは17％であった。都市人口は全体の70％余りを占め、都市の数（現在60以上）は、とくにバム鉄道沿線地帯の発展に伴って増え続けている。

人口五〇万以上の最大の都市は、ウラジオストク（六〇万一〇〇〇人）とハバロフスク（五六万人）である。前者は沿海地方の行政中心地、ソ連太平洋艦隊司令部と極東学術センターの所在地であり、ハバロフスクはハバロフスク地方の行政中心地で、アムール川右岸沿いに44㎞にわたって広がっている。海岸線から八〇〇㎞近く離れているとはいえ、ハバロフスクはいま海の港であり、海川兼用型の船舶がここからオホーツク海の港、あるいは日本へさえ出て行く。

極東最大の工業中心地は、一九三〇年代初めに青年の手で建設されたコムソモリスク・ナ・アムーレ（二八万四〇〇〇人）である。その他の大都市としては、ペトロパブロフスク・カムチャツキー（カムチャツカ州の行政中心地、二三万七〇〇〇人）、ブラゴベシチェンスク（アムール州の中心地、一八万六〇〇〇人）、ヤクーツク（ヤクート自治共和国の首都、一七万人）、ユジノサハリンスク（サハリン州の中心地、一五万二〇〇〇人）、ナホトカ（一四万六〇〇〇人、シベリア経由で日本、香港、フィリピンと西欧の間を往復する貨物コンテナ路線のソ連最大の港）、マガダン（マガダン州の中心地、一三万四〇〇〇人）がある。このうち最も古い都市はヤクーツク（一六三二年創建）で、先に挙げた9都市のうち三つ——コムソモリスク・ナ・アムーレ、マガダンとナホトカは、ソビエト政権樹立後にできたものである。

魚からダイヤモンドまで

極東の経済の主な部門は鉱業、林業と漁業である。養鹿業や毛皮獣飼育、養蜂業、海産物の採取や毛皮業も、全ソ的意義をもっている。

一九四九年にビリュイ川流域で発見されたヤクーチアのダイヤモンド鉱床は、世界中に知られている。このダイヤ採掘業の中心地はミールヌイ市である。そのほかここでは金（鉱床はコリマ、アルダン、インジギルカ、ゼヤ、セレムジャ、アムグンの各河川の流域）と、スズ（ヤクート自治共和国、マガダン州、沿海地方）が採掘されている。また沿海地方では亜鉛・鉛鉱床の開発が進められており、チュコト自治管区の北部では水銀、ヤクーチアではタングステンとモリブデンおよび雲母が採掘されている。

石炭産業の主な企業はアムール州（ライチヒンスク）、ヤクート自治共和国（ネリュングリ）、ハバロフスク地方（スレドニー・ウルガル）および沿海地方（パルチザンスクとアルチョム）、サハリン州とマガダン州にある。石油とガスはサハリン島（この島のオハ市からコムソモリスク・ナ・アムーレまで送油管が敷設された）で採掘され、ガスはヤクーチアで採取されている。

木材の調達は主としてハバロフスク地方、アムール州西北部、ヤクーチア南部、沿海地方西部、サハリンで行われている。毎年約三二〇〇万立方mの木材が伐採されているが、専門家の計算によると、伐採量を今の2倍以上に増やしても、原生林の森林蓄積量を損なう心配はないという。木材調達の今後の発展を促す大きな要因となるのはバムの鉄道沿線地帯の経済開発であろう。木材加工業は約40種の製品を生産しており、その一部は輸出にまわされ日本などに送られている。

ソ連全体の漁獲高と海産物の採取量の約40％は極東が占めている。たとえばカムチャツカはソ連の「魚工場」と呼ばれている。鮮魚、冷却魚、冷凍魚、塩蔵魚、干し魚、多くの種類の薫製品、さまざまな種類の魚の卵、カニ、缶詰、海産物などが、極東からソ連の各地区へ送られて行く。

輸出品

この10年間にハバロフスク地方の企業だけでも三〇〇種以上の製品を62カ国に輸出している。たとえばハバロフスク発電機械工場の製品は、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、ポーランド、ユーゴスラビア、アフガニスタン、インド、中国、イラン、イラクに輸出されており、ハバロフスク工作機械工場の自動タレット旋盤は、アジアと欧州の26カ国の機械製作工場で使用されている。

「ダリディーゼル」工場（ハバロフスク）のディーゼルは、多くの国でよく知られており、河川用船舶や海洋船舶の主エンジンに取り付けられている。またこの工場製のディーゼル発電機は大型船舶——乾燥ばら荷貨物船やタンカー、鉱石運搬船に広く使われている。「アムールリトマシ」工場（コムソモリスク・ナ・アムーレ）製のプラスト処理用ドラムとショットブラスト室、電気・油圧装置は、インドや、フランス、フィンランド、日本などで使われている。ビロビジャンの変圧器工場（ユダヤ自治州）の変圧器は、ブルガリア、フィンランド、モンゴルで15年間以上も稼働している。「ダリセリマシ」工場（ビロビジャン）の米収穫用自走コンバインは、過湿土壌でも使えて、多くの国々で好評である。漁業、食肉工業、乳製品工業に使われている薄片状の氷を作る製氷機は、ポーランドや、イラク、ペルーに輸出されている。

丸太は極東から日本、朝鮮民主主義人民共和国、ベトナム、中国に、製材は日本、チェコスロバキア、ベトナム、キューバに輸出されている。アムール・パルプ板紙コンビナートのビスコース・パルプは日本、ルーマニア、ポーランドから引き合いがきている。極東産の植物を原料とする薬剤も、外国で需要がある。

ソ日経済交流

ソ日経済関係は、主として、通常の貿易、コンペンセーション（相殺）方式に基づく基本契約による長期経済協力、沿岸貿易の3本立てで発展している。ソ日間の取引の全般的状態と取引高は、極東の天然資源開発に関するさまざまな基本契約の実現過程で行われる相互の取引高に大きく左右される、と言っても言い過ぎではない。

最初のこうした基本契約は一九六八年に結ばれ、ソ連から日本へ木材を供給する見返りとして、日本側は極東の森林資源開発用の設備、機械、資材をソ連に供給することになっていた。この基本契約に基づき、一九六九—七三年にソ連側は一億六三〇〇万ドルの融資を受けて、日本から必要な機械設備、資材を買い付け、また七六〇万立方mの丸太と三二万立方mの製材を日本に送った。

一九七四年には一九七五—七九年度第2次森林基本契約が結ばれ、この協力体制はさらに続行された。第2次契約に基づきソ連は、一七五〇万立方mの木材と九〇万立方mの製材を供給した。これはソ連側が日本から買い付けた五億ドル分の機械設備の見返り分に当たるものである。最後に一九八一年に現行の契約が調印され、これに基づいてソ連側はコンペンセーション方式により一九八一年から6年間に一二〇〇万立方mの用材を日本に供給する。

一九七一年に結ばれた期限10年間の基本契約により、ソ連側は日本に約八〇〇万立方mの工業用チップと四七〇万立方mの広葉樹パルプ材を日本に供給し、日本はソ連に総額約四五〇〇万ドルの機械設備を提供した。

一九七四年にはソ連からの南ヤクーチア炭の対日供給および日本からの南ヤクーチア炭田開発用機械設備の納入に関する基本契約が締結された。日本側が提供した総額四億五〇〇〇万ドルの銀行クレジットの償却期間は20年間であり、ソ連炭の総輸出量は一億四〇〇〇万tで、そのうち約八五〇〇万tはネリュングリ炭である。

一九七五年1月にはサハリン島陸棚の石油ガス開発に関する基本契約が締結された。この契約によると、地質探査作業を行うのに必要な機械設備の賃借料に当てられる一億ドル（成功した場合に補償される）のクレジットは、日本側が供与し、これらのクレジットと利子は、共同開発された鉱床から産出される石油とガスの対日輸出により償却される。

一九七〇年12月にはナホトカ近くのウランゲリ湾にソ連最大の水深の深いウォストーチヌイ港の建設に関する基本契約が調印された。この契約に基づいて日本側は八〇〇〇万ドルのクレジットを提供し、日本各商社はこのクレジットで、五〇〇万tの石炭および一五万個のコンテナーを処理する設備、また年間八万立方mのチップの積み替え機械設備をソ連に納入した。

日本の日本海側の会社、協同組合といわゆる「沿岸貿易」には、極東ばかりでなく東シベリアの一連の州も参加している。この貿易は同額の商品を交換するバーター方式で行われている沿岸貿易の最初の契約が結ばれたのは一九六三年で、金額は八七万ドルであった。一九八一年には沿岸貿易額は約一五〇倍に増え、一億二八〇〇万ドルに達した。日本の会社と協同組合は取引相手のソ連にニット製品や縫製品、食器、ラジオ受信機、テレビ、自動車用タイヤなどを納入し、その見返りとして極東側から木材、魚類、石炭、鉱石・化学原料、わらびその他一連の農産物を買い付けている。契約は、ソ連と日本で毎年交互に催されている沿岸貿易商品見本市で結ばれている。

協力の余地はきわめて広く、調印ずみの契約や協定だけでは、もちろん、極東におけるソ日間の互恵の通商・経済協力の可能性は汲み尽くせない。この地域の急ピッチの経済成長、とくにバム鉄道沿線地帯の工業的発展は、協力を進めるためのきわめて好ましい前提条件をつくり出している。

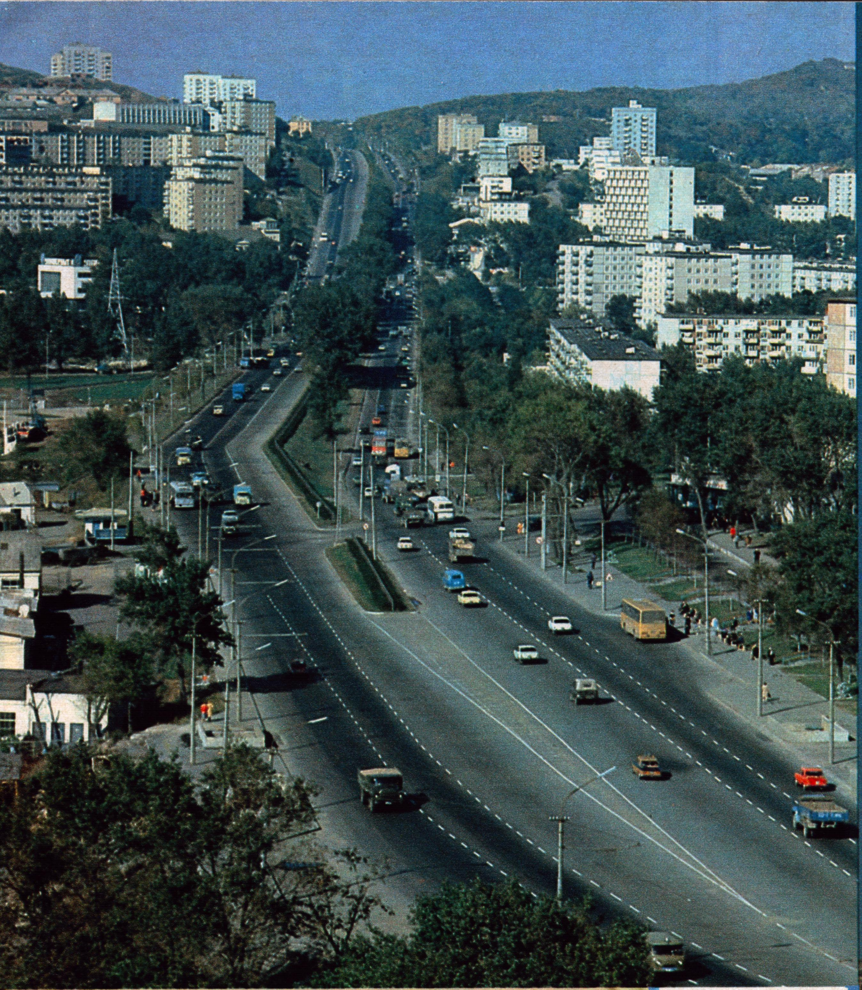
ソ連極東地域の人々の生活やこの地域の諸問題、バム鉄道周辺の経済地帯の発展がもたらすものについてもっと詳しく知りたい方は、APN出版社から日本語で出版された『ソ連の極東』（新書版、一〇二ページ）をお読み下さい。申し込み先は次のとおり。

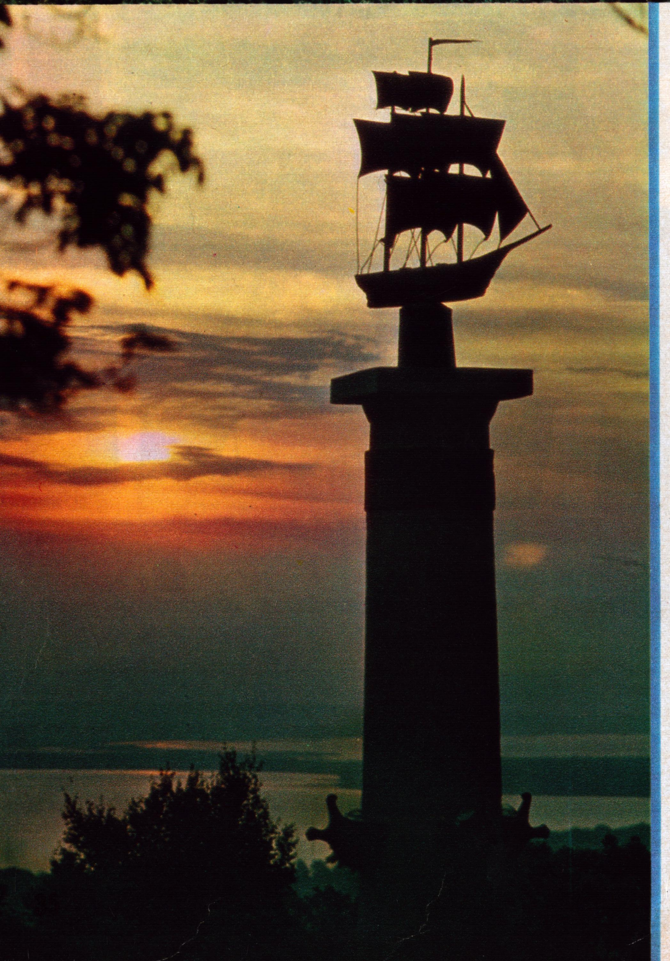
171 東京都豊島区南池袋二—三〇—一九 ナウカ株式会社

112 東京都文京区水道一—五—一六 升本ビル 日ソ図書株式会社

海に生きるまち ウラジオストク

カメラ Y・ムラビンほか









約六〇万人のウラジオストク市民のうち一〇万人以上がこれらの船でつねに海上にいる。

▲ウラジオストク一〇〇周年大通りの高層住宅

◀市の礎を置いた"マンチジュール"号を型取った市の入口の記念柱

いまから一二五年前、一八六〇年の7月のある日、ロシアの軍艦〝マンチジュール〟号が金角湾に投錨した。コマロフ准尉指揮下の兵士40人が密林になっている岸に上陸した。数日後、そこにはすでに建物がいくつか建っており、ポールの先端にはロシア国旗がひるがえっていた。太平洋に面した未来の都市ウラジオストクは、こうして哨所としてその第一歩を踏み出した。

プリモーリエ〔沿海〕地方（面積一六万五九〇〇平方㎞、人口二〇〇万人以上）の行政中心地ウラジオストクは地球上最大の大陸と最大の海が接する場所に位置している。これは当然この地方の自然条件に影響している。ここの気候は非常に顕著なモンスーン型で、大陸から吹く風と海から吹く風が季節によって交替する。冬は極めて寒く、夏は熱帯並みの暑さになる。湾を囲むように斜面に広がる市街は地震多発地帯の上にある。この地域はまだ一度も津波に襲われたことはないが、学者たちは津波から安全だという保証はない、と主張している。毎年太平洋で発生する台風の20のうち三つか四つは必ずウラジオストクを襲う。ここは霧や雨も多い。それにもかかわらず、ウラジオストクはソ連で最も日照時間の多い都市の一つである。年間二〇〇〇時間を超える。

ウラジオストクは海の要塞、太平洋におけるロシアの前哨として建設された。ノルウェーの大航海家フリチョフ・ナンセンは一九一三年にウラジオストクに寄港したさい、次のように語った——「ロシア極東の最も重要な都市は、文句なく、ウラジオストクという名の都市である……このまちは近い将来、最も重要な諸事件の焦点になるだろう



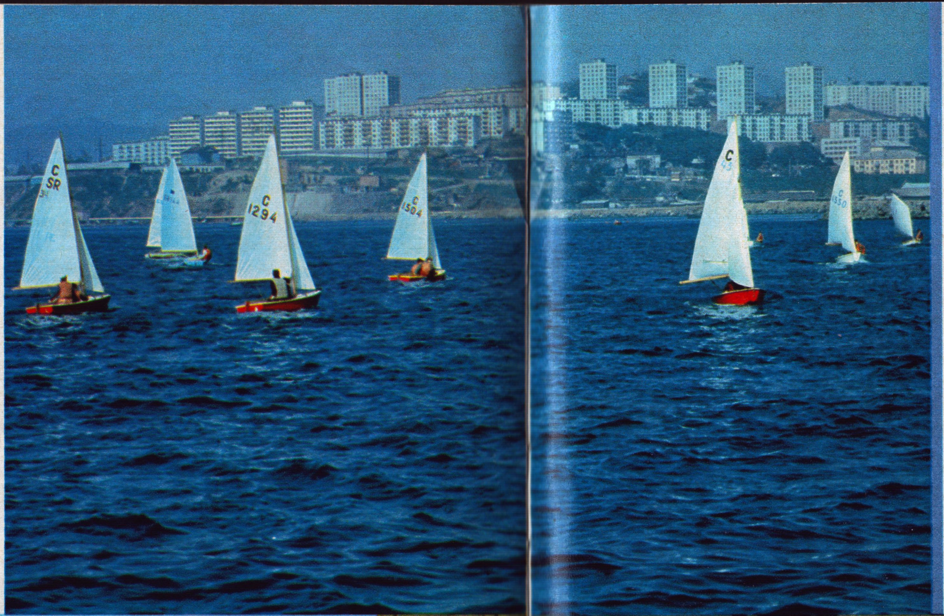
右 若い女性の憧れの的は航海学校の実習生

……すばらしい湾のおかげでウラジオストクは重要な商港になるだろう」

この予見はすべてその通りになった。ソビエト政権樹立期、ウラジオストク市民は白衛軍や干渉軍と勇敢に戦って世界の耳目を集めた。ウラジオストクはロシアの最も重要な港の一つになった。

ウラジオストクはムラビヨフ半島の先端にある。アムール湾とウスリー湾がこの小さな半島を両側からはさんでおり、半島の先端を金角湾が、文字通り角のように切り裂いている。市は周囲を海に囲まれており、どの方向へ歩いて行っても海に出る。

ウラジオストクは海と切り離しては考えられない。それは風景を見ると特



下　ウラジオストクには公園が多い

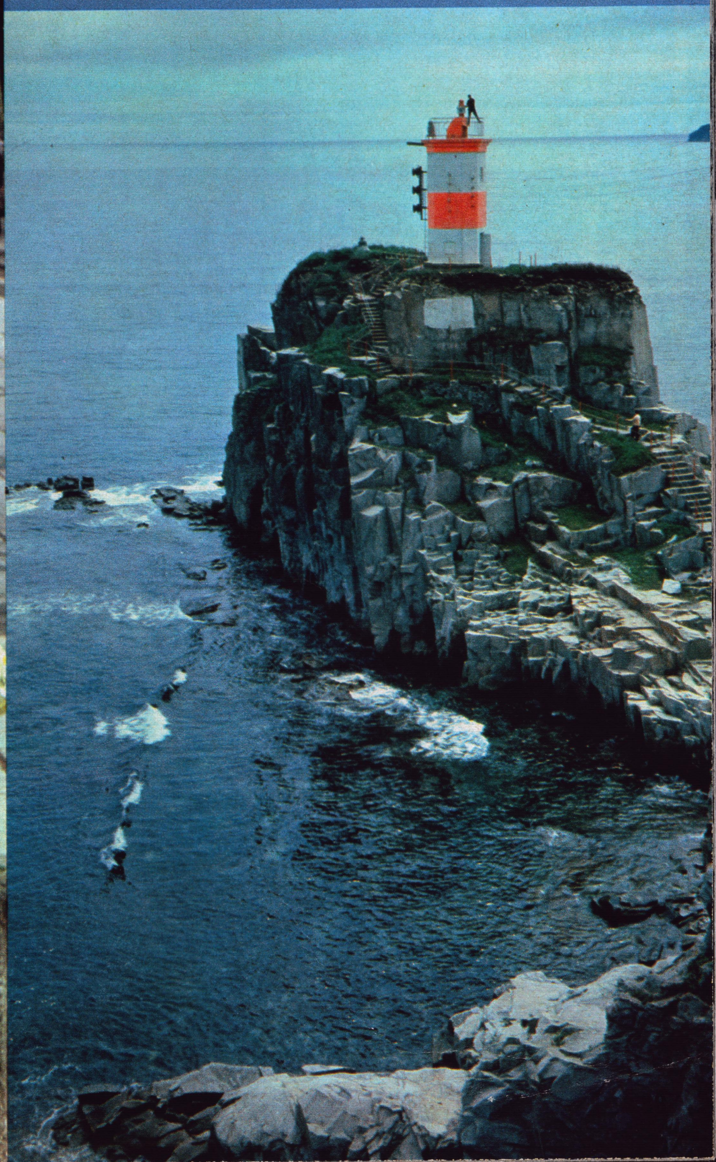
下左　夏には大勢の市民でにぎわうアムール湾の砂浜

左　ヨットは海の男の勇気と敏捷さを養うのにもってこいのスポーツ



市の保養ゾーンにある〝サドゴロド〟サナトリウム

故郷に帰ってくる船員たちが真っ先に目にするポボロトヌイ岬の灯台









▶ウラジオストク港の活況

に実感できる。金角湾の長さいっぱい、3㎞半にわたって商港の桟橋が延び、大きさも形もさまざまな無数の船が接岸している。ここを母港とする極東海運公社の船は世界の一〇〇カ国以上にまで出かける。ここにはまた全ソ漁業公団〝ダリルイバ〟があり、ソ連の全漁獲量のほぼ半分を水揚げしている。漁船団はまさに浮かぶ都市で、工場、研究所、クラブ、病院まで備えている。一〇万人以上のウラジオストク市民がつねに海上にいると考えられており、2世帯に1世帯は何らかの形で海と結びついている。

ウラジオストクでは、すべてが海で成り立っている。工業も例外ではない。

ウラジオストク要塞ができてから25年後の一八八五年、手工業的な軍港の工房群は機械化された大工場にその席を譲ったが、この工場もまた海に奉仕することになった。こうして極東最大の企業——有名な〝ダリザボード〟が出現したが、この工場のドックで長い航海から帰ってきた砕氷船、母船、トロール船、工船が修理を受ける。ダリザボードのほかに、市には楽器工場、修理・機械工場、無線機器工場がある。〝メタリスト〟工場は採鉱企業用のさまざまな設備を生産しており、これらの製品はソ連極東の鉱山や炭坑へ送られるだけでなく、アジア、アフリカ、アメリカ諸国へも輸出されている。市内の企業の中で特別な地位を占めているのは、チョウセンゴミシ、エレウテロコック、コンブ、チョウセンニンジン、アカシカの袋角から医薬品を作っている製薬工場である。

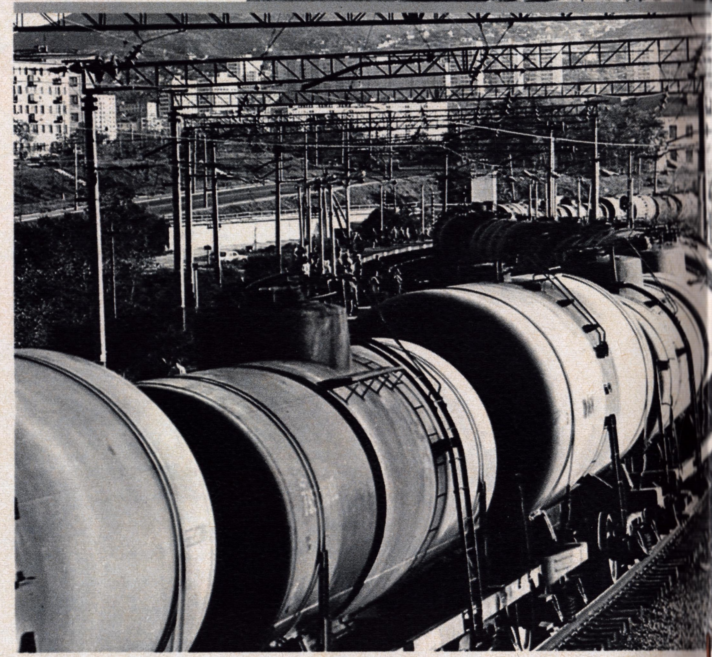


極東工科大学のキャンパスで試験勉強に余念のない学生たち

ウラジオストクは大規模な学術中心地でもある。ソビエト政権になってから、ここにソ連科学アカデミー・シベリア部の極東支部が置かれ、それが九つの研究所を統合する現在のソ連科学アカデミー極東学術センターになっている。太平洋漁業・海洋学研究所はソ連極東の海の水産資源の調査、新しい漁法の開発に取り組んでいる。そのほか、市には伝統的な学科だけでなく、日本語のような極東ならではの講座を持つ立派な総合大学、大規模な工科大学、医科大学もある。興味深いのは芸術大学で、これは演劇学校、美術学校、音楽院を統合したものである。市には全部で大学が8、中等専門学校と職業技術学校が13ある。これだけあれば、まさに選り取り見取りのはずなのだが、若者たちの人気は商船技術大学と海軍兵学校に集中する。

ウラジオストクは一二五年の間に一大経済、文化、科学センターに変わった。特に最近の四半世紀の変化が大きい。わずか25年前、ここにはアスファルト舗装した道路は一本もなく、多くの住宅が木造長屋で、最低限の設備さえなかった、などといまでは想像もできない。現在では七〇〇万平方m以上の最新式の、設備のととのった住宅がある。

市はたえず成長している。市の人口は現在六〇万一〇〇〇人だが、そのうちの一〇万人は最近10年間に増えたものである。ソ連でも有数のこの急激な人口増を見て、社会統計学者たちは二〇〇〇年までに人口が八〇万人を超えるだろうと予測している。これは二〇〇〇年までの市の発展計画にも盛り込まれ、引きつづき集中的な住宅建設を行うことが予定されている。発展計画は、10以上の大企業を市域外へ移転させることも予定している。

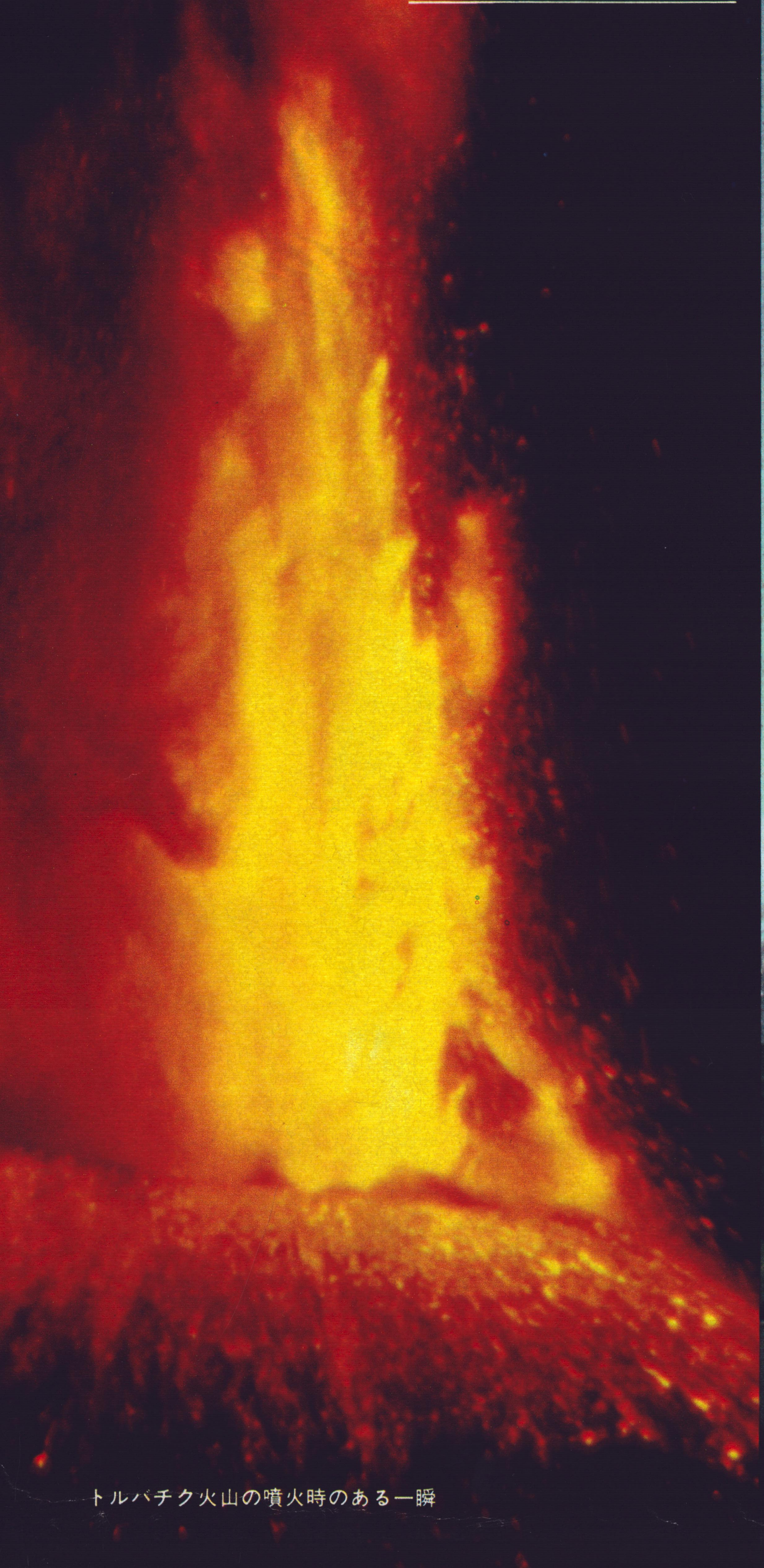


◀ウラジオストクはシベリア横断鉄道の終点でもある。さまざまな貨物がウラジオストク港めざしてやってくる。

市の地形が独特なため、建築家たちは意匠を凝らした設計をすることができる。天然の半円——山と谷がリズミカルに交替しているので、海に向かって雄大なパノラマを展開する、建物の一つ一つが個性的な、優雅なアンサンブルを構成することができる。

ウラジオストクは自然とうまく融合している点でもユニークである。われわれは、新たに生まれた都市がたちまち周囲の自然から切り離されてしまう例をしばしば見てきた。市内にいると郊外には何があるのか——森なのか、草原なのか、沼なのか、まったく分からないような都市がある。これに対して、ウラジオストクは自然から隔絶しておらず、これからも隔絶しないだろうと断言できる。なぜなら、ここの地形は二つの主要な特徴——丘と海から成っているからである。これはどんな建造物によっても隠すことはできない。

創建一二五周年にあたってウラジオストクは、経済建設と文化建設において市の勤労者が達成した諸成果、ソ連極東の経済発展への大きな貢献に対して、国の最高の賞——レーニン勲章を授与された。

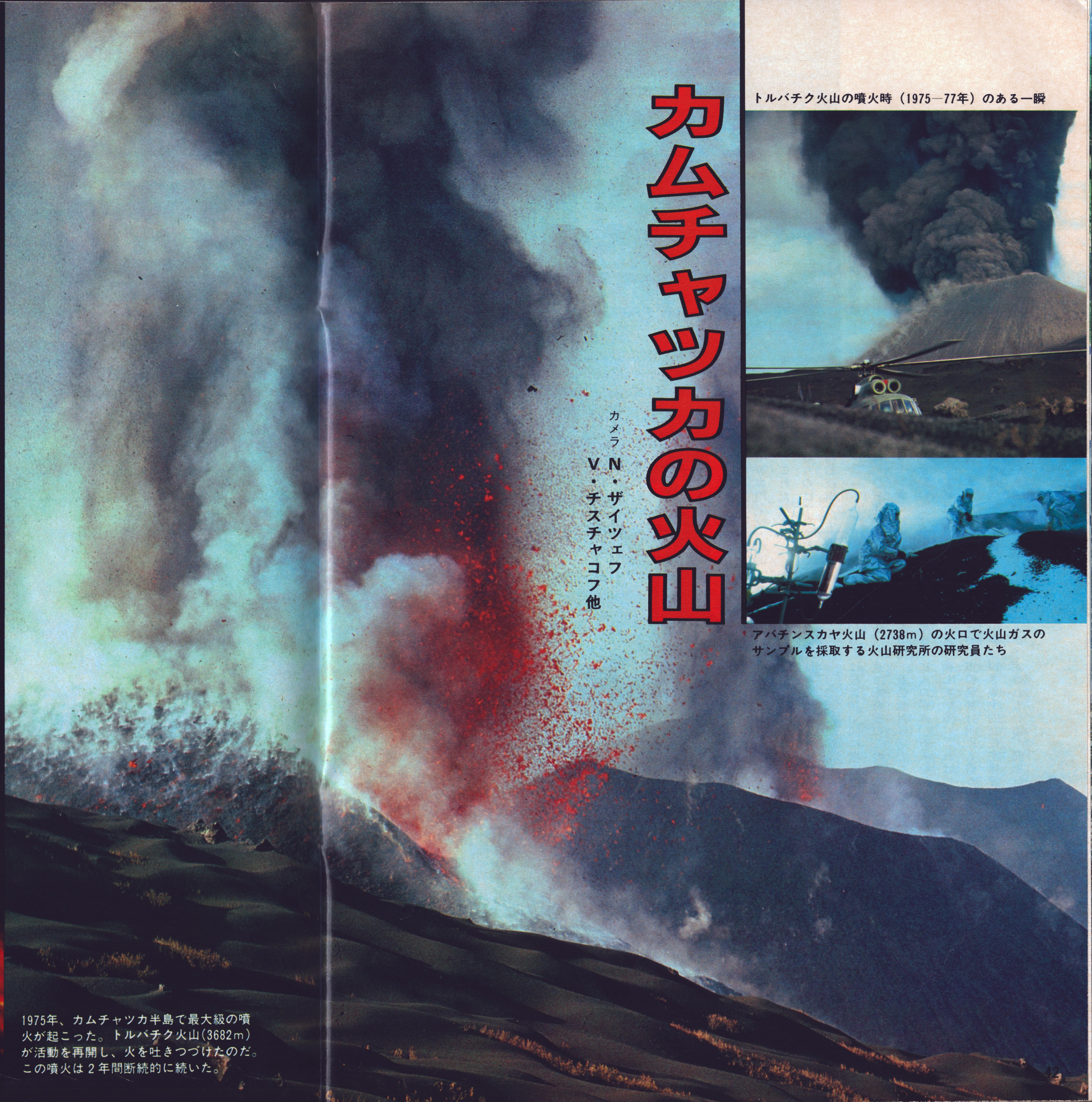




トルバチク火山の噴火時のある一瞬

カムチャツカの火山

カメラ　N・ザイツェフ
V・チスチャコフ他



1975年、カムチャツカ半島で最大級の噴火が起こった。トルバチク火山(3682m)が活動を再開し、火を吐きつづけたのだ。この噴火は2年間断続的に続いた。

トルバチク火山の噴火時（1975—77年）のある一瞬

アバチンスカヤ火山（2738m）の火口で火山ガスのサンプルを採取する火山研究所の研究員たち



ガイザー（間欠温泉）の谷

ソ連は地球の陸地の$\frac{1}{6}$を占める大きな国だが、活火山があるのはカムチャツカ半島とクリール諸島だけである。

カムチャツカ半島は南北に約一二〇〇kmも延び、面積は三五万平方km。ソ連の辺境の地の中でも一番興味深く、エキゾチックな所である。

何百kmもつづく山脈のあちこちに円錐状の火山がそびえる。銀色の雪におおわれていることが多い。ひときわ目立つのが活火山が連なるウォストーチヌイ山脈。その多くは周囲の山より抜きん出て高く、火山特有の美しい円錐状の頂を天空に伸ばしている。だが時には10座ほどの円錐火山がくっついた複成火山とも言える山塊にもぶつかる。

カムチャツカには一六〇〇以上の火山があり、そのうち28が活火山である。ほとんどすべての火山活動はこのえんえん八〇〇kmも伸びるウォストーチヌイ山脈に集中している。噴火活動はこの長い帯の各所で起こるが、一番活発なのはクリュチェフスカヤ火山地区とトルバチク火山地区である。

クリュチェフスカヤ火山（四七五〇m）はカムチャツカはもとより極東一の最高峰で、学者が突きとめたところによると25―30年に一度大噴火を起こす。最近の噴火は一九六三年に観察された。

カムチャツカで起きた最大規模の噴火活動の一つとも言える大噴火が一九七五年に始まり、2年間つづいた。これはトルバチク火山（三六八二m）の噴火だった。活発な活動が終わった時、トルバチク火山地区には新しい火山が誕生していた。

地球上では毎年20回余りの噴火が認められる。活火山の噴火はおおむね定期的に繰り返される。だが新しい火山の誕生は、特に陸上では、並の現象ではなく、めったにお目にかかれない。それにもかかわらずトルバチク火山の噴火はカムチャツカの噴火活動のごく小さなエピソードに過ぎない。火山――これは地球の内なるエネルギーを機械的仕事に転換する複雑な熱機関だからだ。ただわれわれは、それがどんな形で現れるのか――破壊的爆発になるのか、ゆるやかな熔岩の流出になるのか予知できない。だがこの噴火活動の多様性の研究は、噴火予知を可能にし、火山のエネルギーの平和的利用に関する問題提起さえ可能にする。

カムチャツカの自然は多様だ。ツンドラ（凍土帯）におおわれた地域と緑の森林帯とが隣り合っている。花咲く美しい谷、そこに散在する無数の湖、湖から流れ出る青い小川（なかには激しく水が流れ落ちる滝まである川もある）――その美しさに魅了される。

カムチャツカ沿岸の気候は湿度が高い。雪、雨、霧が多く、強い風が吹く。沿岸から離れるともっと乾燥した大陸性気候になる。だがカムチャツカの自然を一番よく特徴づけているのは何と言っても火山で、火山はここでしか見られないユニークな美しい自然を作り出している。カムチャツカの半分以上は溶岩や火山凝灰岩におおわれている。火山灰は極めて地味に富んでいるため、噴火があった地区には丈の低いシベリアベニマツ、ハンノキ、ナナカマドの木が生い茂っているのが見られる。

火山帯は間欠温泉、熱水湖、湯の川に結びついている。ガイザー（間欠温泉）の谷――巨大な杯状をしていて独特の微気候をもつ――を初めて訪れる人は、熱水湖と雑多な色どりの岩石の間の色鮮やかな植物を見て、幻想的な創世紀の世界に来たかと思うだろう。

矛盾してはいるが火山は人間の生活の中で大きな意味を持っている。火山は大陸や海洋の島々をつくった。地球の表面の水や大気は何億年にもわたって、火山や温泉の形で地球が放出したものだ。農業を営む人口の密度が最大なのはまさに噴火による火山灰が堆積した地域である。

火山――それは巨大な熱エネルギーの源であり、膨大なエネルギーを蓄えている。発電所のボイラーに火山を利用する構想などは、つい先頃まではバカバカしい夢物語と思われていたが、現在、無益に浪費されている火山エネルギーの利用は科学の今日的問題である。

一九六七年にはソ連初の地熱発電所――パウジェトカ発電所がカムチャツカに建設された。最初は出力五〇〇〇kWから出発し、次いで一万一〇〇〇kWにまでアップした。もちろんこの実験は小規模だったが、地球の深部の熱の発電への利用が効率のいいものであることを実証した。各火山の熱の蓄積量が石油やガスの埋蔵量と同列に考えられる日もそう遠くはないかも知れない。



トルバチク火山の噴火の時、周囲数十kmにわたって火山灰が降り注ぎ、堆積した。



コマンドル諸島には美しい滝がたくさんある。

自然の宝庫 コマンドル諸島

ゲンナジー・ウォロノフ

カメラ V・チスチャコフほか



〝小人の森〟で見つけたキノコ。この島にはイグチ属が特に多い。



▼捕獲頭数が厳しく制限されているオットセイ

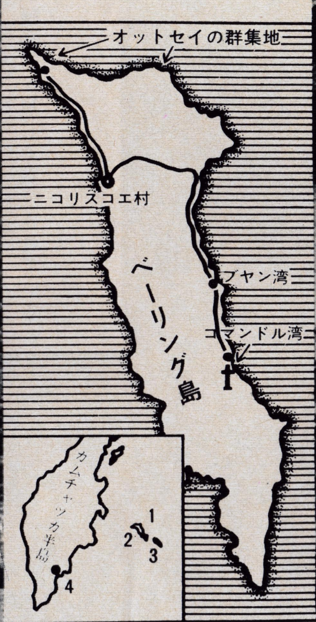


コマンドル諸島にはソ連最大のオットセイ群集地がある。



ニコリスコエ村地域の海岸。コンブがたくさん生えている。





1　コマンドル諸島
2　ベーリング島
3　メードヌイ島
4　ペトロパブロフスク・カムチャツキー





われわれはディーゼル船ニコラエフスク号に乗ってコマンドル諸島に向かった。ニコラエフスク号はほぼ10日に1度、コマンドル諸島に向けてカムチャツカ州の行政中心地ペトロパブロフスク・カムチャツキー（人口二四万）を発つ。所要時間は一昼夜。それほど大した航海ではないが、

右上　予防接種を受けるオットセイ
右中　オットセイの攻撃から身を守る箱に入って観察する全ソ太平洋漁業・海洋学研究所の学者たち。
右下　コマンドル諸島は海鳥の楽園でもある



ベーリング島のコマンドル湾

コマンドル諸島は自然、気候、生活条件がカムチャツカとはまったく異なる。ペトロパブロフスク・カムチャツキーの港を出るときは明るい夏の太陽が輝いていたが、翌日の早朝にはすでに、霧雨まじりの冷たい風が吹き始めた。

雨のベールを通して、てっぺんがナイフで平らに削り取られたような、あまり高くない山がいくつも見える。ベーリング島である。ディーゼル船は泊地に投錨し、われわれを含む12人の乗客はワイヤーで編んだ大きなネットで平底のはしけに乗り移った。はしけが乗客と荷物をニコリスコエの桟橋まで運んだ。

ニコリスコエ村はコマンドル諸島の〝首都〟である。人口は約一五〇〇。

ベーリングの悲劇

コマンドル諸島は四つの島



ニコリスコエ村にあるベーリングの記念碑



◀コマンドル諸島の〝首都〟ニコリスコエ村

から成る。最大の島は一七四一年にここで没したロシアの優れた航海家ビーツス・ベーリングの名を取って、ベーリング島と呼ばれる。島は北西から南東に85km延び、幅は約30km。2番目に大きいメードヌイ島はベーリング島の$\frac{1}{2}$の大きさで、あと二つの島―トポルコフ島とアーリー・カーメニ島はごく小さくて、島というよりは岩礁である。

島を探索するにはキャタピラー式の水陸両用車がいい。海岸にはコンブがうず高く打ち上げられており、キャタピラーはたえず深くもぐってしまう。この褐色の海藻は強いヨードの臭いを放っている。

小さな流れの前で停車する。一七四一年11月のある寒い夕方、渇きに苦しんでいたベーリング指揮下の探検隊が水を飲んだ流れである。一行の乗艦"聖ピョートル"号は嵐で錨綱を切られ、船員たちは艦を棄てて上陸したのだった。彼らはそこをカムチャツカ半島だと思い、すぐにペトロパブロフスク・カムチャツキーへ帰れると考えた。だが、海岸近くの山に登ると、そこは木も生えていない島だということが分かった。

重病のベーリングと大半の隊員たちにとって、それは死刑の宣告に等しかった。越冬に耐えたのは76人のうち45人だけだった。

われわれは海岸の砂に掘られた穴の縁に立っている。それはベーリング隊が住んだ穴ではない。それらはとっくの昔に砂に埋まってしまった。これらの穴は、のちに行われた発掘の跡である。ここで発見された大砲、武器、調度類は、いまは博物館に保存されている。

動物たちの楽園

コマンドル諸島の自然もまたユニークである。大陸から隔絶されたこの小さな諸島には、きわめて珍しい動物の種が残っている。

ここはわが国最大のオットセイの群集地である。世界で最も貴重な毛皮海獣ラッコもここに集まる。岩には数百万羽の海鳥が営巣し、川にはサケマス類が産卵にくる。オットセイの群集地の一つがベーリング島の北西海岸にある。オットセイは春から秋までここにいる。寒さの襲来とともに、彼らは幼獣と一緒に外海へ去る。

ここではオットセイの平和を乱さないよう配慮されている。自動車で群集地から2km以内に近づいてはならず、焚き火をすること、犬をつながずに放置することが禁じられている。もちろん、われわれはオットセイにできるだけ近づいて、よく観察したかった。われわれは高さ2mの壁のある板張りの遊歩廊に入った。これは遠く海岸の方まで突き出ていて、見物者の姿を隠してくれる。姿を見られずに木造のやぐらに近づき、はしごを登って、狭い窓にへばりついた。

オットセイを見ていると心が満たされる。美しく、穏やかで、それでいて決して鈍重ではない動物――オットセイ。

コマンドル諸島を肌身で感じるためには、島を横断しなければならない。キャタピラー式の水陸両用車でわれわれは東海岸、色とりどりの小石で有名なブヤン湾に向かった。

キノコの森と色とりどりの石

通行は困難をきわめた。水々しい丈の高い草は、まだ刈り取られていない、水浸しの牧草地を思わせた。広々とした高台には、草よりほんの少し丈の高い"木"（そう呼べるなら）が生えていた。この"小人の森"にはキノコがたくさんあった。キノコを見つけると、運転手は飛び降りて、すぐにキノコをたくさん抱えてもどってきた。

ブヤン湾は別名"飾り石の湾"とも呼ばれる。湾に注ぎ込む川が、メノウや玉髄、オパールなどのまじった小石を運んでくるからだ。

記念にすてきな石を見つけようと思っても、夏の間はむずかしい。地元の人々や観光客がみんな拾ってしまうからだ。時化で海底がかきまわされる冬には、思いがけない発見が期待できる。

閉ざされた世界の微妙なバランス

コマンドル諸島の自然は傷つきやすい。だから特別な生物学的保護が必要である。

学者たちの頭痛のタネの一つはアメリカミンクである。商業捕殺後のオットセイの肉を利用してミンクを飼育する小さなソフホーズがベーリング島に設けられ、そのために一九六一年にミンクが移入された。だが、その後オットセイの爆発的な増加はなくなり、捕殺数も減り、ミンクにまわる肉が足りなくなってしまった。ミンクの飼育は困難に直面している。

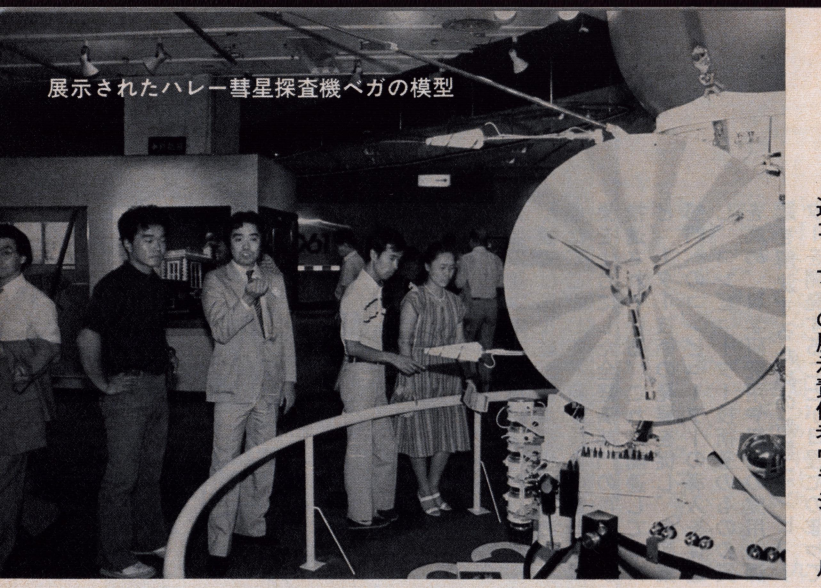
だが、それよりももっと深刻なのは、ミンクの一部が逃げてしまったことである。ミンクは自然の条件に容易に順応し、ここ5―6年の間に、ベーリング島のほとんど全域に住みついてしまった。どう猛なミンクが増えたことによって、たちまち水鳥の数が減った。サケマス類の幼魚にも影響が出始めている。

連鎖反応という言葉がある。毛皮獣飼育ソフホーズの目玉としてのミンクの飼育は、新しい労働力を引き寄せた。よそから島へ人々がやってくるようになった。人口の増加は牛の頭数の増加をもたらした。牛はしばしばラッコの群集地の近くで放牧される。

ラッコは非常に敏感な動物で、ストレスがたまると発病するほどである。

ツンドラ（永久凍土）が被害を受けやすいというのもよく知られている事実だ。特に島のツンドラはデリケートである。というのは、動物と植物の閉ざされた世界は、きわめて微妙なバランスを保っているからである。

オットセイ、ラッコ、青ギツネ、鳥、ユニークな自然はコマンドル諸島の宝である。この宝を守ることが将来のための主要な課題である。学者たちはコマンドル諸島における人間の経済活動を最小に抑え、ここを国立公園に指定することを提案している。

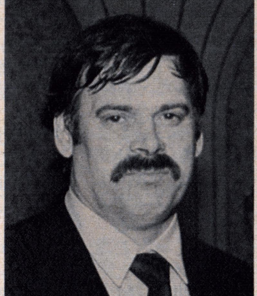


展示されたハレー彗星探査機ベガの模型

地球＝金星＝ハレー彗星

――大ハレー彗星展のソ連コーナー責任者に聞く

7月26日、東京の西武百貨店池袋店7階で"大ハレー彗星展"が開幕した（8月21日まで）。主催は読売新聞社で、ソ連、米国、英国の関係機関が参加した。V・デウーリン本誌記者がソ連コーナーの展示責任者ウラジーミル・ミナーエフ（ソ連科学アカデミー職員）に話を聞いた。



V・ミナーエフ

「ハレー彗星に対する一般の関心が強いのも決して偶然ではない。この明るい彗星は、その楕円軌道が計算され、それによって太陽に対する周期的回帰性が証明されたという記念すべき周期彗星である。18世紀始め（一七〇五年）、英国の天文学者E・ハレーが軌道を計算し、その後この彗星はハレー彗星と呼ばれるようになった。学者たちのその後の研究は、ハレー彗星の出現の時期を正確に推定しただけでなく、現在までハレー彗星は地球の住民によって29回観測され、しかも最初は紀元前四四六年、最後は一九一〇年であったと確定した。ハレー彗星の周期は76・03年である。

人類の発展とともに宇宙の神秘もどんどん解明されており、ハレー彗星の研究も宇宙の謎解きに大きな役割を果たしている。それというのも、ハレー彗星は、質量が小さく（直径数km～数十km）、太陽からの距離が大きいために、"第一生成"物質を内蔵しており、それによって太陽系形成の初期の段階についての重要な情報を保存しているためである」

――それとの関連で、ソ連が参加している国際科学プロジェクト"ベガ"についてもっと詳しく話してほしい。

「このプロジェクトにはオーストリア、ブルガリア、ドイツ民主共和国、ハンガリー、ポーランド、ソ連、フランス、チェコスロバキア、ドイツ連邦共和国（マックス・プランク協会）の専門家たちが参加している。R・サグジェーエフ・アカデミー会員が指導する国際科学技術委員会がこのプロジェクトを調整している。

一九八五―八六年にハレー彗星をめざす探査機の軌道と金星の軌道を一致させることができることが確認された。その目的でソ連のバイコヌール宇宙基地から自動探査機"ベガ"を積んだロケットが2基、一九八四年の12月15日と21日に打ち上げられた。金星に向けて独立した二つの探査機、ベガ1号とベガ2号が6日の間隔を置いて打ち上げられたのは、調査の確実性を高めるためだ。

探査機ベガは降下装置と飛行体の二つの部分から成っている。降下装置は金星の調査、飛行体はハレー彗星の調査を受け持つ。降下装置による金星調査の仕組みは本誌4号で紹介されたとおりだ。

飛行体はそのまま飛びつづけて、一九八六年3月6日と12日にハレー彗星と出会う。探査機は彗星の核から一万km離れた太陽の反対側を通過する予定だ。1号が通過するときに得られるデータに従って2号の軌道が修正され、2号は彗星にずっと接近する。三軸制御によって、探査機は誤差約1度の範囲内で姿勢を保つ。1号と2号はそれぞれ別の周波数――6万5536ヘルツと3072ヘルツの電波で情報を伝える」

――大ハレー彗星展のソ連コーナーには何が展示されているのか？

「中心は宇宙探査機ベガの$\frac{1}{2}$大の模型だ。そのほかいくつかの機器や隕石も展示されており、ビデオでベガ計画のさまざまな段階が示される。1日平均二五〇〇人の参観者がある。」

ソ連共産党第27回大会に向けて

人間とコンピューター

来年2月に開かれるソ連共産党第27回大会ではさまざまな問題とともに、「一九八六－一九九〇年度および二〇〇〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本方向」が討議される。現在、ソ連では国民経済の集約化を進める主要なてことして、科学技術の最新の成果を土台にした全経済部門の再装備が推進されている。これに関連してコンピューター技術の発展を促し、各産業部門へのコンピューター技術の導入を促進し、コンピューター技術そのものの質を高め、科学研究用や経済の実用的課題を解決するための新型コンピューターを開発することが日程にのぼっている。ソ連の〝コンピューター化〟の現在のレベルと将来の展望について本誌経済評論員のゲンナジー・ピサレフスキーが述べる。

本誌経済評論員　ゲンナジー・ピサレフスキー

一九五〇年にセルゲイ・レベジェフ・アカデミー会員（一九〇二－一九七四年）の指導の下に設計されたソ連製電算機第1号は1秒間に50回の演算ができたが、現在量産されているコンピューター〝PS2000〟（PSは〝並列システム〟の略）は1秒間に二億回の演算が可能だ。30年ちょっとで処理速度が四〇〇〇万倍も大きくなった！　今や毎秒数十億回演算のコンピューターの開発も間近だ。

ついでに指摘しておくと、PS2000は新しい原理によって設計されており、情報処理の制御と組織の2機能を遂行する特殊なプロセッサーが備わっている。米国、英国、フランスではこの型のコンピューターはまだようやく作られだしたばかりだ。実はソ連の学者が西側の学者たちにこのコンピューターの共同開発を提案し、西側の専門家たちも関心を示したのだが、共同研究は成立しなかった。米国政府、ついで対共産圏輸出統制委員会（ココム）が貿易だけでなく、エレクトロニクス分野における先進資本主義諸国とソ連の科学・技術協力も凍結したためである。

理性と創造を独占することは、周知のように、不可能だ。〝コンピューター・ブレーキ〟によってソ連経済の発展を停滞させようとする試みは明らかに効果がない。ソ連のLSI（大規模集積回路）、超LSIの品質は米国製のものにも日本製のものにもひけをとらない。ソ連の学者はすでにいくつかの点で西側の同僚を追い越している。特に、記憶の並列（同時）利用といった機能を持つコンピューターの生産をすでに軌道に乗せた。

だがコンピューターの生産台数、特にパソコンの生産台数ではソ連は今のところ米国や日本より劣る。この後れは近い将来克服される見込みだ。

国民経済コンピューター化計画

コンピューター化計画は二〇〇〇年までの期間を見込んで作成されており、この計画はコンピューターの生産の促進、その品質の向上、新しいタイプの電算機の開発を保証するはずである。

さまざまな世代のコンピューターが事実上あらゆる専門家に徐々に使いこなされるようになって来ている。技師、医者、エコノミストが今や独力で膨大な情報量を処理できる。

人間の知性の占有物と考えられていた科学・理論的活動がコンピューター化されている。コンピューターの利用は理論物理学、数学の一連の分野、天体力学、生物学、医学で特に成果を上げている。医師たちは情報のコンピューター処理に基づいて毎年の全国的な住民の病気予防対策を立てている。マイクロプロセッサーやミニ・コンピューターは最も近い将来、二〇万種以上の各種工業用・生活用機器に組み込まれ、幅広く使用されよう。

制御の全段階の自動化

自動制御理論は予想される事象についての情報を不確定の度合いの縮小として解釈する。事象を予測し、不確定性を最小限にもってゆき、誤りを敏速に正す――これが自動制御システムの主要な課題だ。

とっさの人間の反応は遅く、時にはマイカーさえうまくコントロール出来ないほどだ。しかしそれでも人間は宇宙の乗り物、原子炉、化学装置を制御することをおぼえた――コンピューター技術がわれわれの反応をありえないほどの速度にまで高めたからだ。コンピューターをベースに工程自動管理システムが作成され、急速に改良されて、産業の独立した要素となった。

第11次5カ年計画期の4年間（一九八一－八四年）にソ連では一八三八の工程自動管理システムが導入された。一九八五年には前年比30％増の七三五システムが作成される予定である。工程自動管理システムは溶鉱炉や圧延機をはじめ、セメント工業、化学工業、その他の工業部門の大規模装置の働きを調整している。

自動管理システムは多様で、用途ごとにそれぞれのプログラムが必要だ。だが経済の中央管理という条件だと、全システムをそれぞれの部門の枠内で共通の分母に組み入れられる。将来はソ連の省庁のあらゆる自動管理システムが単一の全国情報収集・処理システムに統合されよう。

全国情報収集・処理システムは管理機関の上部構造ではない。それは、計画のもろもろの課題を解決する際、国民経済の、いわば全コンピューター・パワーの利用を可能にする機構である。このようなシステムの創設は、科学技術革命の成果と経済の計画的発展の長所との結合の一つの例である。

生産のロボット化

ロボットはコストが高く高度に科学集約的な製品だ。だから専門家は、ロボットのいわゆる知性を高めると同時に、コストダウンにも努めている。そのために設計・製造には統一されたブロック＝モジュール方式を適用している。この方式だとロボット設計の単純化、ロボットの製造・据え付け・操作に要する日数および出費の根本的削減が可能になる。次期5カ年計画（一九八六－九〇年）期中にソ連では一〇万台以上の産業ロボットと四〇〇〇以上の自動化・半自動化ライン、NC工作機一一万台以上が生産現場に導入される予定だ。完全に自動化された部署や工場も含めて約二〇〇〇のフレキシブルな自動生産システムと、最大三〇〇〇の自動設計システムが始動する。

生産のコンピューター化に関係する多くの問題をソ連は、二〇〇〇年までの期間を見込んで作成されたコメコン（経済相互援助会議）諸国の科学技術進歩総合プログラムの枠組みの中で、コメコン諸国と共同で解決している。その一九九〇年にはコメコン諸国のロボット保有台数は二〇万台になろう。その頃には生産状況を分析し、それに基づいて作業条件を変えることの出来るマイクロプロセッサー装置つきのロボットが主流を占めよう。これは――〝産業環境のフィード・バック〟と専門家は言っているが――最も複雑な製品を生産する企業の完全な自動化をやってのける。国民経済コンピューター化全国プログラムの実施は、何百万もの人間をより知的な生産段階に移すことを可能にする。もちろん、エレクトロニクスによる自動化で配転になった人は再教育を受けねばならない。そのためにわが国には、効果が実証ずみの、無料の職業教育・再教育システムがある。

何よりもまずロボットは重労働、危険な単純労働――鋳造、溶接、塗装、プレス、組み立て、その他の部門で人間にとって代わっている。二〇〇〇年までにわれわれは特殊技能を必要としない労働、手作業による重労働を全般的に根絶する予定である。

ソ連で目ざしているのは、ヒューマニズムと効率の統合だ。人間的要因はコンピューター化の過程を分析する際の重要な概念になる。ソ連では急速に発展する機械の世界と人間の世界の調和を目ざしている。コンピューター化――これは人々の労働生活と生活条件を改善する手段の一つにすぎない。

現在のコンピューターだけでなく未来世代のコンピューターも、万能性、創造的能力、知性の面で人間の理性には太刀打ちできない――これがわれわれの出発点だ。だからわれわれはコンピューターを、人間の物質的・精神的発達のための根本的に新しい可能性を作る道具だと考えている。

ミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長の言葉を借りれば、ソビエト社会の新たな質的状態の理解が問題になっているのである。これはまず第一に、生産の科学技術的革新であり、労働生産性を世界の最高水準に引き上げることであり、労働の分野における大きな変化、保健・教育の改善、自然保護その他多くのことを意味している。

催し物のお知らせ

☆ボリショイサーカス日本公演

福岡・福岡スポーツセンター（8月18―26日）、京都・醍醐スケートセンター（8月29―9月1日）、筑波・エキスポプラザ（9月4日―10日）、仙台・宮城スポーツセンター（9月13―16日）、前橋・群馬県スポーツセンター（9月20―23日）、横浜・横浜文化体育館（9月26―29日）、浜松・市体育館（10月3―6日）

▽お問い合わせは、エミー・インターナショナル内ボリショイサーカス公演本部（電話03・234・7207）へ。

☆オシポフ記念国立ロシア民族オーケストラの公演

東京厚生年金会館（9月30日）、小樽市民会館（10月2日）、北海道厚生年金会館（3日）、秋田市文化会館（5日）、宮城県民会館（6日）、埼玉会館（7日）、神奈川県民ホール（8日）、沼津市民文化センター（9日）、四日市市文化会館（10日）、高松市民会館（11日）、鹿児島市民文化ホール（14日）、熊本市民会館（15日）、九州厚生年金会館（16日）、長崎市公会堂（17日）、下関市民会館（18日）、福岡市民会館（19日）、岩国市民会館（20日）、京都会館第1ホール（21日）、神戸国際会館（22日）、大阪フェスティバルホール（24日）、静岡市民文化会館（25日）、名古屋市民会館（26日）、長野県民文化会館（27日）、富山市公会堂（28日）

▽電話予約・お問い合わせ先／民音・予約センター（電話03・363・9151）、各地民音事務局

☆ノボシビルスク・アンサンブル北海道公演

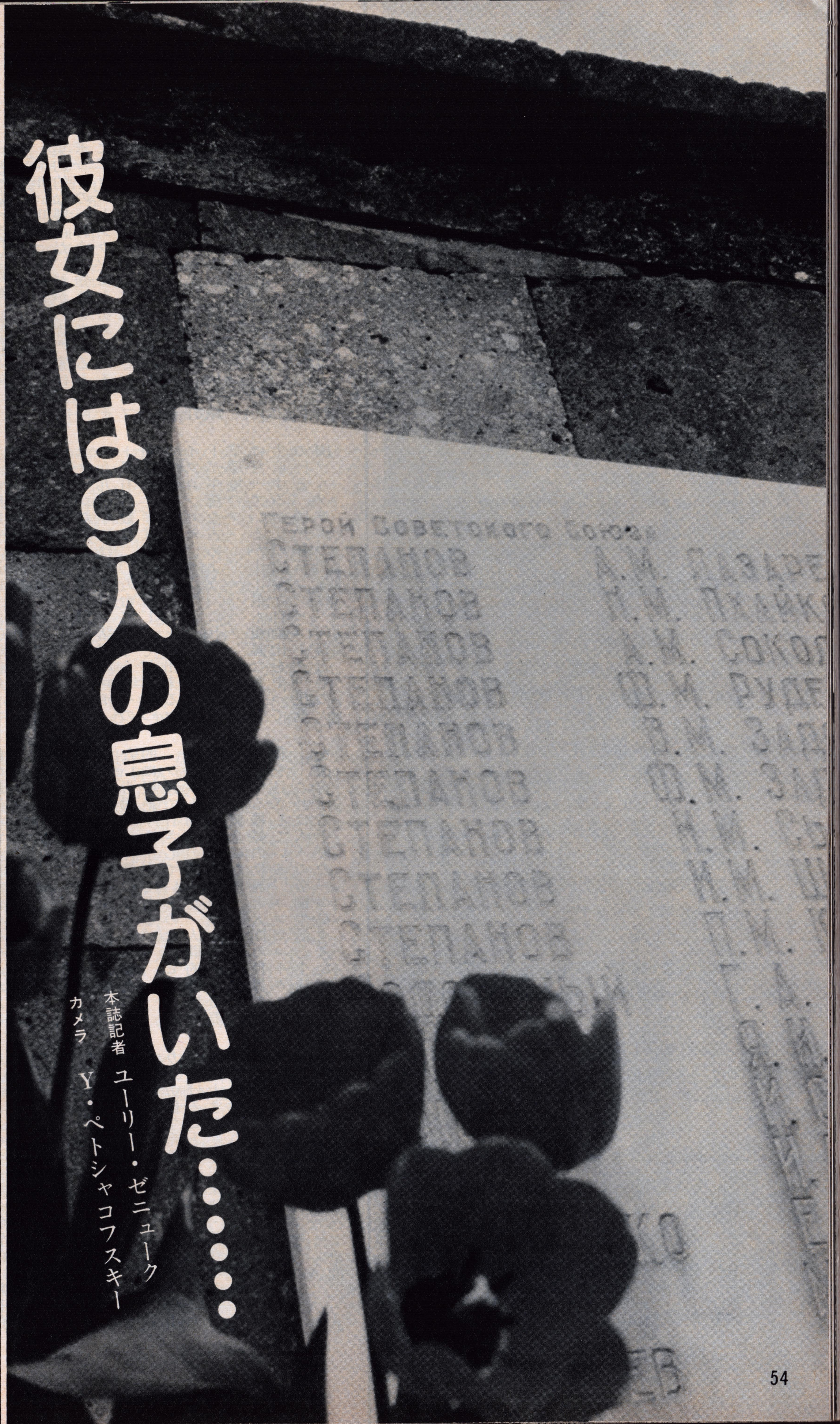
札幌（9月14日）、滝川（15日）、稚内（16日）、旭川（17日）、紋別（18日）、北見（19日）、池田（21日）、釧路（22日）、苫小牧（23日）、函館（24日）、赤平（25日）

▽お問い合わせは、日ソ協会北海道連合会（電話011・631・2503～4）へ。

40

彼女には9人の息子がいた……

本誌記者 ユーリー・ゼニューク
カメラ Y・ペトシャコフスキー



ステパノフ一家が住んでいた村から近いチマシェフスク市に国内戦（一九一八―一九二〇）と大祖国戦争（一九四一―一九四五）で死んだ戦士の記念碑が建てられた。〝ステパノフ〟という姓が9つ並んでいるが、これはみなエピスチニア・ステパノワの息子たちである。

北カフカズのチマショフスク市（ロシア連邦共和国クラスノダル地方）に近い「5月1日」村。この村にカヤぶき屋根でレンガ壁の一軒の古い家がある。周囲の新しい、今風の家々と比べるとひときわつつましく見えるこの家は、今世紀の初めに建てられたもので、もうとっくに寿命が過ぎているという感じがする。この家に住んでいた人も、もういない。村人たちは、戦時中の勇気と偉業、戦争が多くのソ連の家庭にもたらした悲しみと涙を象徴するこのステパノフ家を記念するために、この家を保存し、博物館にした。

この博物館は「母の博物館」と命名された。母親のエピスチニア・ステパノワに敬意を表してのことだ。彼女の人生の半分はこの家と結びついていた。ここで彼女は愛の喜びを知り、母親としての幸せを知った。そしてここで夫と9人の息子全員の死を悲しんだ。

エピスチニア・ステパノワは何度、重い粗末なトランクからお葬式用の黒いスカーフを取り出したことだろう。最初にそれを着けたのは、ずっと昔の一九一八年、国内戦で息子のアレクサンドルがソビエト政権のために戦死した時



国内戦と大祖国戦争で9人の息子を失ったエピスチニア・ステパノワ（一八七四―一九六九）

だった。クバン地方にソビエト権力が樹立されると、ステパノフ一家も土地を持たない他の農民と同じく土地の配分を受け、最初は農業公社、そのあとはコルホーズを組織した。次男のニコライが村のコムソモール組織の最初の書記になった。

一九三五年、ステパノフ家は再度不幸に見舞われた。父親が死んだのだ。稼ぎ手がいなくなった子沢山のこの一家をコルホーズが援助した。

五男フョードルは一家で最初の将校になった。最初に死んだ長男アレクサンドルの死後21年たって、母はまた息子のために黒のスカーフを取り出さなければならなかった。一九三九年、モンゴルのハルハ河畔の戦闘（ノモンハン事件）で、少尉のフョードル・ステパノフは壮烈な死を遂げたのだ。そのときはまだエピスチニア・ステパノワも、自分の生涯で、そしてソビエトの家庭、全ソビエト国民の生活で最も暗い時代が近づいていることを知らなかった……

一九四一年6月22日、ヒトラー・ドイツはソ連に襲いかかった。そしてステパノフ家の男たちはみな祖国の防衛に立ち上がった。戦争が始まって数日後、少尉だった八男のパーベル・ステパノフが国境のまちブレスト近郊で戦死した。そしてやはり戦争が始まってまもなく、機関銃手だった六男のイワン・ステパノフがドイツ・ファシスト軍との最初の戦闘で重傷を負い、ドイツの捕虜になった。やがて脱走したが、また捕まり、銃殺された。

戦争も半ばの頃、エピスチニアは前線のワシリー・ステパノフ（三男）から最後の手紙を受け取る。手紙には彼が弟のフィリップ（四男）に出会ったことが書かれていた。それはステパノフ家の兄弟たちが戦争中に再会できたただ一度の出来事だった。ワシリーは自分の部隊と共に敵に包囲されたが、包囲を脱してパルチザン部隊に合流することができた。ある奇襲の時、偵察に出たワシリー・ステパノフは、ドイツの前哨部隊とはち合わせし、捕虜になってしまった。ドイツ兵は情報を得ようとして拷問にかけたが、ワシリーは口を割らず、銃殺された。その頃フィリップはファシストの強制収容所でゆっくりと忍び寄る死と向かい合っていた。彼は勝利まであと3カ月という時に鉄条網の中で死んだ。

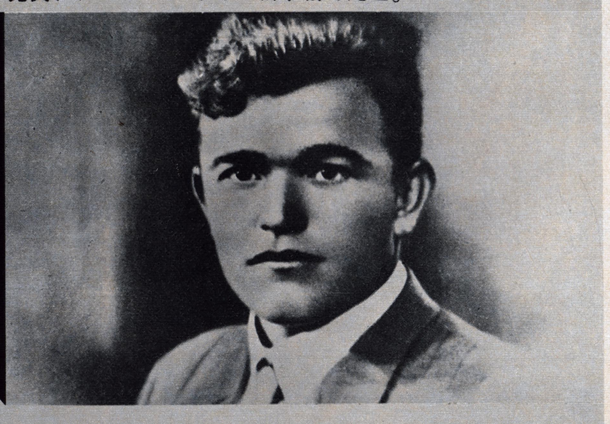
一九四三年、末っ子の上級中尉アレクサンドル・ステパノフ（国内戦で死んだ長兄の名前をもらった）が武勲を立てた。彼の指揮する中隊はドニエプル川（ウクライナ）右岸の橋頭堡を奪取したが、敵の反撃を受け、中隊は壊滅した。生き残ったのは指揮官だ



ニコライ・ステパノフ（1903―1947）、戦場での傷が悪化して死亡。



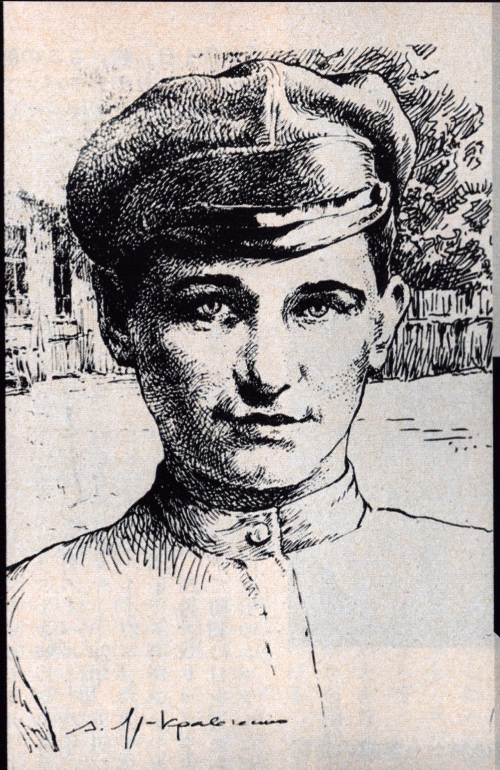
イリヤ・ステパノフ（1917―1943）、共産党員、クールスク郊外の戦車戦で死亡。



フィリップ・ステパノフ（1910―1945）、共産党員、ファシストの収容所で死亡。



▶イワン・ステパノフ（1915―1943）、共産党員、ドイツ軍により銃殺された。



◀アレクサンドル・ステパノフ（1901―1918）、国内戦でソビエト政権の敵に銃殺された。

アレクサンドル・ステパノフ（1923―1943）、共産党員、ソ連邦英雄、ドニエプル戦で死亡。



▶白いワンピース姿の9人の娘たちが手にしているのは、エピスチニア・ステパノワの9人の息子が亡くなった場所から持ってきた土。戦没将兵の墓でこの日、その土の埋葬が行われた。





ワシリー・ステパノフ（1908―1943）、共産党員、ドイツ軍により銃殺された。

▼パーベル・ステパノフ（1919―1941）、共産党員、ブレスト近郊で戦死。

▼フョードル・ステパノフ（1912―1939）、共産党員、モンゴルのハルハ河畔で日本軍との戦闘で死亡。







「5月1日」村。ここの静かな川のほとりでステパノフ一家は平和な日々を送っていた。

けだった。アレクサンドルは長時間敵の強襲を阻止し、弾が尽きたとき、最後の手榴弾で、近づいた敵もろとも自爆したのである。死後、彼はソ連邦英雄の称号を授与された。同年、クールスク近郊で戦車中隊長だったイリヤ・ステパノフ大尉（七男）が死んだ。ステパノフ家の息子たちが生きた期間は次の通りである。長男アレクサンドル――17年、九男アレクサンドル――20年、八男パーベル――22年、七男イリヤ――26年、五男フョードル――27年、六男イワン――28年、三男ワシリー――35年、四男フィリップ――36年。生きて勝利の日を迎えられたのは次男のニコライただ一人だった。彼は重傷者専門の病院に8カ月間入院していた。ようやく家に帰ってきたが、母が喜ぶ間もなかった。戦争の時の傷が再び悪化し、一九四七年に死んだ。ステパノフ家の男たちはこれで絶えた。

一九六九年、母エピスチニア・ステパノワが亡くなり、娘のワレンチナだけが生き残った。その彼女の協力で、戦争で亡くなった兵士たちを偲ぶステパノフ家博物館が村につくられた。

ステパノフ家の人々の運命は悲劇的だが、滅多にないまれな例だとは言えない。同じ北カフカズの小さな自治共和国北オセチアには、戦場から一人も帰らなかった兄弟たちが何組もいる。ザウリカウ村のガズダノフ家の7人兄弟、レスケン村のテミロフ家の6人兄弟、カドガロン村のカラゴフ家の5人兄弟……。彼らの戦功や彼らの短い英雄的な生涯、彼らの肉親や近親者についても、この博物館は物語っている。

博物館の来館者は主に近隣の村々の住民だが、国内の他の都市や海外からの訪問者もいる。最近はコロンビアの詩人アルバロ・ミランダが訪れた。展示物の中で彼が一番胸を打たれたのは、末っ子のアレクサンドル・ステパノフの前線からの手紙である。

アレクサンドルは書いている――「ママ……。ママのこんなにも多くの息子たちが前線で武器を手にし、愛する祖国を防衛していることを誇りに思わなくちゃ。ママ、もうすぐぼくたちは凱旋するからね。万一ぼくたちが戦死するようなことがあっても、ぼくたちはソビエト国民の幸せのため、地上の平和と幸福のために死んだということを忘れないで」

博物館の感想帳にミランダはこうしたためた。

「私はここで二つの疑問の答えをすぐに見いだした。一つはなぜあなた方があの戦争で勝利したかということ、もう一つはソビエトの人たちがなぜあれほど平和を熱望しているかということ……」



◀隣の村から学校の生徒たちが博物館の見学に訪れた。



ステパノフ家でただ一人生き残ったワレンチナ・コルジョワ＝ステパノワは元教師で、現在は、ロストフ・ナ・ドヌー市で年金生活を送っているが、よく博物館にやってきて母、父、9人の兄弟たちの思い出にふける。

少女ターニャを追って

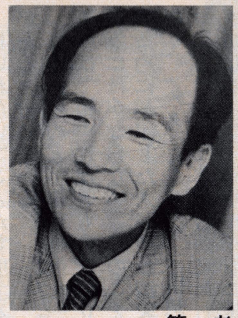
作家　早乙女　勝元

ふつう一冊の本を書くためには、かなりの歳月が必要なのだが、この三月中旬にレニングラードで取材した物語が、もうきれいな絵入りの本になって出た。『ターニャの日記』が、それである。

今回の訪ソは、ソビエト貿易を主にした商社イスクラ産業のすすめで、レニングラード攻防戦のなかの悲劇の少女ターニャ・サビチェワの足跡を追いかけようというこころみだった。



早乙女勝元＝文、矢崎芳則＝絵の『ターニャの日記』（草土文化発行）の表紙



筆者

ソビエトの戦争被害については、知らないわけではなかったが漠然とした観念を超えることなく、生々しい悲惨を感じとるところまではいかなかった。私のみならず、多くの日本人がそうではないのだろうか。

しかし、ネバ河沿いの国立歴史博物館に立ち寄ったあたりから、少しずつ実感がともなってきた。日本軍の真珠湾攻撃から開始された太平洋戦争より、さかのぼること半年ばかり、一九四一年六月、ドイツ軍の対ソ攻撃が始まり、やがてレニングラードは約九百日に及ぶ封鎖下におかれる。零下四十度もの寒気に加え、パンの配給量は一日最低百二十五グラムまで落ちた。ために六十万人を超える市民が餓死したが、この悲劇を象徴的に物語るのは、十一歳の少女ターニャがしるした走り書きのメモ帳だろう。

歴史博物館には、髪にリボンを結び、大きな目をいっぱいに見張ったターニャの面影と、その日記原本が展示してある。少女は子どもらしい筆跡で、次つぎ死んでいく肉親ひとりひとりの最期を、死亡時刻まで丹念にメモし、「みんな、死んだ」「残ったのは、ターニャひとり」と記録し、六人の家族の後を追うようにして、自分もまた疎開先で息絶えた。

アンネの日記とちがって、これはたいそう短く小さなノートであるが、あまりにも大きな悲劇をこんにちに語り続ける。

私は、そのターニャの住居跡を訪ね、さらに少女が生前学んでいたという学校に足を向けた。

しかし、あれから四十年以上もの歳月が過ぎているのだから、浦島太郎と同じに、ターニャの名前さえも通じないのではないかと思ったが、第三五学校の、かつて少女が学んでいた教室は、なんとメルヘンたっぷりのターニャ記念室になっていた。

五年がかりで、子どもたちが収集した資料はみごとなもので、未発表写真もあれば、攻防戦の市民生活を伝える子どもたちの絵も、子どもの父親が描いたというターニャの肖像から、あかあかと燃える永遠の火までである。しかも、子どもたちは、メモ一つ見るでもなく、順番にターニャの生涯を語ってくれたのである。

「私たちは、この国のため、後の世の平和のために倒れた人たちのことを、決して忘れません。私たちの今日から明日は、その人たちのできなかったことを成しとげることだ、と思います……」

小さな解説者のほおに、火があかあかとほてって見えて、私の胸のなかにも燃えひろがってくるのだった。

四十年以上も昔の一生徒の犠牲を忘れることなく、その遺志を受け継いでいこうという子どもたち、教師たちの姿は、こんにちを生きる人間の、人間ならではのありように思えたのである。ソビエト国内に、そんな学校がほかにもあるのかどうかは不明だが、たったひとつでもあったということに私は感動し、帰国するやいなや、たった一週間ばかりで百枚ほどの原稿を完成した。

戦後四十年目のこの夏に、ターニャの日記を偲ぶのも、インターナショナルな平和の心と、どこかで結びあうにちがいない。

『ターニャの日記』は20・4×20・5cmの判型で一〇八ページ、小学校中学年以上向け。定価一二〇〇円。発行所は株式会社草土文化（〒102東京都千代田区五番町10―6　電話03・264・0631、振替東京5＝46122）。

ソ連の視点

両立しないABM条約と〝スターウォーズ〟

ノーボスチ通信政治評論員
E・チェボロフ

ジュネーブ交渉第2ラウンドの終了直前、レーガン大統領は再び〝スターウォーズ〟計画の研究を行う米国の〝権利〟について言明し、米国は今後も強力に宇宙の軍事化を進めると強調した。大統領とその側近は、ワシントンがやっているのは害のない、誰にも何の脅威も与えない〝実験〟だけで、一九七二年のABM制限条約を破るつもりはないと世論に保証しようとしている。

この条約に調印したことによってソ米両国は、核時代にはABMシステムの分野で相互に自粛して初めて核軍備の制限・削減の方向で前進することが、すなわち戦略軍備競争を抑止することができると認めたのだ。このことは条約前文の「対ミサイル防衛システムを制限する有効な措置は、戦略攻撃兵器の拡充競争を抑制する重要な要因であり、核兵器を使用する戦争の勃発の危険を減少させるであろう」というくだりの中にも表れた。

米国は攻撃宇宙軍備計画を進めており、その〝研究〟はまず第一に軍事目的をめざしている。だからこそこの計画は条約全体はもちろん、条文の具体的条項とも両立しない。というのも同条約は宇宙配備のABMシステムもしくはコンポーネント、すなわち米国の〝研究〟がめざしているものの開発と実験を禁止しているからだ。

攻撃宇宙兵器のモデルの開発とその一つひとつの実験が米国で急ピッチで進められている。研究室や実験場では、各種レーザー、電磁ビーム、迎撃ミサイル、衛星攻撃システムの研究が行われている。ボストン・グローブス紙は多くの専門家の意見を引いて、いわゆる〝戦略防衛構想（SDI）〟の枠内で実施されているほぼ14のプロジェクトは、じきにABM制限条約の条項と〝相いれない〟ことが判明するおそれがあると書いている。

ABM条約と宇宙軍事化を一つにするのは、相いれないものを両立させる試みにほかならない。このことはABM条約に調印した米国の政治家だけでなく、〝スターウォーズ〟構想を思いつくまでの現政権の活動家たちもよく承知していた。一九八一年に刊行された米国の公式文書では、第一撃で相手側の戦力を壊滅させる危険のある強力な兵器システムの展開は安定破壊要因であると確認されている。

また、そのような軍備が戦略核兵器使用の誘惑を高めていることもワシントンは認めていた。「安定は、力の戦略的バランスが技術的新機軸あるいは技術突破によって大きく変わらないことを前提としている」と、レーガン政権誕生の数カ月前に作成された米軍備管理軍縮局の報告には指摘された。そこでは、ABM制限条約を米国が破棄すれば「戦略上の安定をこわし、攻撃、防衛両軍備の開発競争の増強を招きかねない」と認められていたのだ。

SDIの熱心な提唱者であるワインバーガー国防長官ですら、かつては、ソ連がいちはやく大規模ABMシステムを開発すれば、「世界は非常に、非常に危険になるだろう」と言明したが、モスクワではなくワシントンが宇宙軍事化を唱えだした今となっては、ワインバーガーはなぜか〝世界が危険になる〟ことを嘆きもしない。

一九七二年のABM条約と一九七四年の同条約付属議定書は、そうした危険を避けるために採択されたのだ。両文書は双方に対し局地的なミサイル防衛措置に限って配備を認めている。しかしレーガンの〝計画〟は米国全土および欧州その他の大陸に数百、ひょっとしたら数千のABM手段を展開することを見込んでいる。

ソ米両国はABMシステムもしくはそのコンポーネントを他国に供与しない、自国領土以外に配備しないという義務を負っている。ワシントンはこの義務を無視して、現在すでに対ミサイル防衛の研究に同盟諸国の参加を呼びかけ、これら諸国に対し、米国の宇宙計画を実施するためにこれらの国の国土を利用できる権利と引き換えに技術情報だけでなくABMの個々のコンポーネントの提供を約束している。

ソ連は、ABM条約が核軍備の制限プロセス全体のカギだと考えている。われわれは同条約の条件を厳守しており、ソ連は攻撃宇宙軍備も大規模ABMシステムも、その種の防衛用基盤も開発していない。われわれの宇宙研究は軍事的傾向をもっていない。モスクワは宇宙空間での武力行使や宇宙から地球への武力行使の禁止をめざしてきたし、今もめざしている。

ジュネーブ交渉でソ連は、学術研究活動も含めて、宇宙兵器開発の禁止を取り決めない限り、核兵器削減を取り決めることはできないと米側に言明した。宇宙軍事化の相互拒否のもとにソ連は、戦略攻撃兵器と中距離核手段の抜本的削減に応じる用意がある。これでわかる通り、ほかならぬ米国のSDIこそ、ジュネーブ交渉の進展を阻む障害の一つとなっているのだ。

ソ米農業協力で議定書に調印

本誌記者 ボリス・アレクセーエフ

ワレンチン・メーシャッツ・ソ連農業相の執務室の壁にかかっている大きな晴雨計の針は〝雨〟と〝晴れ〟の中間を指していた。ことし6月、メーシャッツ農業相とダニエル・アムスタッツ農務次官の率いる米国公式代表団との会見を取材したとき、私はこの晴雨計が今日のソ米農業関係の現状を実にぴったりと表しているように思った。

米国代表団はソ米農業協力共同委員会第7回会議に出席のため訪ソしたもので、会議は議定書の調印をもって完了した。

この会議についてメーシャッツ農業相は「すべての点で前進したとはいえないが、双方の立場を十分に理解し合えば必ず前進するだろう。とにかく協力再開という点で意見が一致したのはよいことだ」と語った。

これに対しアムスタッツ米国代表団長は「およそ協定はよい相互関係の皮切りとならなければならない。克服できない問題はない」と答えた。

交渉の結果、ソ連と米国の研究所、機関は、20のテーマで協力することに決まり、一九八五―八六年度の農業分野の協力措置が策定された。

その措置の中には、農業と農工コンプレクスの他の部門との経済的、組織的結びつきに関する共同研究の実施や農業の生産と学術研究における情報処理システムと最新技術手段の利用などが挙がっている。

またソ連で飼料の生産と利用の問題のセミナーを、米国で農業生産のシミュレーションと農業でのコンピューターの応用に関するセミナーを行うことが決まった。

作物の遺伝子の交換と、最新の品種改良法による農作物の品種、雑種の開発、畜産、養鶏、獣医学分野の一連の諸問題にかんする共同研究の実施について合意が成立した。

また毎年研修員の交換が行われる。

二つのインタビュー

まず、アムスタッツ米国代表団長とのインタビュー。

——議定書のなかであなたが最も興味深いと思われるものは何か？

「いま世界の農業には新しい技術と新しい構想が見られる。こんどの議定書により、ソ連も米国も、最新の成果にたえず精通できるようになる。

それに議定書は、広い範囲の利益と協力分野を取り上げている。議定書のすべての条項が重要だ。しかし私は植物の検疫と動物、家畜の防疫の問題に特に注目したい。このテーマは両国にとって緊要である」

——対ソ協力による貴国のメリットは？

「まずソ米の農民、専門家を近付けるチャンス、いわば相互富化過程である。しかも双方にひじょうに優れた学者、専門家、ひじょうに良い農場経営者がいる。だから調印にこぎつけた努力は、われわれにとってとても大事なものである」

一方、交渉でソ連側代表団長を務めたウラジーミル・コズロフ・ソ連農業次官も交渉の結果に満足している。

ソ連側として、調印された議定書のなかで何をとくに挙げておきたいかという記者の質問に対し、コズロフ次官は次のように答えた。

「若い専門家の交流形態に興味がある。これは米国人がわが国のコルホーズ、ソフホーズで働き、ソ連の若い専門家がアメリカの農場で働くというものだ。双方から毎年15人ずつ派遣される。

学術協力では、コンピューターによる管理と管理活動のプログラミングの諸問題に興味がある。また表土保護技術や土壌の水分・塩分管理の諸問題、胚移植の問題にも興味がある」

モスクワでのこんどの会議は、一九七三年のソ連と米国の政府間協定に従って開かれたものであり、次の第8回会議は来年後半にワシントンで開かれる。

調印された議定書の期限は2年間。

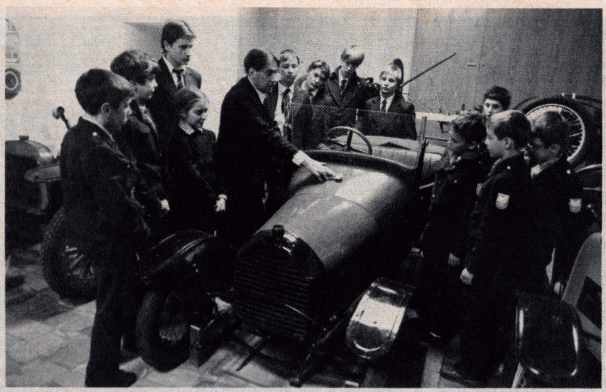
現在ソ連農業省は、50カ国以上と農業分野における科学技術、経済交流を行っている。

タシケントに新テレビタワー

中央アジアのタシケント（ウズベク共和国の首都）に写真のようなテレビタワーが新設された。近代的な設備と高さ三八〇mのアンテナのおかげで、テレビの受信エリアはいままでの4倍に広がり、ウズベク共和国の辺境の土地でもテレビの画像がはっきり見えるようになった。



工学博物館のクラシック・カー



写真のクラシック・カー"プジョー・ベベ"は、ごく最近モスクワ工学博物館に展示されて以来人気の的になっている。この車は一九一三年にフランスで製作されたものだが、いまでも十分使え、モスクワの自動車・オートバイ愛好家クラブ主催のパレードに何度となく出場した。

車の元の持ち主アレクサンドル・フロプノフ（モスクワの大学の教員）は、あくまでも原形どおりに復元しようと、長年努めてきた。フロプノフは博物館に自動車を提供したいまでも、暇を見つけては博物館にやって来て、来館者にこの車の歴史を話している（写真参照）。

幼児専門のサナトリウム



ウクライナ共和国クリミア州の保養地エブパトリアに、このほどサナトリウム式の幼稚園「リャビンカ」（ナナカマド）が開設され、ソ連各地からやってきた数百人の子供たちが入園した。ここには遊戯室、寝室はもちろん、音楽室、体育館、プールも完備している。

「リャビンカ」はエブパトリアでも最良の児童サナトリウムの一つ。医師、看護婦、マッサージ師が常時子供たちの健康に目を光らせている。このサナトリウム幼稚園の園費（一人分）として親が負担するのは月20ルーブルで、残りは国が負担する。写真はサナトリウムの本館前の遊戯施設。

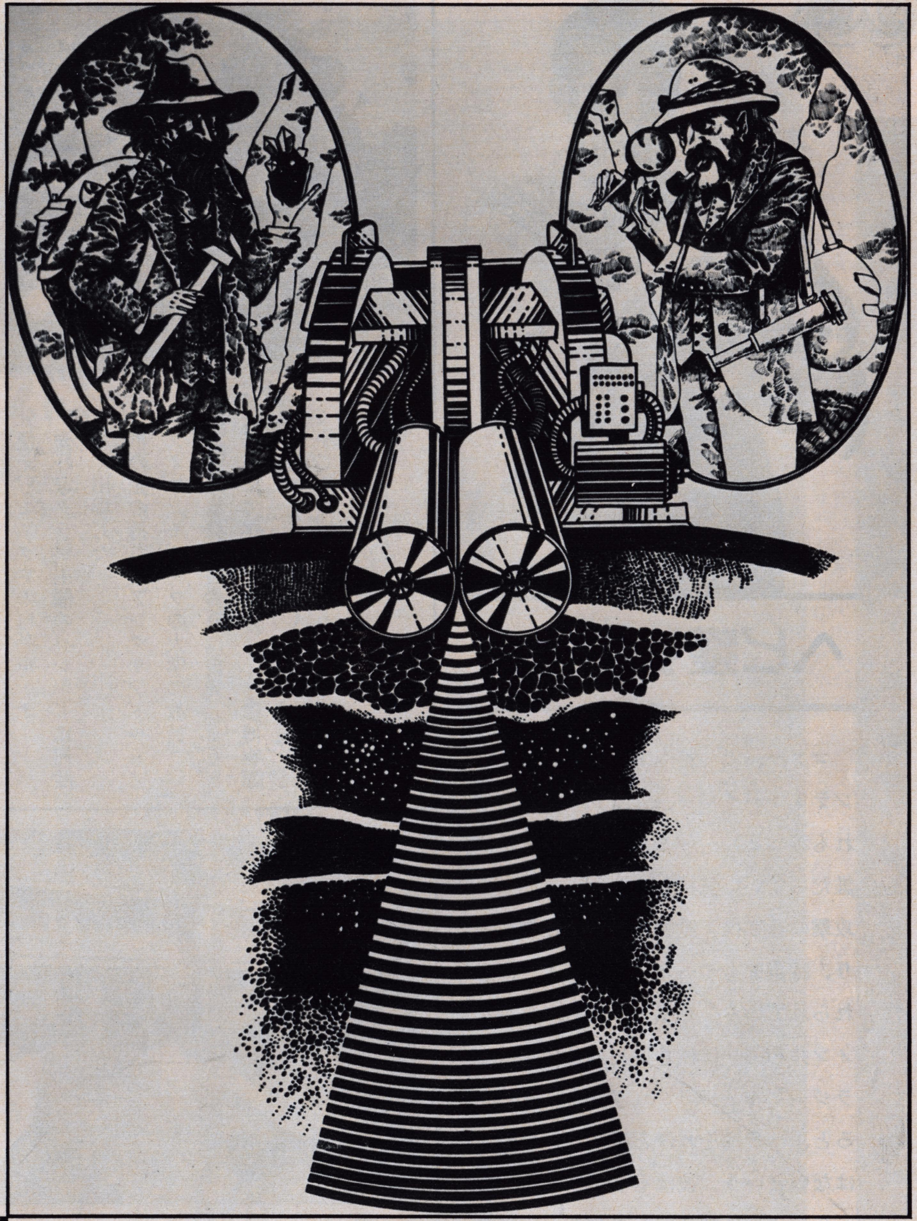


ヘビ獲りの名人

コブラ、カーペットバイパー、レバンティンバイパー、クサリヘビ（いずれも毒ヘビ）……こんな名前をきけば、誰だっていい気持ちはしない。ヘビの攻撃の速さは、動物の中でも抜群であり、猛毒をもつヘビは昔から人々に恐れられている。カラ・カラ村（トルクメン共和国）に住むヘビ獲り名人のウラジーミル・ババシ（写真）に言わせると、ヘビはそれほど恐ろしいものではないという。彼はもう何年も前からヘビと"意気投合"しており、ヘビの習性をよく知っていれば、噛まれずに捕らえることができ、じきに"仲良し"になれるという。この"友情"のメリットは大きく、ヘビの毒から作られる薬は実にさまざまな病気の治療に使われている。杯に巻きつくヘビの絵は昔から医学のシンボルになってきたが、現代医学のシンボルとしても残るだろう。

地球内部を透視するプラズマ

ソ連科学アカデミー副総裁　エブゲニー・ベリホフ



前号ではMHD（電磁流体力学）発電機をとりあげ、その実用化が将来エネルギー問題の解決にどのように役立つかを紹介した。それとは別にソ連の科学者たちはMHD発電機の別の利用法――地質学や地球物理学のための利用法を発見した。今回はこの利用法を考えついたエブゲニー・ベリホフ・ソ連科学アカデミー副総裁（写真）の話を紹介する。



奇妙に思われるかもしれないが、今われわれは、われわれの足下で起こっている諸過程よりも、地球周辺の宇宙空間について、よほど詳しく知っている。しかも活発な宇宙開発の時代は開幕してから30年足らずであるのに対して、人間がはじめて地下に潜ってから何千年もたつというのに、である。

地球内部を探る伝統的な方法はボーリングだが、ボーリングする深さが深くなればなるほど、コストは急上昇をたどる。もう一つの方法は各種地震計による調査で、最近とみに盛んに行われるようになった。ところが残念なことにこの方法にも欠点がある。爆発や振動の結果、弾性振動が発生する。それが地殻を伝播し、われわれに地球の奥深くの肖像を〝描いて〟見せてくれるのだが、もともと機械的なこのような振動は、鉱層の機械的組成についての情報しかもたらさず、どのような物質がこれらの鉱層を作っているのかは語ってくれない。

電磁流体による調査だとこういう欠点はない。ここ数十年、MHD調査法による鉱層およびエネルギー担体の探査は一定の成果をおさめている。だがこの方法の弱点は最近まで発電機の出力不足にあった。低出力の発電機が出す信号は、地殻に侵入すればするほど電磁場が弱まるので、深い所まで到達できなかった。

一九七〇年代の初期、モスクワのクルチャートフ記念原子力研究所で電磁流体発電機の開発が進められていた。その原理は、燃焼させた気体の流体―プラズマを磁場に通せば流体中に電流が形成される（正確には電流が発生する）というもの。この時私の頭には地球の内部構造を研究するのにMHD発電機が効果を発揮するかもしれないという考えが浮かんだ。だがそのためには発電に使われる連続作動の発電機ではなく、短いが強力なパルスを発生する発電機でなくてはならない。

ソ連で開発された世界初のパルス型MHD発電機というのはどんなものだろう？ その心臓は火薬ロケットである。エンジンの炎は特別な構造のノズルからとび出すと灼熱のガス流を作る。この流体は両側に電極がセットされている特別なパイプに入る。両電極はそれぞれケーブルにつながり、ケーブルはそれ用にボーリングされた穴に下ろされる。1対のケーブルは電力放出器の役割を演じており、放出器の電流が大きければ大きいほど地中の深い部分から情報を得られる。MHD発電機の電流は数万アンペアに達する。

MHDロケット発電機の出力は五万kW以上の強大なものもあり得る。しかもエネルギー消費の点で実に経済的で、出力二・五万kWの発電機が10秒間に提供できる情報量は、標準的な地球物理学機器が連続60昼夜作動して得られる量に匹敵する。

MHD発電機は現在すでに有用鉱物の鉱床の発見と評価に役立っている。カスピ海沿岸の低地での油田調査に専門家は〝パミール2〟装置を使用した。ウラル山地では、地下1・5㎞の深さまで広がる磁鉄鉱の工業開発の将来性を確定するのに、MHD装置〝ウラル〟が一役買った。

〝ウラル〟は地殻を40㎞の深さまで透視する。対になった装置〝ウラル〟はコラ半島の70㎞の深さまでの地中構造の特徴を解明した。コラ半島での実験にはバレンツ海が〝ケーブル〟として利用された。塩水は最高の導体だし、それに何よりも重要なことにただである。海に下ろされた電極は相互に10㎞離して設置された。これはアルミニウム七〇〇〇tを使ってループ線を作るのと同じ効果だ。このようなユニークな放電体はコラ半島全域にわたって確実な測定が行える信号を発射できた。電場は電離層で起こる諸過程にまで影響するほど強力だった。そのために電離層を研究するための諸実験もコラ半島で実施することが出来た。

MHD発電機が地球物理学研究のための強力な武器になることは間違いない。MHD発電機の利用の範囲と規模は急速に広がるだろう。

（イラスト　V・ボチコフ）

短信アラカルト

人工土壌

この黄金色の砂は普通の地面の砂と全く違い、プラスチック製の砂である。そのベースは2種類のイオン交換樹脂であり、普通の化学肥料から抽出された、植物の成長に必要な15の栄養素が添加されている。

生物学者にはこういう人工土壌がとくに必要である。所定の性質の新種を作り出すためには、プログラム管理のいわゆる〝歴史のない土壌〟が必要なのだ。こうした性質を持つのが人工土壌で、これを使えば育種作業期間は1/4—1/5に減る。

人工土壌は永久に使える。10—12回この土壌で収穫しても、ちゃんと再生（回復）し、万事が振り出しに戻る。肥料は全く不要（肥料はすでに土壌に含まれている）で、必要なのは散水用の水だけ。結局こうした土壌を使った〝菜園〟の世話といえば収穫が主体になる。

人工土壌の〝菜園〟は1平方m当たり、たとえばラディッシュ10kgを21日間で収穫できる。

このような〝菜園〟（8平方m）はすでに砕氷船のクラシン号につくられた。砕氷船レオニード・ブレジネフ号でも20平方mの〝菜園〟が目下つくられており、完成すれば1カ月間に二〇〇kgの生野菜を生産できるという。

ロシア最古の寺院の修復

ノブゴロド（ソ連欧州部の北）のソフィア寺院（九〇〇年余り前のロシア最古の石造の建物）はこのほど2年間の修復工事を終わり、再びその美しい、威容のある姿を現した。屋根は新しくなり、中央円天井の被せ金が取り替えられ、建物の内部と正面に古代および後期の絵画が取り付けられた。

地下の病院

ザカフカズのナヒチェバン自治共和国の深さ一七八mの岩塩鉱の廃坑中に設けられた物理療法病院では、開院以来5年間に八〇〇〇人以上のぜん息患者が治っている。病室の壁はまじりけのない塩でできていて、これがぜん息に効く。ここには清浄な自然の空気があり、空気の酸素飽和度は20%である。坑内には事実上有害な微生物はない。この病院のベッド数は一〇〇、治療費はソ連のどこの病院でもそうだが、無料である。

ソ連諸民族工芸博物館

近くモスクワにソ連諸民族工芸博物館が開設され、ソ連最大級の美術館になる。この博物館のためにツァリーツィノの屋敷跡公園が提供された。広さ80haのこの美しい古風な公園には、二つの宮殿を含む20の石造の建物がある。

新博物館はソ連のすべての民族の物質文化、工芸の発展の歴史を極めて完全かつ多彩に反映するものになると、館長で有名な画家のイリヤ・グラズノフは語った。

各共和国の芸術研究家たちは、自民族の出品物を博物館に持ち込んでいる。ロシア連邦共和国のコレクションは以前から集められている。現在の博物館の所蔵点数は一万点以上。

出品物の多くは、それにふさわしい、いずれも特徴的な環境の中で、たとえば農家や工匠の仕事場に展示される。参観者たちは各ホールを見て回って、何世紀もの間に美的趣味と美的観念、生活様式と習慣がどのように変わったかを知ることができよう。

新しい博物館では現在のソ連に二〇〇以上ある民芸品産地の名人たちの作品や、衣服、家具、生活用品、玩具、装飾品なども紹介される。

煙をリング状にして出すと……

煙突の煙を普通に出すのではなく、リング（輪）状にして出したらどうだろうか？サラトフ（ソ連欧州部の中央）の工業大学の学者たちは、煙をリング状に煙突から出すと、煙がはるか上空高く立ち昇り、同時に有害物質も持ち去ることを明らかにした。

〝リング状の煙〟は非常に高い所で四散するので、工場地区の大気汚染度は著しく減る。煙のリングが長い間その形を保つように、煙突に取り付けられた特殊な装置が煙を磁気処理する。



〝イルカ君たちのところへ急がなくっちゃ！〟
（A・クンチュス撮影）

科学技術進歩を定着させる道

——来日したA・P・カピッツァ教授に聞く



7月末、日本対外文化協会の招きで、ソ連科学アカデミー代表団が来日した。代表団のメンバーは、ソ連科学アカデミー学術担当事務次長、アカデミー準会員のA・P・カピッツァ教授（団長）と宇宙飛行士のA・P・アレクサンドロフ。一行はソ連も出品している〝大ハレー彗星展〟（51ページ参照）のオープニングに参加した。

M・エフィーモフ本誌記者がカピッツァ教授（写真）にインタビューした。

——現在ソ連では科学技術進歩を定着させる方法についての問題が広く審議されていて、ソ連共産党中央委員会の6月会議でM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長が行った報告は広い反響を呼んだ。問題の本質は何なのか、説明していただきたい。

新技術、最新テクノロジーが広く一般に定着しなければ、経済進歩、生産の高度の発展が保障されないのは極めて明確だ。ソ連の工業および国民経済全体は近年、最も現代的水準に達した。製品の生産量でわが国は世界でも主要な地位を占めている。しかしこれはソ連経済が、前進の過程で多くの問題や困難にぶつかっていない、ということではない。例えば、問題の一つは、慢性の労働力不足である。

長年われわれは産業の拡大によって生産性向上を達成して来た。新しい工場を建て、農村地区から新たな労働要員を集めた。今やこの道はわれわれにとって適当ではなくなった。まず何よりも労働力を補充するストックがもうない。これは周期的な〝戦争のこだま〟のために、つまり第2次世界大戦で死んだ若い人たちが生きていれば、当然生まれていたであろう孫や曽孫がいないために、新しく勤労生活に入る人口の縮小が迫って来たためである。そのために科学技術の成果を大幅に取り入れることによって労働生産性を高めることが課題になっている。

ソ連は科学技術のさまざまな分野でも多くの成果を得た。例えば、新しい被覆材料・新材料のテクノロジーの開発がある。わが国の工業では、回転軸に特殊な吹き付けをして耐久性を高めることに成功しているし、技術工程にごくわずかの経費をつぎ込むことによって高い経済性が保障されている。

このような例はいくらでもあるが、今やもっと多くのことが求められている。

——科学の成果を定着させる問題があるということか？

そう、この問題がある。われわれはそれを解決しなければならない。

われわれは科学技術情報の大きな予備を持っている。ソ連の科学は外国から情報を買わなくても安定した経済進歩を請けあえる状態にある。われわれは、産業の分野でのこの情報の経済的〝消費〟を調整したいと思っている。

われわれは、情報の作り手、情報を導入する人、そして結局は出来た製品を利用する人、つまり消費者にとってもメリットのあるしっかりしたメカニズムを創造しなければならない。各企業に新製品生産およびより完全なテクノロジーをものにするための予備の生産施設を創設することが、有効な手段の一つになり得ると思う。

——企業にとっての主要な課題は？

私はそれは、生産過程の簡素化、労働力の量的削減、製品の質の向上の3点にまとめられると思う。これらすべての方向は同時に解決され得るし、同時に解決されねばならない。

科学研究所は生産とより密接に結びつき、それだけでなく生産活動にもっと大きな影響を与えるようになろう。これは本質的には、われわれがかつて創設しようとした科学・生産合同体への新しいアプローチということだ。

——あなたはソ連科学アカデミー極東学術センターの指導者をしておられた。科学に地域的区分は必要か？

特に極東科学といったものはない。シベリア科学とか純粋の欧州科学がないように。個々の地域に発生し、その地域の学術センターが研究に携わるような問題はある。極東の問題を研究するため、モスクワからわざわざ極東まで学術調査に行く必要はないと私は思う。そこに住んでその場所で研究する必要がある。地域の問題は主に生物資源および鉱物資源とその加工の研究に集中している。極東学術センターとそれを構成している諸研究所も極東の産業の発展に実際的貢献をした。

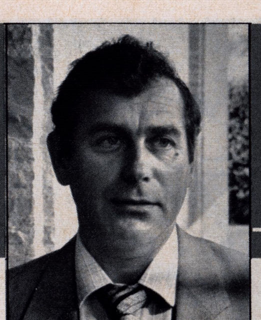
——極東学術センターと日本の研究機関との交流はあるのか？

あることはあるが、残念ながら不十分だ。もちろんわれわれは日本の科学者と交流し、あれこれの資料の交換も行っている。だが主にわれわれは違う問題を研究している。日本は基本的に気候が大変温暖な亜熱帯の国だ。われわれの極東は、〝緯度はクリミアだが経度はコリマだ〟と言われる。こういうわけで日本とは気候条件が極端に違う。しかし、資源分野における極東学術センターの多くの研究は、大いに興味をひく研究だと思う。例えば、われわれは薬用人参のすばらしい代用品——エレウテロコックを発見した。現在エレウテロコックは飛行中に宇宙飛行士によって広く使われ、外国でも有名になった。

簡単に言えば、協力問題はまだこれから解決されなければならない。

宇宙での仕事と生活

——日本を訪れたアレクサンドロフ宇宙飛行士にインタビュー



A・P・アレクサンドロフはソ連宇宙飛行士、パイロット、ソ連邦英雄、42歳。専門は技師で、宇宙機器を開発する設計ビューローで働いている。一九八三年6月28日から11月23日までV・リャホフと共に軌道ステーション〝サリュート7号〟で宇宙に滞在、この間2回、合計5時間44分15秒ステーションから出て宇宙遊泳をした。来日した（前ページ参照）アレクサンドロフ飛行士に本誌記者がインタビューした。

——宇宙飛行士になるにはどうすればいいのか？　生まれつき〝スーパーマン〟でなければだめなのだろうか、それとも、人間ならだれでも宇宙飛行ができると期待していいのだろうか？

問題は二つに分けられる。一つは、宇宙飛行士は職業だということだ。ロケット旅行時代の単なる乗客ではない。ということは、どの職業の場合でもそうだが、特別の訓練、知識、経験が必要だ。宇宙飛行士の職業を身につけるためには、頑健な体と専門に応じた教育が必要である。最終的には、宇宙を飛んでから、やっと宇宙飛行士になれるのだ。地上でどんなに長期に訓練しても、実際の宇宙飛行に取って代えることはできない。宇宙から戻ってはじめて、課題は達成できたのか、飛行は成功したのか、が分かる。というわけで、もう一度くり返せば、われわれにとって宇宙飛行は、何よりもまず緊張した仕事であり、科学実験であり、新しいものの探求である。つまり、宇宙飛行士は地上での訓練のプロセスで形成され、宇宙飛行のあとはじめて一人前になると言える。

——だが、宇宙技術は改善されているから、宇宙飛行の可能性も広がっていると思うが……

もちろんだ。現在、宇宙飛行の水準はプロのパイロットだけでなく、さまざまな職種の専門家も宇宙に行くことができるまでになった。以前には、宇宙飛行士は万能でなければならず、テクノロジー、バイオテクノロジー、生物学、医学、撮影技術（映画、写真、テレビ）、天体物理学その他、さまざまな専門を身につけなければならなかった。その上、当然のことながら、乗っている宇宙船の技術に精通し、地球を観察するための地理学にも精通している必要がある。いまでは、宇宙船には船長のほかに各種専門家が乗り組むのが普通だ。

概して、人間を宇宙へ運ぶには多大の費用がかかる。だからわれわれは、お客さんを乗せるのはぜい沢すぎると考えている。米国人は別の考え方をする。われわれは1回1回の宇宙飛行を効率の高いものにしようとしている。

——軌道上での生活を話してほしい。

経験が示しているところによれば、普通の地上での生活のように、規則正しい、乗員にとって快適なリズムで生活する必要がある。個人的な経験を話そう。私は軌道上ではモスクワ時間の8時に起き、23時に就寝した。起きると（〝泳がない〟ように宇宙船の壁にひっかけた特殊な袋の中で裸で眠る）簡単に計器類の点検、トイレ、歯みがき。シャワー代わりに、日本の〝おしぼり〟のような蒸しタオルを使う。電気かみそりでひげをあたる。朝食は缶詰めの肉100g、チューブ入りのカテージチーズと黒スグリのシロップ100—150g、紅茶とビスケットまたはキャンディー。ときにはパンとチーズをトーストして食べる。

それから前日計画しておいた仕事にかかる。昼食はだいたいオードブル（缶詰めのトマトソース煮のチョウザメ肉）、ジャガイモスープまたは野菜スープ、ブタ肉100gまたはピラフその他。デザートはジュース。たまに地球から貨物が届いたときには、新鮮な野菜や果物を味わう。エレウテロコックのエキスを定期的に飲んだ。これは強壮作用がある。

昼食のあとは規則で短い休憩をとることになっていたが、われわれは原則として休憩しなかった。しかし、2時間ごとに体操をした。

夕食の内容は朝食に似ているが、ビスケットと蜂蜜をもっと多く食べた。寝る前には持参したビデオを見、本を読み、日記を付けた。

こうして軌道で5カ月過ごした。

——21世紀の宇宙飛行はどういうものになると思うか？

まず第一にそれは平和的なものでなければならない。宇宙は兵器から解放されていなければならないし、人々に脅威をもたらすものであってはならない。宇宙は地球に奉仕しなければならない。これが主要な条件だ。科学としての宇宙飛行は基礎研究（宇宙、惑星、星雲の研究）に従事し、同時に国民経済で利用するための実用研究（金属、合金、非金属材料のテクノロジー、生物学実験、エネルギー伝送技術の開発、気象観測など）に取り組むだろう。宇宙で直接組み立てられる大型軌道ステーションの開発と自動ステーションの飛行という二つの基本方向は変わらないと確信する。これはもちろん、反復使用できるシステムや構造を利用する可能性を排除するものではない。

科学博で好評だった ウラルの歌舞団



科学万博ソ連館の「ウラルのホロボード」歌舞団の舞台から



ゲルマン・サマリン団長

7月5日から20日までソ連のアマチュア歌舞団「ウラルのホロボード(輪舞)」(ペルミ市)がつくば科学万博で公演して好評だった。団長のゲルマン・サマリン(53歳)にインタビューした(聞き手 V・デウーリン本誌記者)。

——この歌舞団はアマチュアだということですが?

私たちの歌舞団は日本の友人たちも正しく指摘したように、舞台の水準ではプロ並みですが、団員は一〇〇%アマチュアです。つまり、アンサンブルでの活動が趣味、道楽だという人ばかりです。団員たちは専門の芸術教育を受けていませんが、大多数(80%)が高等教育の修了者、ほかの人たちも中等教育を修了しています。団員たちの本職は医師、自動車の運転手、学生、普通教育学校、職業技術学校、中等専門学校の教員、仕上げ工、文化施設の職員、幼稚園の保母、労働者、その他です。しかし、全員がロシア民族芸能への情熱的な愛情で結ばれています。もちろん、この愛情のほかに、団員たちは多彩な能力や才能を持っていて、それがソ連国内や外国でますます新しいファンを獲得する原因になっています。

——この歌舞団が出来たいきさつを。

この7月で結成25周年になります。最初はペルミ州人民芸術会館付属の民族舞踊集団として生まれましたが、団員たちの技術が年々向上し、全体としての芸術的水準も高くなり、次第に地元のペルミ州で有名になりました。そしてモスクワでの公演にも呼ばれるようになり、一九七九年には最初の外国公演(チェコスロバキア)にも行きました。日本は初めてです。もちろん、長い間にレパートリーも変わりましたし、内容も充実しました。科学万博で披露したのは団員全員の長い精進の成果です。

——歌舞団の構成と普段の活動は?

全部で60人いますが、日本へ来たのは30人です。歌舞団はダンス・グループと輪舞グループに一応分かれていますが、団員はみな歌えて、踊れて、何か一つ、できたら数種類の楽器が演奏できなければなりません。

新人は州や地区のアマチュア芸能コンクールでスカウトします。入団希望者は多いのですが、みながみな選抜基準に合格するわけではないですから。入団した新人は約1年間様子を見て、教育し、その人の芸術的才能が最大限発揮されるような役割を見つけるようにします。そのあとは一人前の団員として活躍することになるわけですが、この活動期間は平均5—7年です。しかし、10年以上も団員をしているベテランもいます。週に4回、仕事が終わってから練習があります。

練習は余暇を使ってやりますが、公演は休日か祝日にやっています。

今回のような長い公演旅行は年次休暇の時にしかできません。ですから、普段の公演はペルミ州内が中心で、年に1—2回国内や外国の公演旅行へ出かけます。

——日本の観客の反応は?

日本のお客さんはヨーロッパとソ連の観客にまったく似ていません。ユーモアや芸に対する態度、生活に対する感覚そのものに違いがあるようです。でも、そういう違いはあっても、日本のお客さんたちは温かく私たちの舞台を受け入れてくれました。会場はいつも超満員でした。多民族からなるソ連国民の代表である私たちに対する心からの関心と、私たちを理解しようとする意欲を感じました。

——札幌——

エルミタージュ美術館展に協賛して二つの催し



北海道日ソ友好文化会館で行われたソビエトの民族衣装を着たモデルの撮影会



ソビエト文化財復旧写真展のテープカット。左から阿部・北海道新聞事業局長、柴野・友好文化会館理事長、アニキエフ技師、プロホロフ札幌駐在ソ連副領事。

札幌の北海道立近代美術館で開かれた「エルミタージュ美術館展」(北海道新聞社など主催)に協賛して、二つの催しが北海道日ソ友好文化会館で相次いで開かれた。

第一の催しは、7月7日に行われた「ソビエトの民族衣装を着たモデルの撮影会」。

北海道新聞社、北海道写真協会札幌支部、同文化会館の共催で、女性も交じえ、熱心なアマチュア・カメラマン約二五〇人が参加した。

民族衣装は同文化会館所蔵で、ソ連内のアルメニア、アゼルバイジャン、ウズベクの各共和国およびアルタイ地方など代表的な9点。ロシア正教会風の青銅色のドームを持ったエキゾチックなたたずまいの同文化会館は、カメラマンにとっては格好の被写体。三人のモデルがポーズをとると華やかさが一段と増す。カメラマンたちは、それぞれモデルに注文をつけながら、会心の一枚を、とシャッター・チャンスを狙っていた。

撮影会の作品によるフォト・コンテストも行われ、入賞者にエルミタージュ美術館展記念賞などが贈られた。

第二の催しは、「ソビエト文化財復旧写真展」(7月20日—8月22日)。

この写真展は同文化会館と北海道新聞社の共催で、ソ連文化省の後援。「戦禍からの再生」と題して、第2次世界大戦で破壊された帝政時代の宮殿や寺院などが戦後、同文化省の手で復旧された様子が、破壊された当時と復旧後の姿を対比するパネル写真で展示されており、パネルは合計約一五〇点。ナチス・ドイツの手でほとんど完全に破壊された宮殿などを、残された資料や証言を基に長年かけて復元した様子や、文化財に注いだソ連国民の深い愛着が伝わってくる内容だ。

7月20日午前、柴野・同文化会館理事長や北海道新聞社の阿部香作事業局長、今なお復旧作業にあたっているソ連文化省記念物保護局のアニキエフ指導技師ら約一〇〇人が出席して開会式を行った。

科学博ソ連館へ四〇〇万人目の入場者

科学万博——つくば'85のソ連館に7月24日四〇〇万人目の入場者が訪れた。松本市にある松本深志高校2年生の北条久君(17歳)で、ソ連館事務局のスタッフの出迎えを受け、特別ガイドの説明つきで館内を見物してから記念品を贈られた。北条君はソ連館の感想を次のように語った——「初めてソ連の人にも会えたし、ソ連館にきて、本当によかった。おかげで、ソ連の経済や科学や文化の発達ぶりがよく分かった。一番印象深かったのは、宇宙開発やシベリア開発のコーナーでした」



ココレフ・ソ連館館長から花束とプレゼントを贈られる北条君

ノーボスチ通信 特派員報告

爆弾テロでは駄目

I・クズネツォフ記者（クウェート）

7月11日、いつもの通り日が沈むと、数千のクウェート市民が海岸に夕涼みにきた。大人はコーヒーを飲みながらニュースを話題にし、子供たちは浜辺で遊んでいた。9時10分前、海岸通りの二軒のカフェーで爆発音が轟き、8人が死に（そのうちの5人は子供）、89人が負傷した。無意味な犯罪にクウェート全土がショックを受けた。

犯人は、以前クウェート首長の暗殺を企て、その他数々のテロ行為をおこなったイスラム・ジハード（イスラム聖戦機構）のメンバーだというのが当地の定説で、こんどのテロは首長暗殺未遂などで逮捕された犯人たちの釈放を要求する犯行であった。

事件当日の深夜、政府は緊急閣議を召集し、おどしには屈服しないとの声明を発表するとともに、航空定期便の出国取り消し、官公庁や外国公館の警備増強、公園設備、遊戯施設の一時閉鎖などの非常措置をとることになった。

ここで注目される点は、クウェート市の爆破事件がペルシャ湾岸アラブ諸国の外相会議が終わった直後に起こったことである。外相会議は湾岸諸国の安全保障問題を審議し、湾岸諸国の平和と安定は自らの力で守り、外部からの干渉を許さないことを確認したが、こんどの爆破事件はこれとの関連で、イラン・イラク戦争にたいするクウェートの態度に影響を及ぼすこと、クウェートの安全を掘り崩し、ひいては、ペルシャ湾岸地域に直接干渉してこの地域での軍事的プレゼンスを増強するための口実を探している勢力を助けることがねらいだった。

クウェート各紙も〝ダイナマイトのテロ〟は問題の解決法にはならないと強調している。紛争問題は戦争やテロではなく、話し合いによる政治的な手段によって解決されるだろう。

イタリアの新しい貧民

A・ザボロツキー記者（ローマ）

灯が消えた大きな建物のそばに長い行列が立っている。入口のドアに「残飯の持ち出し厳禁」という掲示があるのに、何人かが数片のパンをポケットに入れて堂々と持ち出している。職員も見て見ないふりをしている。これはエチオピアやパレスチナの難民の食糧配給風景ではなくて、驚くなかれ花のローマの、貧民の無料宿泊所の食堂の実況なのだ。

永遠の都、欧州文明発祥の地ローマと、文字どおり乞食のような数千人の貧民……これをどう結びつけたらいいのか？　イタリアには空き家が二〇〇万戸もあるのに、この人々は家賃も払えず、廃屋で雨露をしのぐより外ないのだ。矛盾した話どころか、これではもう犯罪である。イタリア共産党機関紙のウニタも「空き家と宿無しの人々、これがイタリアという国のドラマだ」と皮肉っている。

不幸な人々の多くはうつ病の状態にあり、最後には気が狂ってしまうのが普通だ。〝確かな落ちつき先〟つまり精神病院に入った者は世間が目をかけてくれるからそれだけ〝幸せ〟と思われるのである。

失業、インフレ、住宅問題はつながり合って現代イタリアの深刻な病根をなしている。イタリア社会の進歩的階層を悩ましている「新しい世代の貧民はどこから出てくるか」という問いかけへの答えはそこに求めなければなるまい。

ニカラグア革命は歩み続ける

O・ボンダレンコ記者　I・ペトウシコフ記者（マナグア）

米国の〝宣戦布告なき戦争〟と経済封鎖、さらに直接的侵略の現実の危険のなかで、ニカラグア国民はサンディニスタ革命6周年の記念日を迎える準備をすすめている。「ニカラグアは裏切りも降伏もしない」というスローガンが国中いたるところで目につく。勤労者の集会や会合で、革命が達成したものをなにがなんでも守り抜こうとの声明が満場一致で採択されている。

「もちろんヤンキーはこの国に潜りこんでこれるさ、でも生きちゃ出られないね」、首都マナグアのある労働者がテレビのインタビューに答えたこの言葉は、いまやすっかり流行語になってしまった。

バリカーダ紙によると、今年はニカラグア革命の成果を確固たるものにし、中米全体の平和を維持する上で重要な年になるという。毎週新聞に発表されるニカラグア国防省の報告には敵の兵員、兵器の大きな損害が示されている。ルイス・カリオン内務次官の演説によると、北部国境を隠密裏に突破した敵は革命6周年記念行事を失敗させるつもりだったが、ニカラグア側はこの計画を事前に摘発し、敵はニカラグア部隊と直接衝突してぶざまに敗退した。

これに関連して、ダニエル・オルテガ大統領は「国民に語る」というテレビ番組のなかで、サンディニスタ人民軍は米国CIAの雇い兵の主力をニカラグア領内から撃退し、ホンジュラスとコスタリカ領へ逃走させた。ニカラグアの国境地帯にまだ残っているのは各所に分散した小規模の匪賊にすぎないと述べている。

ニカラグアの勤労者は幾世紀来の後進性と経済困難に打ち勝ち、帝国主義的侵略に雄々しく立ち向かいながら、革命の前途を明るい目で眺めている。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年7月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、第12回世界青年学生祭へのソ連のコムソモール員、一般青年男女の参加に関する全ソ・レーニン共産青年同盟（コムソモール）中央委員会の報告を聴取した。世界の多くの国の代表が青年学生祭への参加準備のため活発な活動を行ったことが指摘された。青年学生祭は重要な国際行事となり、世界の青年の連帯を強め、核戦争の脅威に反対し、諸国民の平和と安全を守る闘争での青年の連帯行動を活発化するのに役立つとの信念が表明された。

政治局は自然保護に関する法的秩序の強化と法律の順守の若干の問題を審議した。

またわが国と社会主義諸国、その他の友好諸国との関係の一貫した発展と強化の一連の問題も審議された。

（ソビエツカヤ・ロシア紙7月26日号）

党中央委員会での会議

7月26日、ソ連共産党中央委員会で各連邦構成共和国共産党中央委員会、党地方・州委員会の第二書記と組織・党活動部長の会議が開かれた。会議では党組織における報告と選挙の準備に関する党委員会の課題が検討された。

会議ではE・K・リガチョフ・ソ連共産党中央委政治局員・同書記が報告した。

報告・選挙集会、協議会、大会への最良の準備は、国家計画の達成であり、各労働集団にはりつめて働く雰囲気をつくることであり、新しい目標を引き受ける決意をもつことである。労働協約上の規律の順守や固定フォンドの操業開始と建設、輸送、とくに鉄道輸送業務や、燃料、原料、資材の節約に、倦むことなく注意を払わなければならない。

報告・選挙キャンペーンは党内民主主義の深化、党生活のレーニン的規範の順守、批判と自己批判を最大限に促進しなければならない。党組織は、もし一般党員、下級党活動家に演壇を広く開放するなら、党員大衆やすべての勤労者の意見をもっとよく引き出すことができよう。

現在の報告・選挙キャンペーンの特徴は、同時に、これらと緊密に結合して、ソ連共産党綱領の新稿草案、ソ連共産党の規約の修正案、国の経済・社会発展の基本方向案の審議が行われていることにある。これらの文書の内容と政治的意義をすべての人に知らせ、これらの文書を共産主義世界観の確立、広範な大衆の社会的積極性の高揚に利用するために、こんご大いに活動しなければならない。

（プラウダ紙7月27日号）



「会議が一つもないのに、成果がちゃんと上がっているなんて！」（I・チェルモデーエフ作、トルード紙7月16日号）

ソ連閣僚会議の会議

7月24日、ソ連閣僚会議の会議が開かれ、一九八五年上半期のソ連経済・社会発展国家計画とソ連国家予算の遂行実績が審議された。N・K・バイバコフ・ソ連閣僚会議副議長・国家計画委員会（ゴスプラン）議長とV・V・デメンツェフ・ソ連第一財務次官がこれらの問題に関する報告を行った。

上半期の工業製品販売計画は達成された。工業生産の伸びは昨年同期比3・1%だったが、そのうち第2四半期は4・2%だった。経済実験参加諸省の生産指数はさらに高かった。

新しい技術と進歩的な工程の導入の規模は増大している。

コルホーズとソフホーズは大体において家畜の越冬が成功裏に完了し、春の畑仕事が遂行され、集約的技術によって耕作された穀類とその他の農作物の作付け面積は拡大され、飼料の大がかりな調達が展開された。国の南部地区では収穫物の取り入れが始まった。家畜、家禽、牛乳と卵の買い付け量が増えた。

ソ連国民の物質的、文化的生活水準の向上が続いた。国家基本投資によって総面積二八〇〇万平方mの住宅が完成し、多数の普通教育学校、職業技術学校、病院、就学前児童施設、その他の社会・文化施設、生活サービス施設が建設された。

その反面閣議では、工業は安定した伸びをかちとることができず、国民経済のすべての部門も一九八五年の計画課題の無条件達成を保障するようなテンポに達しておらず、そのうちの一部の部門は7月中もいぜん満足すべき成績をあげていないことが指摘された。多くの省は現有余力を十分に利用せず、生産効率の向上にしかるべき注意を払わず、経済の集約化への移行を遅らせている。

閣議ではN・A・チーホノフ・ソ連共産党中央委政治局員・ソ連閣僚会議議長が発言した。

（ソビエツカヤ・ロシア紙7月25日号）



自宅の蔵書を前にくつろぐイワン・ジュープ博士



キエフの物理学者は日本文学の名翻訳家

キエフ駐在本誌記者
ワレリー・ブダルギン
カメラ
S・フィリプチュク

「結晶内での核とガンマ量子との相互作用の共鳴」というテーマの学位論文と安部公房の『箱男』のウクライナ語訳——この二つともウクライナの物理学者、名翻訳家で、京都の姉妹都市キエフに住むイワン・ジュープの労作である。

〝物理学者も、翻訳家も、人々の間に橋を架ける〟

ユネスコの発表によるとソ連は世界一の読書王国で、ソ連諸民族の89の言語で図書、雑誌が発行されており、ウクライナ語の図書の年間発行部数だけでも一億部にのぼっている。そのウクライナで日本文学紹介にかなり大きな貢献をしてるのがイワン・ジュープ物理・数学博士（51歳）である。彼の住居のしきいを一歩またげば、すぐにここの家では物理学と言語学の二つが同じ程度に同居していることがわかる。物理学の方はずっと前からジュープ博士の愛する職業になっているが、言語学、つまり翻訳は魂のための仕事である。「物理学者たちも、翻訳家たちも、人々の間に橋を架けているのだ」とジュープ博士は強調する。

博士の家はウクライナ共和国首都キエフ南部の景色のよいフェオファニアにあり、博士が先任研究員をしているウクライナ共和国科学アカデミー理論物理学研究所のすぐ近くだ。

彼が博士になったのは一九七八年。現在までに50以上の論文を執筆し、いずれも研究方法の突っこみの鋭さと独創性が、世界各国の物理学者たちから認められ、賞賛された。最近キエフの「ナウコバ・ドゥムカ」出版所から出版された『量子物理学の前途』は日本語から訳したもので、見事な訳であった。

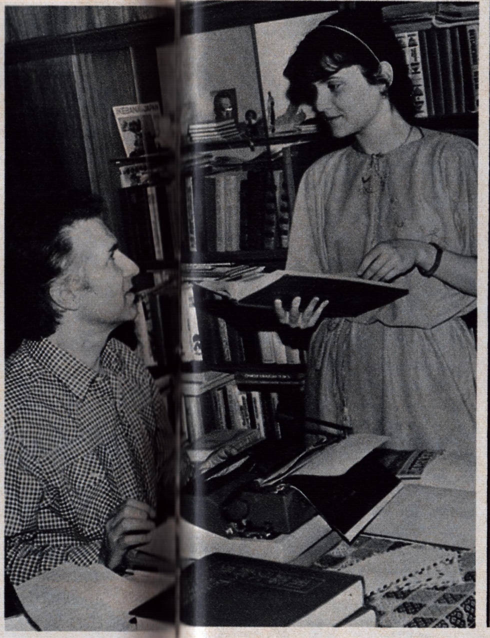
ジュープ博士の家には精密科学の分野の世界の学者の活動に関する数百冊の本をはじめ、沢山の辞書、言語・文学、文芸学、外国史（とくに日本史）関係の本がある。本と並んで、学会、シンポジウム、会議で会った多くの国の物理学者たちからもらったプレゼ



毎朝ウクライナ共和国科学アカデミー理論物理学研究所長アレクサンドル・ダブイドフ（中央）の部屋に主だった研究員が集まって新しい構想を話し合う。左から2人目がイワン・ジュープ。



ジュープ博士がウクライナ語に訳した日本の名作



日本語学習に精出す長女のオリガにアドバイスするイワン・ジュープ



ウクライナの出版社から出た翻訳書の装丁には日本的なカラーが強く出ている。

ントが飾ってある。

「日本の学者たちと会う機会は多く、話題は純学問的な問題やいま世界の人々が強い関心を持っている共同の平和闘争のことなど沢山ある。

学問はインターナショナルなものである。物理学者である私のつとめは、発見することだけではなく、地球が戦争の業火に包まれないよう学者の努力を結集することでもある。それに劣らず大事な私の使命は翻訳である。翻訳は単なる文化財の交換にとどまらず、各国の文学生活を充実したものにする重要な条件でもある。平和闘争という現代の主要任務にほおかぶりしていては、誠実な文学者になりえない。諸国民間に橋を架ける仕事のお役に立てて幸せだと思っている」

すべては″ツル″から始まった

ジュープ博士の蔵書の「日本コーナー」には、ソ連で出版された日本人の著者の本が数百冊並んでいた。その多くはジュープ自身がウクライナ語に訳したものである。まず安部公房の『箱男』、北杜夫の『楡家の人々』、夏目漱石の『吾輩は猫である』、それから早乙女勝元の『ゆびきり』、福永武彦の『死の島』、芥川龍之介の『羅生門とその他の短編』、おとぎ話『一寸法師』など…… これらの本はキエフの「ドニエプロ」、「モロジ」、「ベセルカ」出版所から五万部ないし五〇万部出たものである。

……イワン・ジュープの語学の才能は、中学生のころから現れた。そのころの彼は物理、数学、ドイツ語がとくに好きだった。リボフ国立大学の物理学部在学中英語を学び、その後フランス語、スペイン語、イタリア語をマスターした。ついでノルウェー語、スウェーデン語、ポルトガル語、ポーランド語、スロバキア語を経て、日本語、中国語、ヒンズー語、ウルドゥ語、ベンガル語を学び始めた。彼が何カ国語もマスターするのに使ったシステムについては、ここでは取り上げないが、驚くべき記憶力、ねばり強さ、働き好き、まれに見る分析者としての才能が、彼の語学学習の土台となったことは挙げておこう。日本語は彼の最も好きな言葉である。

20年ばかり前ジュープ博士は日本の民話『夕鶴』を翻訳してウクライナの児童雑誌「バルビノク」に載せた。これがきっかけで彼の日本語翻訳家としての履歴が始まった。

「私ははるかな国日本の言葉を学ぶのに、はじめは教科書だけでなく、日本文学名作集をも使った。それから少したって安部公房の作品に夢中になり、『砂の女』をロシア語訳と原文で平行して読んだ。一九六六年にキエフで出ている″文学ウクライナ″紙で、戦後まもなくウクライナの有名な作家ミハイル・コツュビンスキーの長編『ファタ・モルガナ』を訳した日本人栗栖

継さんのことを知り、″あなたがウクライナ文学に関心をもっていることを知ったので、私が日本文学に興味をもっていることをお伝えする。あなたと協力したい……″との手紙を出した。同時にウクライナの短編とウクライナ語の辞書を数冊送り、代わりに日本語の辞書と大江健三郎の短編を受け取った。私はこの短編を訳して、一九六七年に″フセスビト″誌に載せた」

ジュープ博士はよく日本から手紙を受け取る。差し出し人は北杜夫氏であったり、加賀乙彦氏であったり、一九八二年にキエフを訪れた日ソ著作権センターの金子健氏であったりする。金子氏はこう語った。

「日本の京都は昔日本の首都で、キエフがキエフ・ルーシの首都であったと同じである。日ソ両国民が接近すればするほど、不信のタネは減り、平和がくるわけだから、われわれはもっと互いに知り合う必要がある。このけだかい仕事で重要な役割をになうのが、学者であり、文学者である。

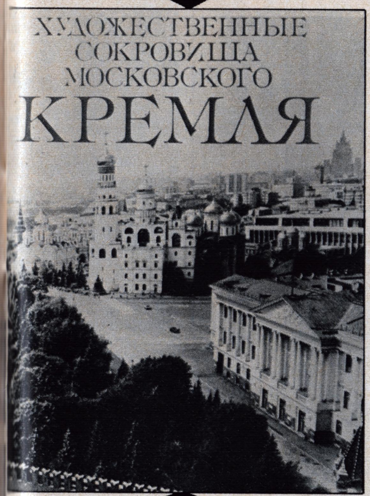
……私はイワン・ジュープさんに会う前に、先ごろキエフで出たジュープさん訳の『一寸法師』を買いに″図書の世界″書店に立ちよったが、数日前に売り切れて残念でしたと店員に同情顔で言われた」

「どれだけ翻訳しようと、またどれだけ出版しようと、所詮少なすぎる」――ジュープ博士は喜ぶと同時に、嘆いてみせた――「近く私の訳した日本の作家の新しい本がウクライナの書店の店頭に現れる。たとえば安部公房の『砂の女』、『他人の顔』、『燃えつきた地図』である。井上靖の長編『化石』や日本民話集も近刊の予定だ」

自著を同じ物理学者の藤井教授に紹介するイワン・ジュープ



文化トピックス



新刊写真集『クレムリンの美術品』

このほど写真集『モスクワ・クレムリンの美術品』（写真＝ウラジーミル・メンデレーエフ）が、モスクワのプラネタ出版所とユーゴスラビアのアウグスト・ツェサレツ出版所から共同出版された。クレムリンにある多くの博物館と大クレムリン宮殿の美術品の写真をこれほど完璧に一冊の本に集めたものはこれが初めて。読者はページをめくりながら昔のクレムリンの広場を歩き、古い建築物の壁を間近に見、各部屋がつながった大広間、かつてのツァーの執務室や寝室を見て回ることができるだろう。

写真に見る美術品の数々は、ついきのう作られたかと思うほど見事に保管されているが、これは昔の美をよみがえらせた修復技術者の功績だ。





キエフの美術祭

この春ウクラナイナ共和国の首都キエフで行われた美術祭にはたくさんのキエフ市民が参加した。市の歴史的な中心地アンドレーエフスキー坂は２日間にわたって、野外アトリエと化した。路上で陶芸家が水差しや茶碗をつくり、画家はポートレートを描き、木彫家は素朴なおもちゃやスプーン、その他の小物をつくってみせた。道でじゅうたんを織る女性も。同時にこうした美術品のバザーも催され、多くの美術家がその売上金を第12回世界青年学生祭の基金に寄付した。

写真上は自作の指人形を見せる美術家のガリーナ・ミトロヒナ、左は刷り上げたばかりの版画を見せる若い美術家。



舞台と映画の人気女優ナタリア・グンダレワ

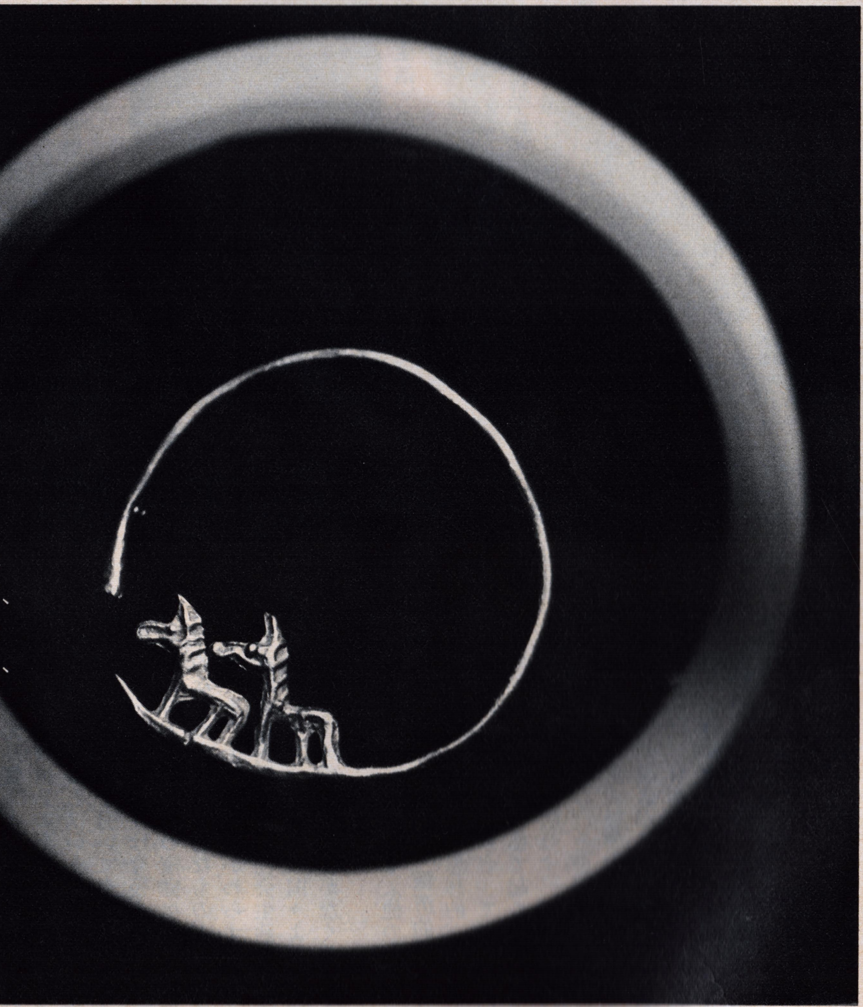
いま女優ナタリア・グンダレワ（38歳）の写真が雑誌の表紙や新聞の紙面を盛んに飾っている。カメラマンは彼女の容姿にロシアの名画に描かれた美女の面影を見いだしている。

グンダレワはモスクワ在住。初めて女優として成功したのは一九七七年で、映画『甘美な女性』で主役を演じたとき。映画雑誌「ソビエト・スクリーン」（月2回刊、発行部数二〇〇万部）主催の恒例の人気投票で、その年の最優秀女優賞に輝いた。

現在彼女は映画、テレビで大活躍中。主役を演じた映画『20年後のある日…』は、一九八一年のアベリノ国際映画祭（イタリア）で〝金の盆〟賞を獲得した。彼女の出演する芝居は（グンダレワはマヤコフスキー劇場所属）いつも大入り満員で、批評家、演出家、観客はこぞって彼女の才能を絶賛している。

カザフスタンの古代文化

カザフスタン（中央アジア）南部の墳墓から発見された青銅器時代（紀元前12―10世紀）の２頭の馬を形どった金の耳飾りは、古代カザフスタンに住んでいた種族の高い物質文化を改めて示した。この地方では旧石器時代の石製の道具から18世紀の仏教美術までの考古学上の記念物が発見されており、カザフ共和国科学アカデミー歴史・考古・民族学研究所の考古学者たちは洞窟、住居跡、墳墓、中世の都市の廃虚を発掘することによって、この地方の古代の種族の生業や芸術の発達、独特の生活様式を物語る貴重な資料を集めている。



大きく変わる日本の家庭生活

──イーゴリ・ラティシェフの新著



▲ソ連科学アカデミー東洋学研究所で開かれたI・ラティシェフの60歳の祝賀会でI・コワレンコ歴史学博士(左端)に新著を贈呈する著者。写真中央はゲオルギー・キム同研究所副所長

ある個人の祝賀会の場合、主賓は来会者からプレゼントを受けるのが通例だが、5月13日にソ連科学アカデミー東洋学研究所でイーゴリ・ラティシェフ日本部長の60歳の祝賀会が開かれたときは、逆に主賓の方から出席者にプレゼントがあって、慣習が少しばかり破られた。プレゼントされたのは、さきごろモスクワのナウカ出版所から刊行されたラティシェフ本人の新著『日本人の家庭生活』(発行部数五万部、二八八ページ、1ルーブル10コペイカ)である。

イーゴリ・ラティシェフ歴史学博士はソ連のすぐれた日本研究家で、現代日本の歴史と政治情勢に関する著書が多い。長年ソ日協会副理事長としてソ日間の民間交流の発展に大きく貢献している。また11年余りプラウダ紙の日本特派員として日本中をくまなく旅行し、閣僚から九州のミカン栽培者、北海道の漁民までの各界各層の人々に会って取材した。だから祝賀会での祝辞でも述べられたとおり、ラティシェフの書いたものはすべて、科学性が高く、権威や客観性、現実性に裏打ちされており、日本に関心を持っている人々は皆、ラティシェフの新著を歓迎するに違いない。



『日本人の家庭生活』の表紙

これまでソ連の文献では日本人の家庭生活の問題は、たとえば日本の歴史、経済、内政外交、文化などの問題のように十分に解明されていない。もちろん、ソ連の人々はこれまで、ソ連で翻訳された日本の多くの文芸作品やオフチンニコフの『桜の枝』、プロンニコフとラダノフの『日本人』、アルチュノフの『日本人の現代日常生活』とか、さまざまな論文などを通じて、日本関係の知識を汲み取ってきた。しかしこれらの本の著者たちは日本人のあれこれの家庭生活の問題を取り上げるさい、日本人のエキゾチックな諸要素の解明に没頭して、この20年間の日本の家庭構造の変化を見逃してきた。ラティシェフは豊富な事実資料を基に、日本人の家庭生活全体をとらえ、種々の原因による家庭生活の大きな変化の動きを示した。その点に本書の価値があり、またこれはこの分野のソ連で初めての研究でもある。

本書の六つの章で、著者は日本人の婚姻の慣習、家庭における夫と妻の関係、子供のしつけと教育の問題、高齢の両親、親戚、隣人との相互関係における傾向、家族の日常の生活様式と物質的、精神的水準を詳しく分析している。

現代の日本では幾世紀も続いてきた家族構造の土台が崩壊し、その土台の破片の上に婚姻と家族に関するこれまでの概念とは違う新しい構造が形成されていることが本書では詳細に述べられている。著書は、このような現象を家族法の質的に新しい原則を定めた新憲法を含む戦後の改革や多くの社会・経済的要素の影響で家族制度＝家（いえ）が崩壊したことにあると見ている。その結果、家族の問題では各人の個人的な利害が行動の決め手になり、過去のモラルが崩壊した。

しかし、著者が強調しているように日本では以前の家族構造の崩壊の過程と、どの先進資本主義諸国にも見られる新しい家族構造の形成過程が終わりに近づいているとはいえ、過去のさまざまな伝統が尾を引いてやはり日本の家族の一定の特殊性は今後も残ろう。今日、日本人の日常の家庭生活には西洋的なものと純日本的なものとが共存している。それにもかかわらず今日の日本は家庭生活でも、社会生活の他の分野でも、アジアの他の国々よりもはるかに速く民族的独自性がなくなりつつある。

日本人の家庭生活でも(他のあらゆる民族でもそうだが)、経済的、心理的、社会的、人口的、思想的、生理的諸問題が密接にからみ合っている。同時に数百万の家庭内部で起こっている過程は国の社会生活のすべての面に大きな影響を及ぼし、その経済、政治、文化の発展の重要な要因となっている。だからソ連の読者がラティシェフの新著を読めば、日本人に関する知識が正されるだけでなく、日本の生活の多くの面についての知識も著しく深まるだろう。

今日のソ連邦
一九八五年9月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03・447・3536）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）